

第Ⅱ部 基礎分析編

第Ⅱ部では、標準化調査で集められたデータのうち、「職業レディネス・テスト」のA、B、C検査への回答を使った基礎的な分析を中心として得られた結果を報告する。

第5章 中学生の職業レディネス

5-1 本章の目的

第5章では、中学生の職業レディネスについて分析した結果を報告する。最初に A 検査、B 検査、C 検査の各領域や志向性の平均値に関して、全体的な傾向をみる。さらに、男女別、学年別に平均値を整理し、傾向の違いがあるかどうかを検討する。

また、A 検査、C 検査の項目は特定の職業についての職務内容の記述と対応するため、54項目を職業名に置き換えてみたときに、どのような回答傾向が見られるのかについても検討する。54項目という限られた数の職業ではあるが、この分析によって、現代の中学生が関心をもつのはどのような職業なのか、自信をもつと回答しているのはどんな職業なのかを検討したい。

5-2 分析の対象

調査の方法は第3章「標準化調査の概要」に準ずる。本章では中学生のデータのみを取り上げる。分析の対象とした生徒の内訳は下記の通りである。

標準化調査に協力した全国38校の中学1年～3年生。38校のうち学校規模が300人未満の学校が17校、300人以上の学校が21校である。

人数の内訳は以下の通り。中学生計10,966名（1年男子1,905名、1年女子1,816名、2年男子1,825名、2年女子1,791名、3年男子1,866名、3年女子1,763名）。

5-3 分析方法と結果

5-3-1 各検査における平均値の比較

(1) 得点化の方法

本章の分析では、「職業レディネス・テスト第3版」として最終的に確定した A 検査、B 検査、C 検査の項目を使った。A 検査と C 検査は各54項目、B 検査は64項目である。A 検査では、「やりたい」を2点、「どちらともいえない」を1点、「やりたくない」を0点として採点した。B 検査では、「あてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点とした。C 検査では、「自信がある」を2点、「どちらともいえない」を1点、「自信がない」を0点とした。

A 検査と C 検査は興味の6領域が各9項目によって構成されるため、0～18点の範囲の値をとる。B 検査は、対情報関係志向（D 志向）と対人関係志向（P 志向）はそれぞれ24項目なので0～24点の範囲をとり、対物関係志向は16項目のため、得点は0～16点の範囲とな

る。

(2) 中学生全体の傾向

まず、A 検査、B 検査、C 検査について、各興味領域、志向性毎に中学生全体の平均値と標準偏差(SD)を算出した。その結果を図表 5-1 に示す。平均値は、個人の各領域の合計点を中学生全体で合計し、全体の人数で除して算出している。

職業興味を測定する A 検査をみると、平均値が高い方から順に A→S→E→R→C→I となる。このうち 6.00 以上なのは A、S、E の 3 領域で、中学生全体として見た時、芸術的領域 (A)、社会的領域 (S)、企業的領域 (E) に関心が高いことがわかる。

同じ項目を使って職務遂行の自信度を調べる C 検査の平均値を見ると、高い方から順に、S→A→R→C→E→I 領域となっている。興味と比べると自信の順位には領域によってずれがある。社会的領域 (S) が高いのはほぼ一致するが、芸術的領域 (A) とは順位が入れ替わっている。芸術的領域は興味に比べ、自信の平均値が低い。また、企業的領域 (E) は興味に比べると自信が低くなる。逆に、手工技能系の仕事や作業に関連する現実的領域 (R) や事務作業などの定型的な仕事や作業に関連する慣習的領域 (C) は興味に比べると自信が高くなる。研究的領域 (I) はどちらも低い。

基礎的志向性を測定する B 検査の結果をみると、対情報関係志向 (D) が 10.24、対人関係志向 (P) は 14.85、対物関係志向 (T) は 7.51 となっている。ただし、D 志向と P 志向は 24 項目、T 志向は 16 項目なので、単純に比較はできないが、仮に T 志向を 1.5 倍した値を算出してみると 11.27 となり、P 志向が他に比べて少し高くなっていることがわかる。

図表 5-1 中学生全体の各尺度の平均値と標準偏差(SD)

領域	R 領域	I 領域	A 領域	S 領域	E 領域	C 領域	D 志向	P 志向	T 志向
A 検査	5.47 (5.01)	4.94 (4.80)	6.82 (4.82)	6.44 (4.63)	6.34 (4.38)	4.97 (4.39)			
B 検査							10.24 (4.97)	14.85 (5.05)	7.51 (3.87)
C 検査	5.34 (5.10)	4.37 (4.72)	5.74 (4.57)	6.50 (4.68)	5.25 (4.44)	5.31 (4.80)			

※ () 内は標準偏差

(3) 男女間の平均値の比較

次に、職業興味の 6 類型 (RIASEC) について、男女別に平均値を算出した結果を検討する。各領域の A 検査、C 検査の平均値を、男女別に算出した結果を図に示した (図表 5-2、図表 5-3)。まず、図表 5-2 と図表 5-3 を比べて言えることは、プロフィールの形状をみると明確なように、男子と女子では、興味の 6 領域の傾向がかなり違っているということである。

男女別に特徴をみると、男子は R 領域が興味 (A 検査)・自信 (C 検査) とともに突出している。続いて、興味では、E→I→A→C→S の順、自信では、I→E→C→S→A の順になって

いる。R の他はほぼ横並びで、それほど大きな違いはない(図表 5-2)。女子は A・S 領域が興味 (A 検査)・自信 (C 検査) とともに突出し、E・C 領域は男子と同程度、R・I 領域は男子に比べて著しく低い(図表 5-3)。

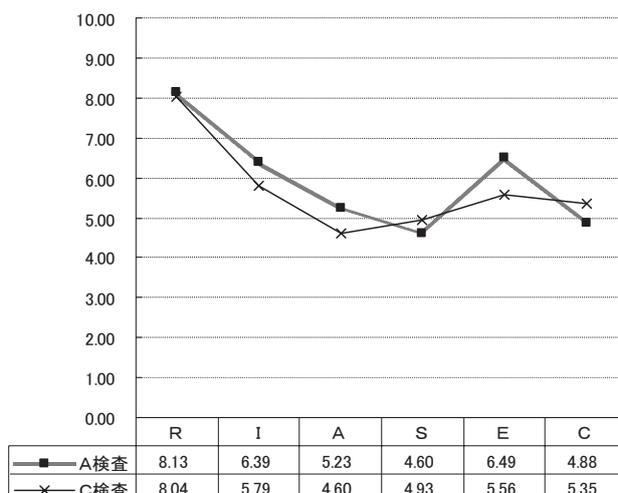
さらに、興味 (A 検査) と自信 (C 検査) の傾向の違いをみる。I・A・E 領域では男女ともに自信 (C 検査) より興味 (A 検査) の値が高い。男子では、逆に、S・C 領域で興味 (A 検査) より自信 (C 検査) の値が若干高くなっている。また男女ともに、R 領域では興味 (A 検査) と自信 (C 検査) がほぼ一致する。

基礎的志向性 (DPT) については、男女の結果をまとめて図表 5-4 に示した。P 志向の得点は男子より女子で高く、T 志向の得点は僅差だが男子の方が高い。D 志向については男女ともほぼ同程度であった。

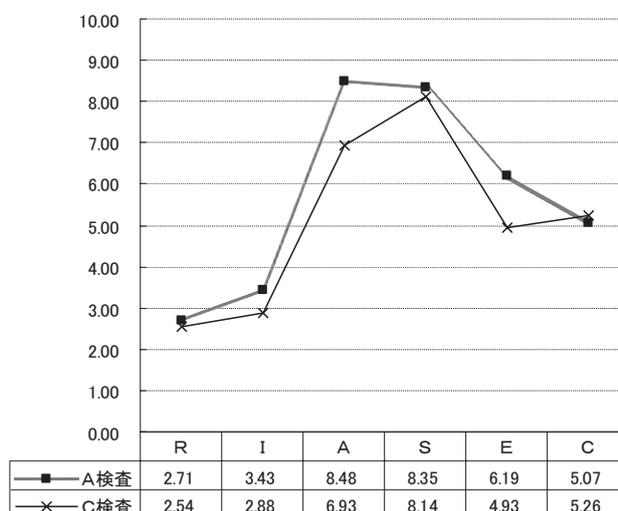
以上の結果は中学生に特有の特徴であるかどうか懸念されるため、高校生の男女別の平均値を参照してみた

(高校生の結果の詳細は第 6 章で述べる)。その結果、全般的な傾向は中学生も高校生も似ているが、男子では I 領域において興味 (A 検査)・自信 (C 検査) とともに高校生より中学生が高く、女子では A 領域において興味 (A 検査)・自信 (C 検査) とともに高校生より中学生が高く、C 領域において興味 (A 検査)・自信 (C 検査) とともに高校生より中学生が低くなっていた。

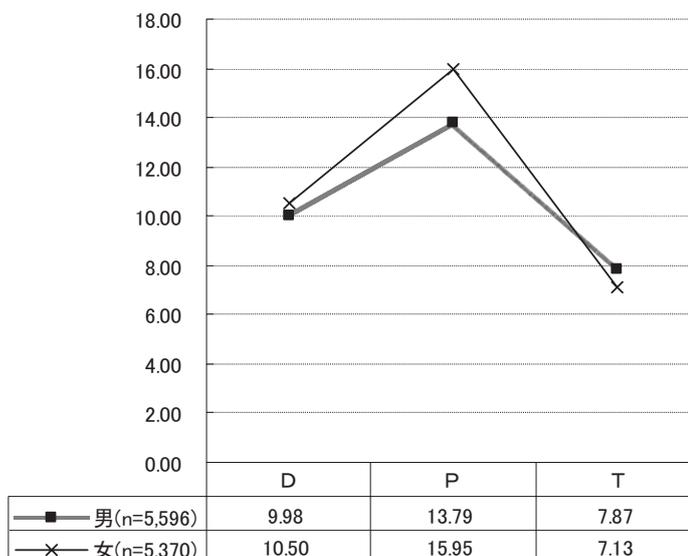
図表5-2 中学校 A検査、C検査の男子の平均値(n=5,596)



図表5-3 中学校 A検査、C検査の女子の平均値(n=5,370)



図表5-4 中学校 B検査の男女別平均値



(4) 学年間の平均値の比較

職業興味の6類型(RIASEC)について学年別に平均値を算出した結果を検討する。各領域のA検査、C検査の平均値を、学年別に算出した結果を図に示した(図表5-5、図表5-6、図表5-7)。

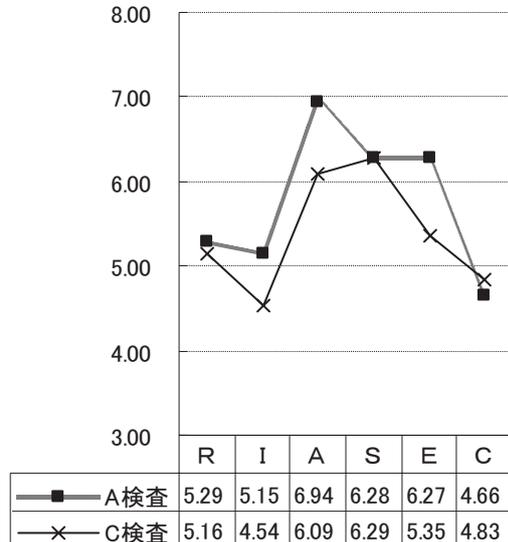
中学校1年生ではA検査の職業興味をみると、高い順に、A→S→E→R→I→Cとなっている。他方、C検査の自信は、S→A→E→R→C→Iとなっている。R領域、S領域、C領域は興味も自信もほぼ同程度であるが、A領域、E領域、I領域は自信よりも興味の方が高くなっている(図表5-5)。

中学2年生では、A検査の興味は高い順にA→S→E→R→C→Iとなっている。C検査の自信は高い順に、S→A→R→E、C→Iとなっている。2年生も1年と同様に、興味と自信がほぼ一致しているのがR領域、S領域、C領域で、A領域、E領域、I領域は興味の方が、自信よりも高い(図表5-6)。

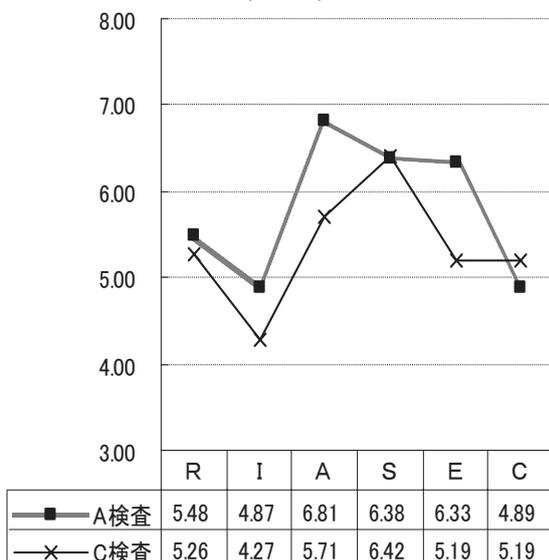
中学3年生では、A検査の興味では、高い順にA→S→E→R→C→Iである。C検査の自信では、S→C→R→A→E→Iとなっている。興味と自信の一致度の傾向は、1年生、2年生と同様である(図表5-7)。

各学年の結果を踏まえて、A検査、C検査の検査別に3学年を比較したグラフが図表5-8

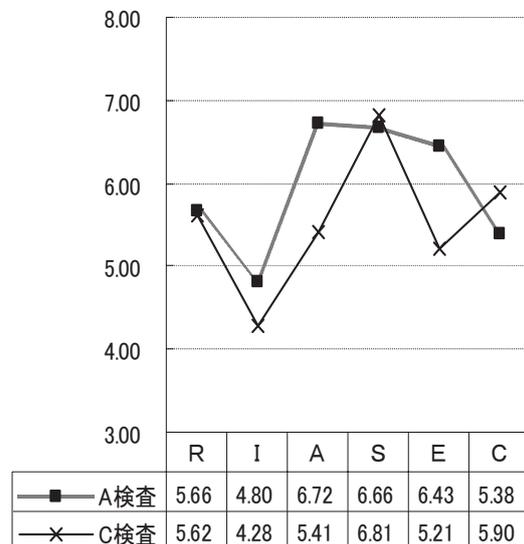
図表5-5 A検査C検査 中学校1年生の平均値 (n=3721)

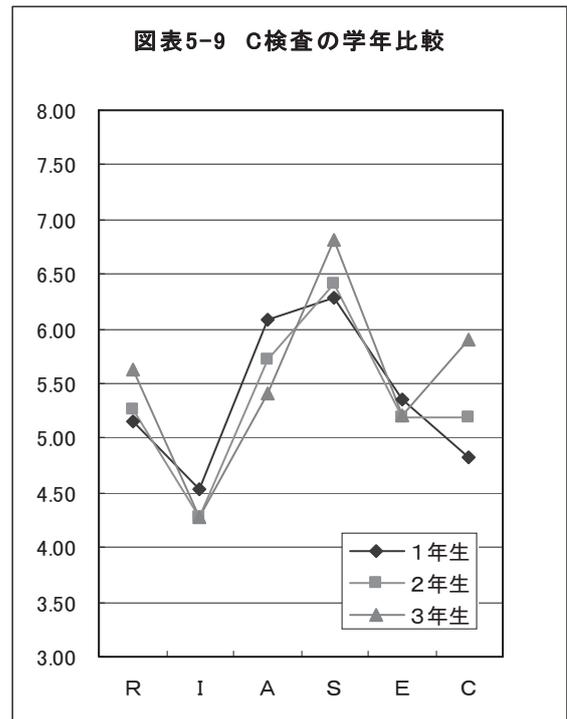
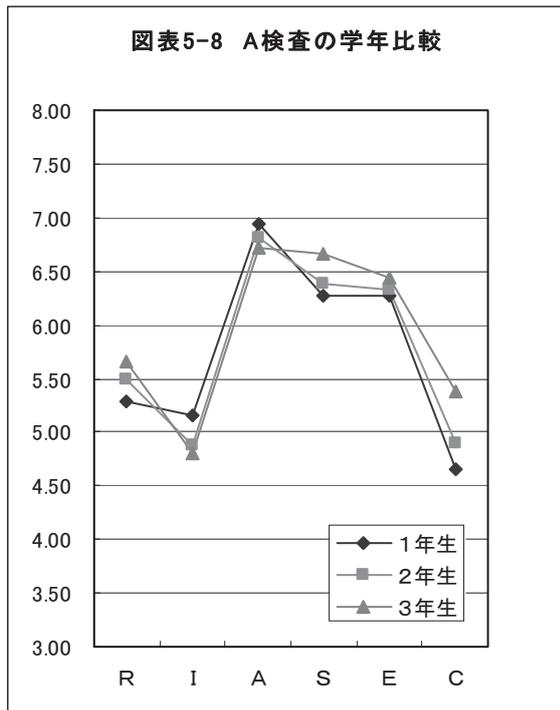


図表5-6 A検査C検査 中学校2年生の平均値 (n=3616)



図表5-7 A検査C検査 中学校3年生平均値 (n=3629)



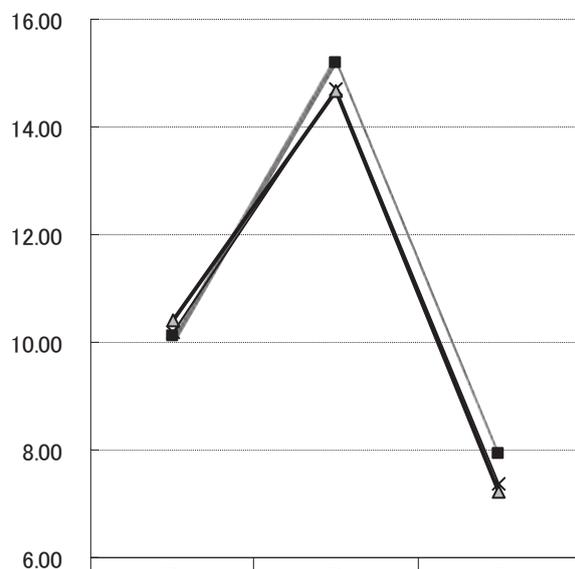


および図表 5-9 である。職業の 6 領域に関して、興味、自信とも学年による大きな違いはみられない。ただ、領域毎に学年での変化をみると、R 領域、S 領域、C 領域は、学年を追って、興味も自信も高くなる。

特に C 領域において中学 3 年生は 1 年生及び 2 年生より自信が高くなっている。I 領域や A 領域のような専門性の高い仕事が多く含まれる領域に関しては、1 年生より 2 年生、3 年生で興味も自信も低くなる。これは学年が上になるとともに現実的になることが回答に反映されているようで興味深い点である。

次に、B 検査の基礎的志向性について 3 学年の平均

図表5-10 B検査 中学校 学年別平均値



	D	P	T
1年生(n=3721)	10.12	15.19	7.92
2年生(n=3616)	10.18	14.69	7.36
3年生(n=3629)	10.41	14.67	7.22

値を一つのグラフにまとめた結果が図表 5-10 である。D 志向、P 志向、T 志向に関して学年による大きな差はみられない。なお、少しずつではあるが、D 志向は学年とともに高くなるが、P 志向と T 志向は 1 年生が最も高く、2 年生、3 年生になるにつれて低くなることが示

されている。

5-3-2 職業興味と自信からみた職業名の並び順の比較

(1) 分析方法

A 検査と C 検査を構成している 54 項目は、それぞれ個別の職業についての職務内容を反映している。そこで、各項目を職業名におきかえ、職業名毎に、興味については、「やりたい」、「どちらともいえない」「やりたくない」の各回答の度数、自信については、「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」の各回答の度数を算出した。

職業興味や自信については、5-3-1 における分析の結果から、学年間の変化よりも男女間の違いの方が大きいことがわかったので、やりたい職業、自信のある職業に関して、男女で傾向の違いを比較した。

(2) 男女間の比較

A 検査と C 検査のそれぞれにおいて、「やりたい」、「自信がある」という回答の頻度が高かった順に項目を並べ替えた。項目は職業名に置き換えている。A 検査に関する男子の結果が図表 5-11、女子の結果が図表 5-12、C 検査の男子の結果が図表 5-13、女子の結果が図表 5-14 である。なお、すべての図表において、「やりたい」と回答した割合が平均以上の職業を灰色に網掛けし、その上で「自信がある」と回答した割合が平均以上の職業を斜体で示している。これらの図表は本章末に掲載した。

まず、A 検査の職業興味の結果をもとに、「やりたい」－「やりたくない」職業について男女の違いを比較してみよう。A 検査についての男子の回答（図表 5-11）をみると、男子は上位に「機械組立工」、「建築大工」、「漁師」など R 領域の職業が多い。下位には「行政書士」、「一般事務員」など C 領域の職業と、「看護師」、「航空客室乗務員」、「介護福祉士」など S 領域の職業が並ぶ。他方の女子は（図表 5-12）、上位に「保育士」、「航空客室乗務員」、「ホテルフロント係」など S 領域の職業と、「服飾デザイナー」、「インテリアデザイナー」、「イラストレーター」など A 領域の職業が並ぶ。下位には、「自動車整備工」、「トラック運転手」、「建設機械オペレーター」など R 領域の職業と、「植物学研究者」、「研究者」、「海洋学研究者」など I 領域の職業が並ぶ。

次に、C 検査の自信度の結果にもとづき、「自信がある」－「自信がない」職業について男女を比較する。男子の回答をみると（図表 5-13）、上位に「機械組立工」、「建築大工」、「漁師」など R 領域の職業が並ぶ。下位には「行政書士」、「一般事務員」など C 領域の職業と、「看護師」、「医師」など S 領域の職業と、「文芸作家」、「シナリオライター」など A 領域の職業が入り混じっている。他方の女子は（図表 5-14）、上位に「保育士」、「ホテルフロント係」、「介護福祉士」など S 領域の職業が並ぶ。下位には「自動車整備士」、「航空機整備士」など

Rの要素が強い職業と、「研究者」、「植物学研究者」、「海洋学研究者」などI領域の職業が並ぶ。

さらに、「やりたい」—「やりたくない」職業（図表 5-11、図表 5-12）と、「自信がある」—「自信がない職業」（図表 5-13、図表 5-14）とを比較する。

まず、男子について図表 5-11 をみると、「やりたい」と回答した人の割合が平均以上である 23 の職業のうち「自信がある」と回答した人の割合も平均以上である職業は 16 あり、1 位から 13 位までの全てを含む。その多くは既に見たように R 領域の職業である。逆に「やりたい」人は平均以上だが「自信がある」人が平均以下の職業には、「会社社長」、「チームリーダー」、「放送ディレクター」などの E 領域の職業が多い。同様の手順で図表 5-13 をみると、「自信がある」人は平均以上だが「やりたい」人が平均以下の職業には、「経理事務員」、「庶務係事務員」など C 領域の職業が多い。また「自信がある」人の割合も「やりたい」人の割合も平均以下の職業は、図表 5-13 の下から 15 位までの職業全てが該当し、「文芸作家」、「シナリオライター」など A 領域の職業と、「看護師」、「医師」、「旅行会社添乗員」など S 領域の職業と、「行政書士」、「一般事務員」など C 領域の職業が並んでいる。

次に、女子について図表 5-12 をみると、「やりたい」と回答した人の割合が平均以上である 24 の職業のうち「自信がある」と回答した人の割合も平均以上である職業は 20 あり、1 位から 20 位までの全てを含む。その多くは先に見たように S 領域の職業と A 領域の職業である。逆に「やりたい」人は平均以上だが「自信がある」人は平均以下の職業には、「マンガ家」、「文芸作家」、「シナリオライター」など A 領域の職業が多い。同様の手順で図表 5-14 をみると、「自信がある」人は平均以上だが「やりたい」人が平均以下の職業には、「一般事務員」、「庶務係事務員」、「銀行出納係」など男子と同じく C 領域の職業が多い。また「自信がある」人も「やりたい」人も平均以下の職業は、図表 5-14 の下から 25 位までの職業全てが該当し、「自動車整備士」、「航空機整備士」、「建設機械オペレーター」など R 領域の職業と、「研究者」、「植物学研究者」、「海洋学研究者」など I 領域の職業が多い。

（3）職業名からみた男女比較に関するまとめ

以上により、男女で共通する傾向を述べる。「やりたい」人が多い職業と「自信がある」人が多い職業、また「やりたくない」人が多い職業と「自信がない」人が多い職業とはほぼ一致していた。その一致度は女子の方が高いように思われる。また、「やりたい」人は少ないが「自信がある」人が多い職業は、男女ともに C 領域、すなわち一定の規則や決まりに従い同じことを繰り返す作業や活動が多い職業で多くみられた。

逆に、男女で異なる傾向は以下のとおりである。まず「やりたい」人も「自信がある」人も平均以上の職業は、男子では R 領域、女子では S 領域と A 領域の職業に多い。次に「やりたい」人は平均以上だが、「自信がある」人は平均以下の職業は、男子では E 領域が多いが、女子では A 領域の職業が多かった。E 領域は管理、経営、企画といったリーダーシップ

や独立心が求められる活動を多く含む職業であるため、興味はあっても自信が伴わないようである。A 領域は芸術的な要素が強く、独創性が求められる仕事で、興味は高くても、やはり才能や専門性ということを考え、自信が低くなるのであろう。また、「やりたい」も「自信がある」も平均以下となった職業には、男子では A 領域と S 領域の職業が多く、女子では R 領域と I 領域の職業が多かった。A 検査でも C 検査でも、やりたい、あるいは自信のある職業とやりたくない、自信がないという職業の領域は、前述した RIASEC の各領域の平均値にみられる男女差を反映している。

5-4 まとめ

本章では、職業レディネス・テストで測定された A 検査、B 検査、C 検査の結果をもとに、中学生の職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度の平均値や回答傾向を分析した。

男女間の違い、学年間の違いという視点から各興味領域や志向性について平均値等を比較したが、学年間の違いよりは、男女間の違いが明確に示された結果となった。また、基礎的志向性よりは職業興味や職務遂行の自信度で男女差が明確にみられた点は興味深い。つまり日常生活の行動レベルでは男女の差はそれほど大きくないが、職業活動という観点からみると、男子が好む仕事、女子が好む仕事が中学生のときから既にはっきりと分かれていることがわかった。すなわち、男子は R 領域にみられる機械やものを扱う仕事、あるいは I 領域のような研究的な活動、E 領域のような管理、企画関係の仕事を好み、女子は S 領域のような対人サービスを多く含む仕事や A 領域のような芸術的領域の仕事を好む。

他方、興味と自信との関連であるが、6 つの職業領域についての平均値や選択者の度数を検討したところ、興味と自信が一致する領域、不一致の領域があることがわかった。男女の違いはあるが、おおむね、R、I、S 領域は興味と自信が一致するようである。それに対して、A 領域や E 領域は興味が自信よりも高く、C 領域は興味よりは自信の方が高くなる。A 領域や E 領域には、専門的なスキルあるいは才能が求められる仕事が多く含まれるが、こういった場合には、興味に比べ、自信は低くなるようである。一方、慣習的領域としての C 領域の項目には、パソコンを扱った事務的な仕事が多く含まれる。現代の中学生はパソコンに慣れているので、この種の仕事には十分に自信をもてるのであろう。

男女間での職業興味の違いが、高校生、あるいはそれ以上になって同じような傾向を見せるのか、あるいは変化するのかという問題、また、中学生でみられた興味と自信の関係が高校生以上になってどのようなレベルの変化をみせるのか、発達的に検討すると大変興味深い問題であると思われる。

なお、本報告書では、第 6 章で高校生を対象とした分析を行ない、興味と自信との差については第 8 章で詳しく検討する。

図表 5-11 A 検査「やりたい職業」全項目頻度 男子(n=5,596)

A検査 順位	C検査 順位	職業名	項目 番号	興味 の 6 類型	A検査(%)			C検査(%)
					やりたい	どちらとも	やりたくない	自信ある
					平均 17.7% SD 8.2	30.8%	51.5%	17.4% 7.4
1	1	機械組立工	1	R	44.5	29.8	25.7	41.4
2	5	古生物学者	2	I	36.3	26.8	36.9	29.7
3	2	建築大工	13	R	35.8	36.1	28.2	33.8
4	11	商店経営者	5	E	34.1	37.2	28.7	24.4
5	3	漁師	49	R	29.8	32.0	38.2	31.5
6	7	自動車整備工	37	R	28.9	32.2	38.9	29.2
7	12	花火師	7	R	28.2	32.1	39.8	23.1
8	10	消防士	19	R	27.6	32.8	39.6	25.0
9	6	建設機械オペレーター	25	R	24.4	32.1	43.5	29.3
10	13	店長	47	E	23.4	33.1	43.5	19.8
11	16	科学研究者	50	I	22.9	30.4	46.7	18.4
12	4	トラック運転手	31	R	22.5	33.1	44.4	30.7
13	9	コンピュータ・オペレータ	6	C	22.2	29.7	48.1	25.7
14	29	会社社長	41	E	22.1	34.3	43.6	15.2
15	35	薬学者	38	I	20.8	27.4	51.8	14.0
16	14	事務機器操作員	36	C	19.4	33.4	47.2	18.7
17	15	学芸員	44	I	18.8	31.3	50.0	18.6
18	25	チームリーダー	23	E	18.7	32.3	49.0	16.0
19	38	作曲家	39	A	18.6	30.0	51.4	13.1
20	20	航空機整備士	43	R	18.6	31.7	49.8	17.1
21	39	放送ディレクター	11	E	18.5	36.6	44.9	12.9
22	18	海洋学研究者	20	I	18.5	31.3	50.3	17.8
23	23	WEBデザイナー	33	A	18.1	28.8	53.2	16.0
24	26	営業課長	53	E	17.5	32.4	50.1	16.0
25	8	保育士	4	S	17.5	33.2	49.3	28.5
26	21	化学試験分析員	8	I	17.5	39.2	43.4	16.9
27	32	研究者	26	I	17.4	29.8	52.8	14.7
28	34	細菌学研究者	32	I	17.4	26.2	56.4	14.3
29	30	インテリアデザイナー	3	A	17.1	36.7	46.2	14.9
30	44	マンガ家	27	A	17.0	27.2	55.8	11.6
31	31	商業カメラマン	15	A	15.3	31.0	53.7	14.8
32	21	コンピュータ・プログラマー	42	C	15.2	23.4	61.5	16.9
33	36	アナウンサー	35	E	14.8	28.3	56.9	13.8
34	33	販売促進員	17	E	13.8	36.0	50.2	14.5
35	41	植物学研究者	14	I	12.6	32.6	54.8	12.4
36	17	経理事務員	12	C	12.4	33.7	53.9	18.0
37	49	シナリオライター	21	A	12.3	28.1	59.6	10.2
38	45	服飾デザイナー	45	A	12.2	23.7	64.2	11.5
39	47	イラストレーター	51	A	11.8	24.6	63.6	10.8
40	23	銀行出納係	24	C	11.7	34.4	53.9	16.0
41	27	給与事務員	54	C	11.4	28.4	60.2	15.9
42	52	文芸作家	9	A	11.1	26.6	62.4	8.4
43	46	新聞記者	29	E	11.0	31.3	57.8	11.0
44	28	ホテルフロント係	22	S	10.4	35.1	54.5	15.6
45	19	庶務係事務員	18	C	10.4	28.7	61.0	17.4
46	51	医師	40	S	10.2	28.8	61.0	8.7
47	43	児童相談員	46	S	10.2	30.8	59.0	11.8
48	40	指圧マッサージ師	10	S	10.1	27.1	62.7	12.7
49	48	旅行会社添乗員	16	S	10.0	27.6	62.4	10.3
50	42	介護福祉士	34	S	9.8	33.4	56.9	11.8
51	37	航空客室乗務員	52	S	9.0	28.8	62.2	13.8
52	53	看護師	28	S	6.8	27.8	65.4	8.1
53	50	一般事務員	48	C	5.8	27.4	66.8	9.8
54	54	行政書士	30	C	3.9	24.1	72.0	5.9

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 5-12 A 検査「やりたい職業」全項目頻度 女子 (n=5,370)

A検査 順位	C検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	A検査(%)			C検査(%)
					やりたい	どちらとも	やりたくない	自信ある
					平均 18.5%	26.5%	55.1%	15.7%
					SD 12.5	7.6	17.9	11.0
1	1	保育士	4	S	60.3	23.5	16.2	61.5
2	2	服飾デザイナー	45	A	55.4	27.2	17.4	40.0
3	6	インテリアデザイナー	3	A	43.9	36.3	19.9	29.3
4	7	イラストレーター	51	A	36.2	27.1	36.7	29.1
5	15	作曲家	39	A	32.5	34.5	32.9	20.4
6	5	航空客室乗務員	52	S	31.2	33.3	35.5	29.5
7	12	WEBデザイナー	33	A	30.5	29.4	40.2	23.5
8	12	商業カメラマン	15	A	30.5	31.3	38.2	23.4
9	3	ホテルフロント係	22	S	30.4	38.2	31.3	33.2
10	8	児童相談員	46	S	29.9	33.9	36.2	28.8
11	24	商店経営者	5	E	29.2	38.6	32.2	15.8
12	9	看護師	28	S	27.4	31.1	41.6	25.8
13	4	介護福祉士	34	S	27.0	39.0	34.0	29.7
14	11	旅行会社添乗員	16	S	25.5	30.5	44.0	24.3
15	10	コンピュータ・オペレータ	6	C	24.7	29.3	46.0	25.4
16	22	医師	40	S	23.2	30.1	46.7	16.9
17	14	事務機器操作員	36	C	23.2	32.7	44.2	21.5
18	17	販売促進員	17	E	22.9	38.7	38.4	19.3
19	19	アナウンサー	35	E	22.9	28.6	48.6	18.2
20	21	営業課長	53	E	22.7	34.1	43.2	17.4
21	28	マンガ家	27	A	20.8	23.9	55.3	13.6
22	26	文芸作家	9	A	20.5	27.6	51.9	13.8
23	29	放送ディレクター	11	E	20.2	35.7	44.2	12.4
24	27	シナリオライター	21	A	20.0	29.9	50.2	13.7
25	20	指圧マッサージ師	10	S	17.1	30.7	52.1	17.8
26	30	店長	47	E	15.9	31.9	52.2	11.9
27	23	銀行出納係	24	C	14.5	35.1	50.5	16.6
28	18	庶務係事務員	18	C	14.4	30.2	55.4	18.6
29	16	一般事務員	48	C	13.8	31.0	55.2	19.6
30	40	薬学者	38	I	13.6	22.0	64.5	7.1
31	32	古生物学者	2	I	12.7	16.9	70.4	9.9
32	25	経理事務員	12	C	12.0	28.3	59.6	13.9
33	42	花火師	7	R	11.9	21.8	66.3	6.5
34	33	新聞記者	29	E	10.7	29.6	59.7	9.4
35	47	会社社長	41	E	10.6	27.3	62.1	6.1
36	46	科学研究者	50	I	10.3	18.7	71.0	6.3
37	34	学芸員	44	I	10.0	20.6	69.5	9.3
38	45	細菌学研究者	32	I	9.9	17.1	73.0	6.3
38	31	給与事務員	54	C	9.9	25.2	64.8	11.5
40	36	チームリーダー	23	E	9.2	26.2	64.6	8.0
41	38	化学試験分析員	8	I	8.8	29.2	61.9	7.7
42	43	消防士	19	R	8.7	22.0	69.2	6.4
43	35	コンピュータ・プログラマー	42	C	8.3	15.1	76.6	8.3
44	41	建築大工	13	R	8.1	22.2	69.8	6.7
45	37	機械組立工	1	R	8.1	18.9	73.0	7.9
46	49	海洋学研究者	20	I	7.2	17.0	75.8	5.7
47	39	行政書士	30	C	6.7	25.8	67.5	7.6
48	43	漁師	49	R	6.4	14.0	79.6	6.4
49	51	研究者	26	I	6.3	16.5	77.3	4.8
50	50	植物学研究者	14	I	5.2	17.5	77.3	4.9
51	53	航空機整備士	43	R	4.7	18.9	76.4	3.8
52	52	建設機械オペレーター	25	R	4.4	10.4	85.2	4.4
53	48	トラック運転手	31	R	4.4	13.3	82.4	5.9
54	54	自動車整備工	37	R	2.8	10.8	86.4	2.8

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 5-13 C検査「自信がある職業」全項目頻度 男子(n=5,596)

C検査 順位	A検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	C検査(%)			A検査(%) やりたい 8.2 17.7%
					自信ある 平均 17.4% SD 7.4	どちらとも 28.7% 3.1	自信ない 53.9% 9.1	
1	1	機械組立工	1	R	41.4	28.0	30.5	44.5
2	3	建築大工	13	R	33.8	31.7	34.6	35.8
3	5	漁師	49	R	31.5	32.6	35.9	29.8
4	12	トラック運転手	31	R	30.7	32.2	37.1	22.5
5	2	古生物学者	2	I	29.7	30.3	40.0	36.3
6	9	建設機械オペレーター	25	R	29.3	31.4	39.3	24.4
7	6	自動車整備工	37	R	29.2	30.3	40.5	28.9
8	25	保育士	4	S	28.5	25.2	46.3	17.5
9	13	コンピュータ・オペレータ	6	C	25.7	25.7	48.6	22.2
10	8	消防士	19	R	25.0	29.6	45.4	27.6
11	4	商店経営者	5	E	24.4	34.1	41.5	34.1
12	7	花火師	7	R	23.1	33.8	43.2	28.2
13	10	店長	47	E	19.8	31.1	49.1	23.4
14	16	事務機器操作員	36	C	18.7	25.5	55.8	19.4
15	17	学芸員	44	I	18.6	30.4	51.0	18.8
16	11	科学研究者	50	I	18.4	28.3	53.3	22.9
17	36	経理事務員	12	C	18.0	27.3	54.7	12.4
18	22	海洋学研究者	20	I	17.8	31.9	50.3	18.5
19	45	庶務係事務員	18	C	17.4	26.1	56.5	10.4
20	20	航空機整備士	43	R	17.1	31.4	51.5	18.6
21	26	化学試験分析員	8	I	16.9	33.0	50.1	17.5
21	32	コンピュータ・プログラマー	42	C	16.9	22.8	60.2	15.2
23	40	銀行出納係	24	C	16.0	33.2	50.7	11.7
23	23	WEBデザイナー	33	A	16.0	28.0	56.0	18.1
25	18	チームリーダー	23	E	16.0	27.0	57.0	18.7
26	24	営業課長	53	E	16.0	32.1	51.9	17.5
27	41	給与事務員	54	C	15.9	30.9	53.2	11.4
28	44	ホテルフロント係	22	S	15.6	31.3	53.1	10.4
29	14	会社社長	41	E	15.2	29.2	55.6	22.1
30	29	インテリアデザイナー	3	A	14.9	30.8	54.3	17.1
31	31	商業カメラマン	15	A	14.8	31.9	53.4	15.3
32	27	研究者	26	I	14.7	29.6	55.7	17.4
33	34	販売促進員	17	E	14.5	32.3	53.3	13.8
34	28	細菌学研究者	32	I	14.3	25.7	60.1	17.4
35	15	薬学者	38	I	14.0	26.2	59.8	20.8
36	33	アナウンサー	35	E	13.8	25.5	60.8	14.8
37	51	航空客室乗務員	52	S	13.8	31.9	54.3	9.0
38	19	作曲家	39	A	13.1	27.5	59.4	18.6
39	21	放送ディレクター	11	E	12.9	29.0	58.1	18.5
40	48	指圧マッサージ師	10	S	12.7	27.1	60.2	10.1
41	35	植物学研究者	14	I	12.4	30.0	57.7	12.6
42	50	介護福祉士	34	S	11.8	26.0	62.2	9.8
43	47	児童相談員	46	S	11.8	28.7	59.6	10.2
44	30	マンガ家	27	A	11.6	26.3	62.2	17.0
45	38	服飾デザイナー	45	A	11.5	23.2	65.4	12.2
46	43	新聞記者	29	E	11.0	28.8	60.2	11.0
47	39	イラストレーター	51	A	10.8	24.5	64.7	11.8
48	49	旅行会社添乗員	16	S	10.3	29.6	60.1	10.0
49	37	シナリオライター	21	A	10.2	23.3	66.5	12.3
50	53	一般事務員	48	C	9.8	28.7	61.5	5.8
51	46	医師	40	S	8.7	25.1	66.2	10.2
52	42	文芸作家	9	A	8.4	22.5	69.1	11.1
53	52	看護師	28	S	8.1	26.1	65.8	6.8
54	54	行政書士	30	C	5.9	25.9	68.3	3.9

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 5-14 C 検査「自信がある職業」全項目頻度 女子 (n=5,370)

C検査 順位	A検査 順位	職業名	項目 番号	興味 の6類 型	C検査(%)			A検査(%)
					自信ある	どちらとも	自信ない	やりたい
					平均 15.7% SD 11.0	25.4%	58.9%	18.5% 12.5
1	1	保育士	4	S	61.5	20.8	17.7	60.3
2	2	服飾デザイナー	45	A	40.0	34.2	25.8	55.4
3	9	ホテルフロント係	22	S	33.2	34.9	32.0	30.4
4	13	介護福祉士	34	S	29.7	32.0	38.4	27.0
5	6	航空客室乗務員	52	S	29.5	36.0	34.4	31.2
6	3	インテリアデザイナー	3	A	29.3	37.2	33.5	43.9
7	4	イラストレーター	51	A	29.1	28.5	42.4	36.2
8	10	児童相談員	46	S	28.8	33.5	37.7	29.9
9	12	看護師	28	S	25.8	29.6	44.6	27.4
10	15	コンピュータ・オペレータ	6	C	25.4	26.6	48.0	24.7
11	14	旅行会社添乗員	16	S	24.3	33.4	42.3	25.5
12	8	商業カメラマン	15	A	23.4	35.9	40.7	30.5
12	7	WEBデザイナー	33	A	23.5	31.0	45.5	30.5
14	17	事務機器操作員	36	C	21.5	25.8	52.7	23.2
15	5	作曲家	39	A	20.4	34.6	45.1	32.5
16	29	一般事務員	48	C	19.6	30.4	49.9	13.8
17	18	販売促進員	17	E	19.3	34.4	46.3	22.9
18	28	庶務係事務員	18	C	18.6	26.2	55.2	14.4
19	19	アナウンサー	35	E	18.2	28.1	53.7	22.9
20	25	指圧マッサージ師	10	S	17.8	30.6	51.6	17.1
21	20	営業課長	53	E	17.4	33.2	49.4	22.7
22	16	医師	40	S	16.9	27.7	55.4	23.2
23	27	銀行出納係	24	C	16.6	34.7	48.7	14.5
24	11	商店経営者	5	E	15.8	31.1	53.1	29.2
25	32	経理事務員	12	C	13.9	23.5	62.6	12.0
26	22	文芸作家	9	A	13.8	25.3	60.9	20.5
27	24	シナリオライター	21	A	13.7	27.5	58.8	20.0
28	21	マンガ家	27	A	13.6	24.9	61.6	20.8
29	23	放送ディレクター	11	E	12.4	29.9	57.7	20.2
30	26	店長	47	E	11.9	29.5	58.6	15.9
31	38	給与事務員	54	C	11.5	28.2	60.3	9.9
32	31	古生物学者	2	I	9.9	19.2	70.9	12.7
33	34	新聞記者	29	E	9.4	27.3	63.3	10.7
34	37	学芸員	44	I	9.3	21.7	69.0	10.0
35	43	コンピュータ・プログラマー	42	C	8.3	17.4	74.3	8.3
36	40	チームリーダー	23	E	8.0	21.6	70.4	9.2
37	45	機械組立工	1	R	7.9	17.2	74.9	8.1
38	41	化学試験分析員	8	I	7.7	21.9	70.4	8.8
39	47	行政書士	30	C	7.6	26.3	66.1	6.7
40	30	薬学者	38	I	7.1	19.0	73.9	13.6
41	44	建築大工	13	R	6.7	17.9	75.3	8.1
42	33	花火師	7	R	6.5	20.6	72.8	11.9
43	42	消防士	19	R	6.4	17.7	75.9	8.7
43	48	漁師	49	R	6.4	17.8	75.8	6.4
45	38	細菌学研究者	32	I	6.3	16.4	77.3	9.9
46	36	科学研究者	50	I	6.3	15.9	77.9	10.3
47	35	会社社長	41	E	6.1	21.2	72.6	10.6
48	53	トラック運転手	31	R	5.9	16.9	77.2	4.4
49	46	海洋学研究者	20	I	5.7	18.1	76.2	7.2
50	50	植物学研究者	14	I	4.9	16.7	78.4	5.2
51	49	研究者	26	I	4.8	15.7	79.5	6.3
52	52	建設機械オペレーター	25	R	4.4	13.4	82.2	4.4
53	51	航空機整備士	43	R	3.8	19.3	76.9	4.7
54	54	自動車整備工	37	R	2.8	11.6	85.6	2.8

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

第6章 高校生の職業レディネス

6-1 本章の目的

本章では、高校生の職業レディネスについて学年別および男女別の傾向を述べる。

職業への興味や自信は、様々な経験や環境の変化によって変化していく。学校から職業の世界へ移行する時期が近づくにつれて、子どもたちの職業に対する意識はより現実的なものに変化するはずである。本章の6-3-1では、高校生の職業への興味や自信は中学生と比べて、あるいは学年を上がることでどのように変化するか明らかにすることで、職業意識の発達過程を明らかにしたい^{注6-1}。

また、看護師がつい最近まで「看護婦」とよばれていたように、職業の中には、性別によって就くことが多い職業と少ない職業とがある。中学生（村松 2004）や高校生（尾嶋 2001、片瀬 2005 など）の進路選択にもジェンダーによって違いがあることが多くの研究で指摘されている。本章の6-3-2では、高校生の職業に対する志向性や、興味のある職業・自信のある職業を男女で比較することで、職業への興味や自信におけるジェンダー間の相違点を考察したい。

6-2 分析の対象

調査の方法は第3章「標準化調査の概要」に準ずる。本章では分析の対象として高校生のデータを取り上げた。分析の対象とした生徒の内訳は下記の通りである。

<分析対象>

標準化調査に協力した全国 62 校の高等学校の 1 年生～3 年生。

人数の内訳は以下の通り。高校生計 17,104 名（1 年男子 3,244 名、1 年女子 3,175 名、2 年男子 3,185 名、2 年女子 3,399 名、3 年男子 1,980 名、3 年女子 1,979 名）。

6-3 分析方法と結果

6-3-1 分析方法

はじめに、学年別に A 検査（職業への興味）、B 検査（基礎的志向性）、C 検査（職業への自信）の平均値の得点パターンを比較し、その結果を第5章で明らかにされた中学生の結果と比較する。次に、男女別に A 検査・B 検査・C 検査の平均値の得点パターンと「やりたい

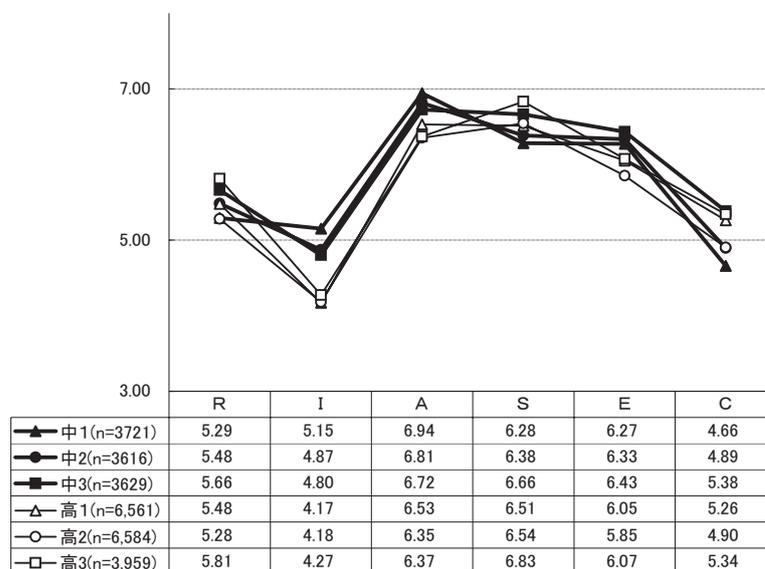
^{注6-1} 厳密に発達過程をみるためには、一つのコーホートをパネルとした調査が必要である。本調査のデータは横断的データであるため、同時点における複数のコーホートを比較することで、暫定的に発達過程について論じたい。

職業（A 検査）」と「自信がある職業（C 検査）」の順位を男女で比較する。

得点パターンの比較の際に用いる平均値は、以下の手順で算出された。A 検査と C 検査では、具体的な職業名ではなく大まかな仕事内容を提示し、被験者に「やってみたい（自信がある）」項目には「○」（2 点）、「やりたくない（自信がない）」項目には「×」（0 点）、「どちらともいえない」項目には「_」（1 点）を記入してもらう。その結果、各項目に 0～2 点の得点が与えられる。A 検査と C 検査の 54 の検査項目は 9 項目ずつ、R 領域（現実的領域）、I 領域（研究的領域）、A 領域（芸術的領域）、S 領域（社会的領域）、E 領域（企業的領域）、C 領域（慣習的領域）の 6 つの領域に分けられる。よって各領域に被験者 1 名あたり 0～18 点の得点が与えられる。図表 6-1、図表 6-2、図表 6-4、図表 6-5 に示された平均値は、6 領域それぞれについて全被験者の得点を合計したものを有効回答数で除したものである。同様に B 検査では日常の様々な活動について、「あてはまる」項目には「○」（1 点）、「あてはまらない」項目には「×」（0 点）を記入してもらう。その結果、各項目に 0～1 点の得点が与えられる。B 検査の 64 の検査項目は 24 項目が D 志向（対情報関係志向）、24 項目が P 志向（対人関係志向）、16 項目が T 志向（対物関係志向）の 3 つの志向に分けられる。よって被験者 1 名あたり D 志向・P 志向は 0～24 点、T 志向は 0～16 点の得点が与えられる。図表 6-3 と図表 6-6 に示された平均値は、3 つの志向それぞれについて全被験者の得点を合計したものを有効回答数で除したものである。全ての検査において、各項目に何も記入されなかった場合は欠損値とした^{注 6-2}。

6-3-2 学年別の傾向

本節では、高校生の職業志向性と基礎志向性を学年別に、また中学生と比較することで、高校生の職業意識の発達のありようを明らかにしたい。



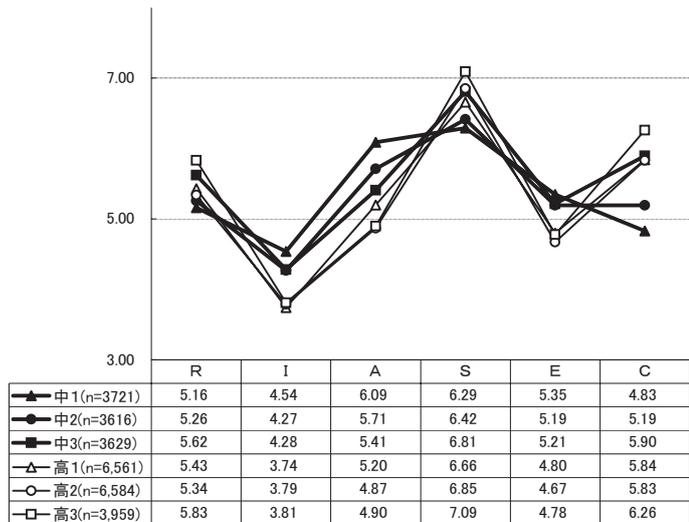
図表6-1 A検査 学年別中学・高校平均値

注 6-2 なお、次節から示す分析結果を導くために、平均値の比較を行う際には、学年別、男女別、検査年別に t 検定を実施したところ、ほぼ全ての組み合わせにおいてわずかな差であっても有意になった。

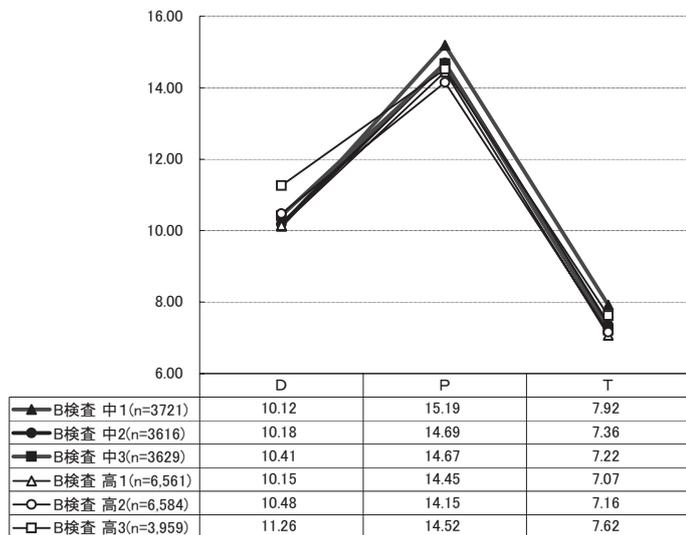
(1) 第3版の得点パターン

はじめに、高校生のみに
ついて大まかな傾向をみて
みよう。図表 6-1～図表 6-3
をみると、職業への興味と
自信、基礎的志向性の全て
において、どの学年もよく
似た形状となる。職業への
興味 (A 検査) は、A 領域

(芸術的領域)と S 領域(社
会的領域)がもっとも高く、
次いで E 領域(企業的領域)
と R 領域 (現実的領域)、
やや離れて C 領域 (慣習的
領域)と続き、I 領域 (研
究的領域)が最も低い。自信 (C 検査) は S 領域が突
出して高く、次いで C 領域、
R 領域、やや離れて A 領域
と E 領域が拮抗し、I 領域
が最も低い。興味 (A 検査)
と自信 (C 検査) とを比較
すると、I 領域・A 領域・E
領域は興味、S 領域・C 領



図表6-2 C検査 学年別中学・高校平均値



図表6-3 B検査 学年別中学・高校平均値

域は自信の方が高く、R 領域は興味と自信がほぼ一致する。基礎的志向性は、グラフをみるとどの学年も P 志向、D 志向、T 志向の順に高い。ただし、T 志向は項目数が少ないので、便宜的に得点を 2 分の 3 倍すると D 志向の平均値とそれほど変わらず、P 志向のみが高いことがわかる。学年別に見ると、どの検査においても全体に 3 年生の得点がやや高めだが、1、2 年生との差はそれほど大きくはなく、1 年生と 2 年生との差はごくわずかである。

しかし中学生と比較すると、高校生ならではの特徴が見える。まず職業への興味と自信(図表 6-1、図表 6-2)については、I 領域 (研究的領域)・A 領域 (芸術的領域)・E 領域 (企業的領域)は興味も自信も中学生の方が高く、S 領域 (社会的領域)は興味も自信も高校生の方が高い。R 領域 (現実的領域)と C 領域 (慣習的領域)は自信のみ高校生の方が高く、興味にはあまり違いがみられない。更に図表 6-1 と図表 6-2 を比較すると、高校生が興味と自信との間に違いが見られるのに対し、中学生のグラフは興味も自信も良く似た形状を示す。

基礎的志向性（図表 6-3）については、P 志向は全体に中学生の方が高く、D 志向はあまり違いが見られない。T 志向は中学では高学年ほど低くなり、高校では高学年ほど高くなる。

（2）考察

以上の結果を考察する。高校生のみで学年間の比較を行った場合は得点差があまりみられず、高校での3年間における発達について、それほどめだった傾向を見出すことはできなかった。しかし、中学生と高校生との比較を行った場合、いくつかの興味領域で大きな得点差が見出された。

中学生の方が職業への興味（A 検査）も自信（C 検査）も高かった I 領域・A 領域・E 領域には、高い学歴を必要とする研究職（I 領域）、「会社社長」や「商店経営者」のような人の上に立つ職業（E 領域）、「デザイナー」や「作曲家」といった華やかな世界の著名人（A 領域）を想像させる項目が多く含まれる。中学生の職業意識はいまだ憧れの段階にあるといえるだろう。

また、中学生も高校生も3つの基礎的志向性のうち P 志向が飛びぬけて高かった。中学生は、P 志向の値はむしろ高校生より高いにもかかわらず、S 領域の職業への自信は他領域と比べてさほど高くない。他方、高校生は職業への自信も興味も、対人サービス職業が多く含まれる S 領域（社会的領域）が最も高い値を示した。

更に、職業への自信について高校生の方が高い得点を示した R 領域や C 領域には、機械の操作や乗り物の運転、書類作成やコンピュータでのデータ処理など、専門学科の高校で学ぶスキルの使用が検査項目の文言に含まれる職業が多い。

以上より、高校生は職業への興味や自信を、自身の日常的な志向性や学校で学んだスキルと関連させて判断する傾向が中学生より高いといえる。また、特別な才能や多大な努力が必要な職業が多い I 領域・A 領域・E 領域の得点が中学生より低いことから、高校生が実際に就くことが可能かどうかという基準で、職業への興味や自信を判断している可能性も伺われる。高校生は中学生と比べると、職業への興味や自信についてより現実的で客観的な判断を下していることが示唆される。

6-3-3 男女別の傾向

本節ではまず、男女の職業志向性および基礎志向性を比較することによって、高校生の志向する職業が男女間でどのように異なるのかを明らかにする。

（1）職業への興味と自信の平均点

図表 6-4 と図表 6-5 より、職業への興味（A 検査）と自信（C 検査）について職業領域ごとの平均値を男女で比べると、大きな差がみられたのは R 領域（現実的領域）・I 領域（研究的領域）・A 領域（芸術的領域）・S 領域（社会的領域）である。興味と自信ともに R 領域と

I 領域は男子、S 領域は女子の方が高い。また女子の方が A 領域への興味が高かった。逆に男女差が最も小さいのは E 領域（企業的領域）への興味と C 領域（慣習的領域）への自信である。更に、興味（A 検査）と自信（C 検査）の得点の差を男女で比べると、男女とも I 領域・A 領域・E 領域は自信より興味が、C 領域は興味より自信が高く、R 領域は両者がほぼ一致する。S 領域でのみ男女で異なる傾向がみられ、女子は興味と自信がほぼ一致するが、男子は自信の方が高い。

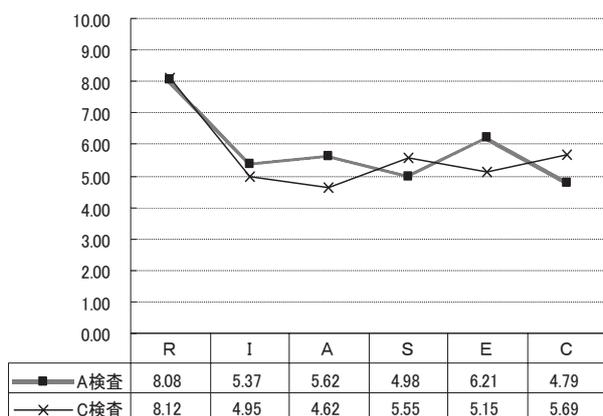


図6-4 高等学校 男子の平均値(n=8,409)

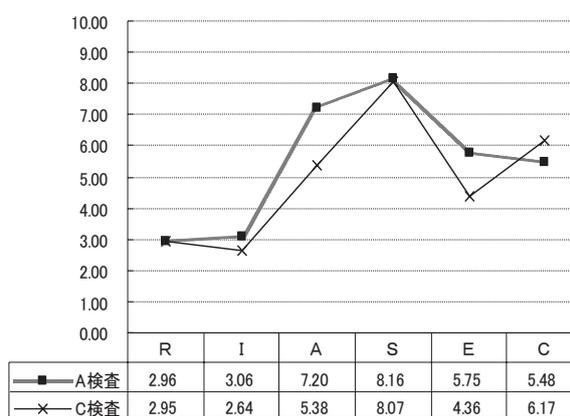


図6-5 高等学校 女子の平均値(n=8,695)

次に、基礎的志向性（B 検査）について平均値を男女で比較すると（図表 6-6）、男女ともに P 志向、D 志向、T 志向の順に高い。D 志向は男女がほぼ一致した。T 志向は男子、P 志向は女子の方が高い。

以上をまとめる。職業への興味、自信、基礎的志向性すべてにおいて、男子は物を扱うこと（R 領域、T 志向）、女子は対人関係に関する指標（S 領域、P 志向）で高い得点を示した。物事を企画・運営・管理する職業（E 領域）への興味や、決まりに従い同じことを繰り返す職業（C 領域）への自信、情報を扱うことへの志向性（D 志向）には男女であまり差がみられなかった。

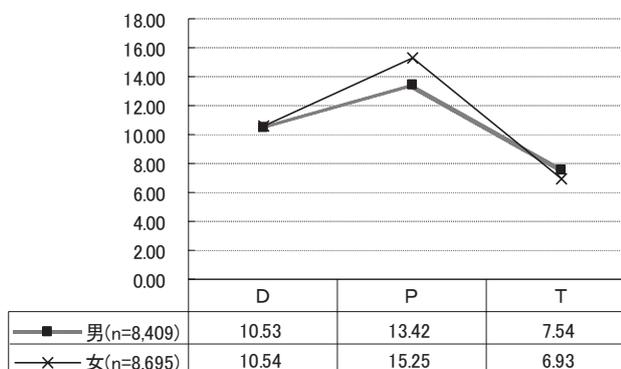


図6-6 高等学校 男女別平均値(B検査)

（2）「やりたい」職業・「自信がある」職業

個々の職業に目を向けた場合、どのような男女の違いや共通点がみえるだろうか。図表 6-7～図表 6-10（本章末に一括して掲載）は A 検査（職業への興味）と C 検査（職業への自信）

の結果を男女別に示したもので、54の検査項目が表す職業を、図表6-7と図表6-8では「やりたい」と答えた者の割合が高い順に、図表6-9と図表6-10では「自信がある」と答えた者の割合が高い順に並べた。各項目のパーセンテージは「やりたい」「自信がある」と答えた者の数を各項目の有効回答数で除したものである。また、それぞれの職業を「やりたい」と答えた者の割合が平均以上の場合は網掛け、「自信がある」と答えた割合が平均以上の場合は斜体で示した。

①職業興味（A検査）の並び順

はじめに、個々の職業への興味を男女で比較する（図表6-7、図表6-8）。54の職業の仕事内容を「やりたい」と答えた割合の平均（男子16.9%、女子17.4%）に大きな差はないが、ばらつきは女子の方が大きい（SD：男子7.8、女子11.0）。また、男子では「やりたい」と答えた割合が47位まで10%以上であるのに対し、女子ではその割合が37位で10%を下回る。男子の場合、下位層の職業に対しても「やりたい」と答える者が相当数いるが、女子の場合、ほとんどの者が下位層の職業には興味を持たないことがわかる。

次に順位をみると、男子は、上位に「機械組立工」「建築大工」「自動車整備工」などR領域（現実的領域）の職業が並ぶ。下位には「行政書士」「一般事務員」「庶務係事務員」などC領域（慣習的領域）の職業と、「看護師」「航空客室乗務員」「旅行会社添乗員」などS領域（社会的領域）の職業が並ぶ。S領域の職業には主に女性が就く職業が多数含まれるが、同じくS領域の職業でかつ女性が就くことが多い「保育士」へは4人に1人が「やりたい」と回答している^{注6-3}。

女子は、上位に「保育士」「ホテルフロント係」「児童相談員」などS領域の職業と、「服飾デザイナー」「インテリアデザイナー」「商業カメラマン」などA領域（芸術的領域）の職業が並ぶ。下位には「自動車整備工」「航空機整備士」「建設機械オペレーター」などR領域の職業と、「研究者」「植物学研究者」「海洋学研究者」などI領域（研究的領域）の職業が並ぶ。下位に並ぶR領域の職業はいずれも男性が多いブルーカラーの職業である。

②職業への自信（C検査）の並び順

次に、職業への自信について男女を比較しよう（図表6-9、図表6-10）。54の職業を「自信がある」と答えた者の割合の平均（女子14.0%、男子15.8%）に大きな差はないが、ばらつきは女子の方が大きい（SD：男子7.5、女子10.2）。また「自信がある」の割合が20%以上の職業は男子（10）より女子（15）で多く、10%を下回る職業も男子（12）より女子（25）で多い。職業への興味と同様、男子はどんな職業にも相当数「自信がある」と答える者がいるが、女子では多くの者が「自信がある」職業と、ほとんどの者が「自信がある」と答えない職業とに明確に分かれる。女子の職業への興味や自信は、男子に比べて画一的だといえよ

^{注6-3} 「保育士」の検査項目の文中には「保育園」という言葉が入っているので、単純に子供と遊ぶことが好き・得意ということだけでなく、職業としての選好が反映されている。

う。

職業の並び順をみていこう。男子は、上位に「機械組立工」「トラック運転手」「建設機械オペレーター」など R 領域（現実的領域）の職業が並ぶ。下位には「マンガ家」「文芸作家」「シナリオライター」など A 領域（芸術的領域）の職業が並ぶ。これらは全て物語を考え文章にする力を要する職業である。同じ A 領域の職業でも文章ではなく絵や立体のかたちで表現する「インテリアデザイナー（17位）」「服飾デザイナー（23位）」は比較的上位にある。

女子は、上位に「保育士」「ホテルフロント係」「介護福祉士」など S 領域（社会的領域）の職業が並ぶ。下位には「自動車整備士」「航空機整備士」など R 領域の職業と、「研究者」「植物学研究者」「化学研究者」など I 領域（研究的領域）の職業が並ぶ。両者とも理工系の知識や技術を必要とする職業が多い。同じ I 領域の職業でも「歴史・民族などの資料を集め、研究する」という文言で問われた「学芸員」は 27 位（10.6%）と中位にある。

③職業への興味（A 検査）と自信（C 検査）との関連

最後に、「やりたい」職業（図表 6-7、図表 6-8）と、「自信がある」（図表 6-9、図表 6-10）とを比較する。図表 6-7～図表 6-10 全てにおいて、「やりたい」と回答した割合が平均以上の職業を網掛し、「自信ある」と回答した割合が平均以上の職業を斜体で示した。そして、54 の職業を以下の 4 グループへ分類した。（ ）内は該当する項目数である。

ア)「人気が高いし得意な者も多い職業」:「やりたい」と回答した者の割合が平均以上でかつ「自信がある」と回答した者の割合も平均以上の職業〔網掛×斜体〕

イ)「人気は高いが得意な者が少ない職業」:「やりたい」と回答した者の割合が平均以上でかつ「自信がある」と回答した者の割合が平均未満の職業〔網掛のみ〕

ウ)「得意な者が多いが人気は低い職業」:「やりたい」と回答した者の割合が平均未満でかつ「自信がある」と回答した者の割合が平均以上の職業〔斜体のみ〕

エ)「得意な者が少なく人気も低い職業」:「やりたい」と回答した者の割合が平均未満でかつ「自信がある」と回答した者の割合も平均未満の職業〔文字飾りなし〕

まず、男子について図表 6-7 をみると、「人気が高いし得意な者も多い職業（15）」は R 領域（現実的領域）の職業に多い。逆に「人気は高いが得意な者が少ない職業（8）」は、「作曲家」「服飾デザイナー」「商業カメラマン」などの A 領域（芸術的領域）と、「店長」「会社社長」「営業課長」「放送ディレクター」などの E 領域（企業的領域）に多い。次に図表 6-9 より、「得意な者が多いが人気は低い職業（4）」は「庶務係事務員」「経理事務員」「銀行出納係」などの C 領域（慣習的領域）に多い。最後に「得意な者が少なく人気も低い職業（27）」には I 領域（研究的領域）と S 領域（社会的領域）が中心である。

次に女子について図表 6-8 をみると、「人気が高いし得意な者も多い職業（17）」は S 領域に多い。逆に「人気は高いが得意な者が少ない職業（3）」は「商店経営者」「作曲家」「医師」と様々な領域に分布している。次に図表 6-10 より、「得意な者が多いが人気は低い職業（5）」

は「一般事務員」「庶務係事務員」「銀行出納係」などの C 領域に限られる。また「得意な者が少なく人気も低い職業 (29)」には R 領域・I 領域・E 領域が多くを占める。

(3) 考察

まず、男女の共通点を述べる。平均点の比較 (図表 6-4~図表 6-6) では、E 領域 (企業的領域) への興味と C 領域 (慣習的領域) への自信、D 志向は男女でほぼ同一の得点が得られた。注目したいのは自信と興味のズレである。男女ともに、高い学歴を要する職業が多い I 領域 (研究的領域)、横文字の華やかにみえる職業が多い A 領域 (芸術的領域)、組織のトップに立つ職業が多い E 領域は自信より興味が高く、比較的就くことが容易な職業が多い C 領域は興味より自信が高い。この結果は、高校生が回答の際に、単純に「やりたい」かどうか、「自信がある」かどうかだけでなく、実際にそれらの職業へ就くために越えなくてはならない社会的なハードルの高さを認識し、考慮した上で回答している可能性を示す。

次に、男女の相違について考察を加える。職業への興味と自信、基礎的志向性、いずれにおいても、どんな方法で分析しても、男子は R 領域 (現実的領域) や T 志向といった、道具や機械を扱うことに対する志向性が突出して高く、女子は S 領域 (社会的領域) や P 志向といった対人関係に関する志向性が突出して高い。そして男子は S 領域 (社会的領域)、女子は R 領域 (現実的領域) の職業への興味と自信が他方の性と比べて著しく低い。この、男子 = 対物関係志向、女子 = 対人関係志向という傾向が、男女間の相違をもっとも顕著に示す特徴といえる。

以上の結果から「男子は物を扱うことが好き・得意であり、女子は人と接することが好き・得意なので、職業も各自の嗜好・適性にあわせて選んでいる」と結論付けることは危険である。男子が忌避する S 領域の職業には「看護師」「客室乗務員」など女性が多くを占める職業が多数含まれており、人と接する仕事への関心が低いというより、女性が多い職業に就きたくないためにこれらの職業を忌避した可能性がある。女子が忌避する R 領域の職業についても男性が多くを占めるブルーカラー職が多数含まれており、同様の可能性が伺われる。ただし、これらの可能性を検証するためには、男子・女子それぞれで下位となった職業について、高校生がどのようなイメージを抱いているのか分析する必要があるだろう。

以上より、職業に付随するジェンダー・イメージが高校生の職業への興味・自信に影響を与えている可能性が示唆された。しかし今回、わずかではあるが、彼らが従来のジェンダー・イメージに左右されずに職業への興味や自信を判断していることを示す結果もえられた。S 領域に分類される職業でかつ女性が多くを占める「保育士」は、男子の「やりたい職業」の第 8 位、「自信がある職業」の第 2 位に位置した。職業に付随するジェンダー・イメージの影響力は絶対的なものではないことが示唆される。

もう一つ、男女で明確な違いがみられたのが、回答のばらつき具合である。個々の職業への興味・自信をみた場合、男子では下位層の職業に対しても「やりたい」「自信がある」と答

える者が相当数いるのに対し、女子では多くの者が「やりたい・自信がある」と答える職業（S領域・A領域）と、ほとんどの者が「やりたい・自信がある」と答えない職業（R領域・I領域）とに明確に分かれる。男子には、職業への興味や関心において様々な志向性をもつ者がいるのに対し、女子の興味や自信は画一的だといえる。また男子と比べて、女子は「人気は高いが得意な者が少ない職業」が極めて少なく、「やりたい職業」と「自信のある職業」とがより合致していた。また日常生活での基礎的な志向性（P志向 対人関係志向）と職業への志向性（S領域 社会的領域）もより合致していた。すなわち、女子はある職業をやりたいか否か尋ねられた場合に、その仕事内容を自分の日常的な活動と照らし合わせて、それを好きかどうか、得意かどうかという点から判断している可能性がある。以上の結果は女子の選択肢の狭さを表すと同時に、彼女たちの職業に対する意識が男子と比べてより現実的であることの現れといえるかもしれない。

6-4 まとめ

本章の分析結果からは、次のような作業仮説を得ることができた。

まず、職業への志向性がいまだ憧れの段階にある中学生と比べて、高校生は職業への興味や自信についてより現実的で客観性の高い判断を下していた。また職業志向性の平均点を比較すると、高校生の3学年の間ではあまり著しい得点差がみられなかったが、中学生と高校生との間ではいくつかの興味領域で大きな得点差が見出された。以上の結果は、高校受験という進路選択のイベントを経験することが、生徒の職業意識に少なからず影響を及ぼした可能性を示唆する。今回の調査は公立高校のみを対象としているため、この可能性を検証するためには、六年制の中高一貫教育を行う学校の生徒を対象に調査を行い今回のデータと比較することが必要だろう。

次に、男女間の相違点についてまとめる。高校生の職業への興味と自信は、日本社会の労働市場における男女の配置図とよく似た分布を示した。実際の労働市場においても、男子生徒が好み自信も高いブルーカラー職業には男性が、女子生徒が好み自信も高い対人サービス職業には女性が就くことが多い。就業経験のない高校生が自身の職業に対する興味や自信を判断する際には、自分と同じ属性をもつ人々を未来予想図として参考にするだろう。彼・彼女らの回答がこうしたジェンダーバイアスに影響されている可能性は否めない。また、女子は職業への興味や自信について男子より現実的かつ客観的な判断を下す傾向が高く、人気のある職業とそうでない職業、自信がある者が多い職業と著しく少ない職業とがはっきりと分かれた。男子は様々な志向性をもつ者が混在する一方で、日常活動における志向性と職業志向性との、および職業への興味と自信との連続性が女子ほど高くはなかった。女子生徒に対しては、彼女たちが想定していなかった選択肢も併せて提示することが、視野を広げる助けとなるかもしれない。男子生徒に対しては日常生活での自分の行動と職業とを、また「やり

たい仕事」と「自信がある仕事」とを対照させて考えるよう促すことが有効かもしれない。いずれにしても、若者への職業指導を行う際には、こうしたジェンダーによる偏りを十分考慮した上で、彼らの適性を見極める必要があるといえるだろう。

今後は、以上の作業仮説を検証していくことによって、本章が冒頭に掲げた問題意識である、若年者の職業意識の発達過程や、職業への興味・自信におけるジェンダー間の相違を明らかにしていくことが課題となろう。

<参考文献>

尾嶋史章編 2001『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』、ミネルヴァ書房。

片瀬一男 2005『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容』、東北大学出版会。

雇用職業総合研究所 1989『新版職業レディネス・テスト関連資料集』、職研資料シリーズⅡ-33、雇用職業総合研究所。

村松泰子編 2004『理科離れしているのは誰か:全国中学生調査のジェンダー分析』、日本評論社。

日本労働研究機構 1989『新版職業レディネス・テスト手引』、雇用問題研究会。

労働政策研究・研修機構 2006『職業レディネス・テスト第3版手引』、雇用問題研究会。

図表 6-7 A 検査「やりたい職業」全項目頻度 男子 (n=8,409)

A検査 順位	C検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	A検査(%)			C検査(%)
					やりたい	どちらとも	やりたくない	自信ある
					平均 16.9% SD 7.8	31.1% 3.9	52.0% 10.2	15.8% 7.5
1	1	機械組立工	1	R	43.8	30.8	25.4	38.8
2	5	建築大工	13	R	34.3	35.9	29.8	29.8
3	6	自動車整備工	37	R	34.0	31.7	34.3	29.3
4	11	商店経営者	5	E	32.3	39.9	27.9	19.9
5	10	花火師	7	R	26.9	31.6	41.5	20.5
6	4	建設機械オペレーター	25	R	25.7	34.0	40.3	31.3
7	12	古生物学者	2	I	25.4	28.2	46.4	19.8
8	2	保育士	4	S	24.2	35.9	39.9	34.4
9	9	消防士	19	R	23.8	34.4	41.8	22.5
10	3	トラック運転手	31	R	23.3	34.9	41.7	33.0
11	31	作曲家	39	A	23.3	30.5	46.2	13.0
12	17	インテリアデザイナー	3	A	23.1	39.3	37.5	17.5
13	8	漁師	49	R	22.0	32.3	45.7	24.1
14	18	航空機整備士	43	R	20.9	32.9	46.2	17.1
15	21	店長	47	E	20.5	33.7	45.8	15.7
16	7	コンピュータ・オペレータ	6	C	20.4	32.0	47.6	25.1
17	23	服飾デザイナー	45	A	20.4	28.8	50.9	15.0
18	38	会社社長	41	E	19.4	33.2	47.4	11.8
19	27	営業課長	53	E	18.1	34.7	47.2	13.4
20	14	事務機器操作員	36	C	18.0	36.0	46.1	18.8
21	40	放送ディレクター	11	E	17.9	35.8	46.3	10.4
22	35	科学研究者	50	I	17.6	27.3	55.1	12.5
23	30	商業カメラマン	15	A	17.4	31.0	51.6	13.2
24	47	薬学者	38	I	16.6	29.1	54.3	9.3
25	31	WEBデザイナー	33	A	16.6	30.2	53.2	13.0
26	37	チームリーダー	23	E	16.0	32.2	51.8	12.4
27	29	販売促進員	17	E	14.9	36.9	48.2	13.2
28	22	指圧マッサージ師	10	S	14.0	29.8	56.2	15.4
29	34	学芸員	44	I	13.9	28.9	57.2	12.7
30	33	化学試験分析員	8	I	13.6	35.2	51.2	12.8
31	44	細菌学研究者	32	I	13.4	24.9	61.7	9.7
32	26	コンピュータ・プログラマー	42	C	13.3	23.7	63.0	13.5
33	25	児童相談員	46	S	13.2	29.8	57.1	14.3
34	36	海洋学研究者	20	I	13.1	30.0	56.9	12.4
35	15	ホテルフロント係	22	S	13.0	36.7	50.2	17.9
36	48	研究者	26	I	12.7	28.7	58.6	9.2
37	50	シナリオライター	21	A	12.4	28.5	59.1	8.0
38	41	イラストレーター	51	A	12.4	24.8	62.8	10.4
39	53	マンガ家	27	A	11.6	24.9	63.6	7.1
40	52	文芸作家	9	A	11.4	26.0	62.6	7.2
41	19	銀行出納係	24	C	11.3	36.9	51.8	16.4
42	16	経理事務員	12	C	10.9	33.8	55.3	17.5
43	45	植物学研究者	14	I	10.8	30.6	58.6	9.5
44	46	アナウンサー	35	E	10.6	27.4	62.1	9.5
45	24	介護福祉士	34	S	10.3	31.0	58.7	14.4
46	51	医師	40	S	10.2	29.4	60.4	7.8
47	39	旅行会社添乗員	16	S	10.1	27.2	62.7	11.1
48	20	給与事務員	54	C	9.4	30.2	60.4	15.7
48	13	庶務係事務員	18	C	9.4	31.4	59.2	18.8
50	49	新聞記者	29	E	8.9	30.4	60.7	8.2
51	28	航空客室乗務員	52	S	8.2	28.7	63.1	13.3
52	43	看護師	28	S	7.7	27.4	65.0	9.7
53	42	一般事務員	48	C	4.8	25.8	69.4	10.1
54	54	行政書士	30	C	4.6	25.2	70.2	6.6

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 6-8 A 検査「やりたい職業」全項目頻度 女子(n=8,695)

A検査 順位	C検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	A検査(%)			C検査(%)
					やりたい	どちらとも	やりたくない	自信ある
					平均 17.4%	25.6%	33.3%	14.0%
					SD 11.0	7.6	19.3	10.2
1	1	保育士	4	S	54.4	25.5	29.0	55.9
2	6	服飾デザイナー	45	A	46.3	31.3	37.6	27.3
3	14	インテリアデザイナー	3	A	39.7	38.2	22.1	20.7
4	2	ホテルフロント係	22	S	36.4	36.8	39.7	34.7
5	5	児童相談員	46	S	32.2	32.4	16.8	27.3
6	17	商業カメラマン	15	A	29.6	29.2	12.4	18.4
7	24	商店経営者	5	E	29.0	37.9	15.8	11.9
8	7	航空客室乗務員	52	S	27.4	32.2	27.6	25.6
9	16	イラストレーター	51	A	27.0	25.3	25.5	19.4
10	10	事務機器操作員	36	C	26.3	34.0	75.9	23.9
11	9	旅行会社添乗員	16	S	26.2	30.4	59.9	24.3
12	3	介護福祉士	34	S	25.5	34.9	30.2	28.6
13	4	コンピュータ・オペレータ	6	C	25.0	31.6	58.5	28.4
14	26	作曲家	39	A	24.7	31.3	16.6	10.8
15	12	看護師	28	S	24.1	29.8	32.6	23.1
16	22	営業課長	53	E	23.1	34.1	20.1	14.0
17	20	WEBデザイナー	33	A	22.9	28.6	26.2	15.9
18	19	販売促進員	17	E	22.9	37.6	33.2	16.4
19	13	指圧マッサージ師	10	S	22.6	29.9	14.0	21.2
20	23	医師	40	S	19.8	27.0	10.0	13.3
21	32	放送ディレクター	11	E	17.3	32.8	36.8	8.5
22	15	銀行出納係	24	C	16.8	35.5	68.1	20.4
23	11	庶務係事務員	18	C	16.6	32.6	26.3	23.2
24	33	文芸作家	9	A	16.6	24.9	36.4	8.5
25	25	アナウンサー	35	E	16.2	27.6	37.9	10.9
26	29	店長	47	E	16.0	30.5	39.6	10.0
27	8	一般事務員	48	C	15.9	31.9	16.6	25.4
28	18	経理事務員	12	C	14.5	30.2	26.8	17.2
29	38	花火師	7	R	14.4	21.4	54.4	6.7
30	36	シナリオライター	21	A	14.0	26.2	24.4	7.1
31	37	マンガ家	27	A	12.3	18.8	5.9	6.9
32	31	古生物学者	2	I	12.2	16.8	35.5	8.8
33	47	薬学者	38	I	12.1	18.2	22.2	4.7
34	27	学芸員	44	I	11.9	18.8	50.8	10.6
35	21	給与事務員	54	C	11.6	27.9	16.2	15.0
36	35	建築大工	13	R	10.0	22.2	39.7	7.3
37	49	会社社長	41	E	9.8	24.1	16.1	4.5
38	34	機械組立工	1	R	8.8	19.3	6.0	8.5
39	41	消防士	19	R	8.7	22.0	81.8	6.3
40	49	科学研究者	50	I	8.4	15.8	38.2	4.5
41	40	新聞記者	29	E	8.4	25.5	24.9	6.3
42	46	細菌学研究者	32	I	8.2	14.3	17.3	5.0
43	44	チームリーダー	23	E	8.1	23.8	49.9	6.2
44	28	行政書士	30	C	8.1	25.5	14.5	10.3
45	45	化学試験分析員	8	I	7.5	24.4	8.4	5.9
46	41	コンピュータ・プログラマー	42	C	6.7	15.7	77.9	6.3
47	30	トラック運転手	31	R	6.6	16.5	32.8	8.8
48	39	漁師	49	R	6.1	15.0	22.9	6.5
49	48	海洋学研究者	20	I	6.0	14.1	55.3	4.6
50	51	植物学研究者	14	I	6.0	16.1	34.0	4.3
51	43	建設機械オペレーター	25	R	5.9	12.4	7.5	6.2
52	54	研究者	26	I	5.1	13.2	56.2	3.1
53	52	航空機整備士	43	R	5.1	18.3	47.6	3.9
54	53	自動車整備工	37	R	3.6	10.9	67.9	3.2

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 6-9 C 検査「自信がある職業」全項目頻度 男子 (n=8,409)

C検査 順位	A検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	C検査(%)			A検査(%)
					自信ある	どちらとも	自信ない	やりたい
					平均 15.8% SD 7.5	31.5% 3.7	52.7% 9.8	16.9% 7.8
1	1	機械組立工	1	R	38.8	32.4	28.8	43.8
2	8	保育士	4	S	34.4	28.9	36.7	24.2
3	10	トラック運転手	31	R	33.0	36.2	30.8	23.3
4	6	建設機械オペレーター	25	R	31.3	35.2	33.5	25.7
5	2	建築大工	13	R	29.8	36.2	34.0	34.3
6	3	自動車整備工	37	R	29.3	35.3	35.4	34.0
7	16	コンピュータ・オペレータ	6	C	25.1	30.6	44.3	20.4
8	13	漁師	49	R	24.1	35.9	40.0	22.0
9	9	消防士	19	R	22.5	33.9	43.6	23.8
10	5	花火師	7	R	20.5	37.5	42.0	26.9
11	4	商店経営者	5	E	19.9	36.8	43.3	32.3
12	7	古生物学者	2	I	19.8	33.7	46.5	25.4
13	48	庶務係事務員	18	C	18.8	32.0	49.2	9.4
14	20	事務機器操作員	36	C	18.8	30.1	51.1	18.0
15	35	ホテルフロント係	22	S	17.9	33.1	49.0	13.0
16	42	経理事務員	12	C	17.5	30.8	51.7	10.9
17	12	インテリアデザイナー	3	A	17.5	33.9	48.7	23.1
18	14	航空機整備士	43	R	17.1	36.3	46.6	20.9
19	41	銀行出納係	24	C	16.4	37.3	46.3	11.3
20	48	給与事務員	54	C	15.7	34.7	49.6	9.4
21	15	店長	47	E	15.7	34.2	50.2	20.5
22	28	指圧マッサージ師	10	S	15.4	33.1	51.6	14.0
23	17	服飾デザイナー	45	A	15.0	28.5	56.6	20.4
24	45	介護福祉士	34	S	14.4	28.8	56.8	10.3
25	33	児童相談員	46	S	14.3	31.0	54.7	13.2
26	32	コンピュータ・プログラマー	42	C	13.5	26.4	60.1	13.3
27	19	営業課長	53	E	13.4	35.6	51.0	18.1
28	51	航空客室乗務員	52	S	13.3	35.0	51.7	8.2
29	27	販売促進員	17	E	13.2	34.9	51.9	14.9
30	23	商業カメラマン	15	A	13.2	34.1	52.7	17.4
31	11	作曲家	39	A	13.0	29.4	57.5	23.3
31	25	WEBデザイナー	33	A	13.0	31.2	55.7	16.6
33	30	化学試験分析員	8	I	12.8	33.8	53.3	13.6
34	29	学芸員	44	I	12.7	33.6	53.8	13.9
35	22	科学研究者	50	I	12.5	27.7	59.8	17.6
36	34	海洋学研究者	20	I	12.4	33.6	54.0	13.1
37	26	チームリーダー	23	E	12.4	27.2	60.4	16.0
38	18	会社社長	41	E	11.8	30.6	57.7	19.4
39	47	旅行会社添乗員	16	S	11.1	31.6	57.3	10.1
40	21	放送ディレクター	11	E	10.4	30.4	59.2	17.9
41	38	イラストレーター	51	A	10.4	25.5	64.1	12.4
42	53	一般事務員	48	C	10.1	32.8	57.2	4.8
43	52	看護師	28	S	9.7	29.5	60.8	7.7
44	31	細菌学研究者	32	I	9.7	27.6	62.7	13.4
45	43	植物学研究者	14	I	9.5	31.0	59.5	10.8
46	44	アナウンサー	35	E	9.5	25.6	64.9	10.6
47	24	薬学者	38	I	9.3	27.4	63.2	16.6
48	36	研究者	26	I	9.2	31.1	59.8	12.7
49	50	新聞記者	29	E	8.2	31.1	60.6	8.9
50	37	シナリオライター	21	A	8.0	25.0	67.0	12.4
51	46	医師	40	S	7.8	27.8	64.4	10.2
52	40	文芸作家	9	A	7.2	22.6	70.2	11.4
53	39	マンガ家	27	A	7.1	23.9	69.0	11.6
54	54	行政書士	30	C	6.6	29.4	64.0	4.6

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 6-10 C検査「自信がある職業」全項目頻度 女子(n=8,695)

C検査 順位	A検査 順位	職業名	項目 番号	興味の 6類型	C検査(%)			A検査(%)
					自信ある	どちらとも	自信ない	やりたい
					平均 14.0% SD 10.2	26.7% 7.6	59.3% 16.2	17.4% 11.0
1	1	保育士	4	S	55.9	23.7	20.4	54.4
2	4	ホテルフロント係	22	S	34.7	36.9	28.4	36.4
3	12	介護福祉士	34	S	28.6	33.8	37.6	25.5
4	13	コンピュータ・オペレータ	6	C	28.4	30.2	41.5	25.0
5	5	児童相談員	46	S	27.3	36.9	35.8	32.2
6	2	服飾デザイナー	45	A	27.3	38.4	34.4	46.3
7	8	航空客室乗務員	52	S	25.6	37.0	37.4	27.4
8	27	一般事務員	48	C	25.4	33.9	40.7	15.9
9	11	旅行会社添乗員	16	S	24.3	35.6	40.2	26.2
10	10	事務機器操作員	36	C	23.9	30.1	46.0	26.3
11	23	庶務係事務員	18	C	23.2	32.3	44.6	16.6
12	15	看護師	28	S	23.1	32.8	44.1	24.1
13	19	指圧マッサージ師	10	S	21.2	34.3	44.5	22.6
14	3	インテリアデザイナー	3	A	20.7	39.3	40.0	39.7
15	22	銀行出納係	24	C	20.4	38.5	41.1	16.8
16	9	イラストレーター	51	A	19.4	27.2	53.4	27.0
17	6	商業カメラマン	15	A	18.4	35.8	45.7	29.6
18	28	経理事務員	12	C	17.2	28.9	53.9	14.5
19	18	販売促進員	17	E	16.4	37.0	46.7	22.9
20	17	WEBデザイナー	33	A	15.9	31.5	52.6	22.9
21	35	給与事務員	54	C	15.0	33.5	51.5	11.6
22	16	営業課長	53	E	14.0	36.6	49.4	23.1
23	20	医師	40	S	13.3	28.0	58.7	19.8
24	7	商店経営者	5	E	11.9	33.4	54.7	29.0
25	25	アナウンサー	35	E	10.9	26.4	62.8	16.2
26	14	作曲家	39	A	10.8	30.5	58.7	24.7
27	34	学芸員	44	I	10.6	23.8	65.7	11.9
28	44	行政書士	30	C	10.3	30.4	59.3	8.1
29	26	店長	47	E	10.0	32.1	57.9	16.0
30	47	トラック運転手	31	R	8.8	22.7	68.5	6.6
31	32	古生物学者	2	I	8.8	21.3	70.0	12.2
32	21	放送ディレクター	11	E	8.5	26.8	64.7	17.3
33	24	文芸作家	9	A	8.5	22.8	68.6	16.6
34	38	機械組立工	1	R	8.5	20.0	71.5	8.8
35	36	建築大工	13	R	7.3	19.8	72.9	10.0
36	30	シナリオライター	21	A	7.1	22.7	70.1	14.0
37	31	マンガ家	27	A	6.9	18.8	74.2	12.3
38	29	花火師	7	R	6.7	24.9	68.4	14.4
39	48	漁師	49	R	6.5	20.6	72.9	6.1
40	41	新聞記者	29	E	6.3	26.1	67.6	8.4
41	39	消防士	19	R	6.3	20.3	73.4	8.7
41	46	コンピュータ・プログラマー	42	C	6.3	18.3	75.4	6.7
43	51	建設機械オペレーター	25	R	6.2	18.5	75.3	5.9
44	43	チームリーダー	23	E	6.2	20.1	73.7	8.1
45	45	化学試験分析員	8	I	5.9	21.6	72.6	7.5
46	42	細菌学研究者	32	I	5.0	14.9	80.1	8.2
47	33	薬学者	38	I	4.7	16.4	78.9	12.1
48	49	海洋学研究者	20	I	4.6	18.5	76.9	6.0
49	37	会社社長	41	E	4.5	19.8	75.7	9.8
49	40	科学研究者	50	I	4.5	14.2	81.3	8.4
51	50	植物学研究者	14	I	4.3	16.9	78.8	6.0
52	53	航空機整備士	43	R	3.9	20.5	75.5	5.1
53	54	自動車整備工	37	R	3.2	12.8	84.0	3.6
54	52	研究者	26	I	3.1	14.2	82.8	5.1

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

第7章 第2版と比較した高校生の職業レディネスの変化

7-1 本章の目的

第3章「標準化調査の概要」において、第2版と同一の項目を使って、ホルランドの6領域の興味や自信の得点がどう変化するかを、第2版作成時の1991年に収集した値と2005年の標準化調査から算出した値で比較を行った。本章では、第3版で新たに選択された項目も含めて、高校生の職業レディネスについて、第2版（1998年）との比較を行う。

従来の日本の学校教育は職業意識を育ててこなかったといわれる。特に中等教育段階では高学歴化の影響もあり、職業についての進路決定は先延ばしにされてきた。1990年代に入ると、進学しない場合も、非正規の職に就く者や無業となる者が増えてきた。その要因としては、高校新卒者に対する求人質的・量的な低下や、学校経由の就職というシステムの機能不全など多々あるが^{注7-1}、その一つに、生徒自身の職業に対する意識が十分に発達していないことも挙げられる。こうした状況を背景に政府は、若者の進路決定に対する意欲・関心を高めるためのキャリア教育へ力を入れ始めたが^{注7-2}、その効果は現れているのだろうか。

また、これまでの章で明らかになったように、職業への興味や自信のありようは男女で異なる。しかし今日、日本の女子労働力率は上昇傾向にあり、女性の活躍の場は広がったといわれる。管理職に占める女性の割合は1988年の4.6%から2001年の8.3%まで拡大し^{注7-3}、従来は男性（女性）が就くことが多かった職業へ女性（男性）が就くケースも増えている。こうした労働市場における男女配置図の変化は、これから職業の世界へ旅立とうとする高校生に対しても、ジェンダーバイアスを和らげる方向へと影響を及ぼしたのではないだろうか。

そこで本章では、第2章の結果を第2版（1988年）と比較することで、日本の後期中等教育が生徒の職業意識に与えた影響を考察すると同時に、この17年間で高校生の職業意識における男女間の相違が縮小したか否かを検証したい。

7-2 分析対象

調査の方法は第3章「標準化調査の概要」に準ずる。本章では分析の対象として高校生のデータを取り上げた。分析の対象とした生徒の内訳は下記の通りである。

<1991年> 全国41校の高等学校の1年生～3年生。人数の内訳は以下の通り。高校生計8,489名（1年男子1,315名、1年女子1,336名、2年男子1,886名、2年女子1,651名、3年男子1,121名、3年女子1,180名）。

<2005年> 標準化調査に協力した全国62校の高等学校の1年生～3年生。

注7-1 本田（2005）、小杉編（2005）、安田（2003）など。

注7-2 高等学校におけるキャリア教育の導入と展開については竹内（2002）に詳しい。

注7-3 井上輝子・江原由美子編（2005）。

人数の内訳は以下の通り。高校生計 17,104 名（1 年男子 3,244 名、1 年女子 3,175 名、2 年男子 3,185 名、2 年女子 3,399 名、3 年男子 1,980 名、3 年女子 1,979 名）。

7-3 分析方法と結果

7-3-1 分析方法

以下の手順で、第 2 版（1988 年）との比較を行う。はじめに、学年別に A 検査（職業への興味）と C 検査（職業への自信）の平均値を二時点で比較する。次に高校生全体について「やりたい職業（A 検査）」と「自信がある職業（C 検査）」の順位を比較する。最後に、男女別に A 検査と C 検査の平均値を二時点で比較する。分析に用いる平均値の算出方法については、第 5 章において述べたとおりである。なお、B 検査は第 3 版において全面的に新規作成したため第 2 版との比較は行わない^{注 7-4}。

また、第 2 版と比較する際に注意すべき点がある。A 検査・C 検査において第 3 版では検査項目の入れ替えを行っている。そこで以下では、第 2 版から用い続けている 42 項目を「旧項目」、第 3 版で新しく導入された 10 項目と第 2 版とは異なる領域に分類された 2 項目を「新項目」とする。結果を考察する際には、明らかになった変化が高校生の意識の変化によるものなのか、検査項目の入れ替えに起因するものなのか区別するよう考慮が必要である^{注 7-5}。平均点の比較においては、旧項目のみについての平均点を算出することができなかつたため、第 2 版（1988 年）は第 3 版で除外された 12 項目と旧項目を合わせた 54 項目、第 3 版（2005 年）は新項目と旧項目とを合わせた 54 項目についての得点を用いた。「やりたい職業」と「自信がある職業」の順位の比較においては、旧項目のみについて比較する。

7-3-2 高校生全体にみられる変化

本節では、高校生の職業志向性について、職業への興味（A 検査）・自信（C 検査）の平均点を第 2 版（1988 年）と比較することで、90 年代以降の日本の後期中等教育が、高校生の職業意識に与えた影響を考察したい。

（1）職業志向性の変化

はじめに、A 検査（職業への興味）と C 検査（職業への自信）の平均点を、第 2 版（1988 年）と比較する。図表 7-1 と図表 7-2 に A 検査、図表 7-3 と図表 7-4 に C 検査の結果を示した。

まず目に付くことは、C 検査における 1、2 年生の I 領域（研究的領域）を除くと、職業へ

^{注 7-4} 分析結果を導くために、全ての平均値について学年別、男女別、検査年別に t 検定を実施したところ、ほぼすべての組み合わせにおいて有意となった。

^{注 7-5} 厳密な比較を行うためには 42 の旧項目のみを取り出した平均値を算出する必要があるが、第 2 版における検査項目ごとの有効回答数のデータが残されていないため、今回は見送る。

の興味・自信ともに全ての学年の全ての領域において、1988年より2005年で平均点が低下している。その下がり幅は特に3年生で大きい。また両年のグラフの形状を比べると、職業への興味はM字型から逆N字型へ、自信はW型のグラフが右上がりから水平へと変化した。これらは主に、E領域（企業的領域）とC領域（慣習的領域）に対する興味と、E領域・S領域（社会的領域）・C領域に対する自信の著しい低下に起因するものである。更に、1988年では職業への興味・自信ともに2年生から3年生にかけて得点が急上昇するが、2005年では3年生も1、2年生とそれほど変わらぬ得点しか示さない。

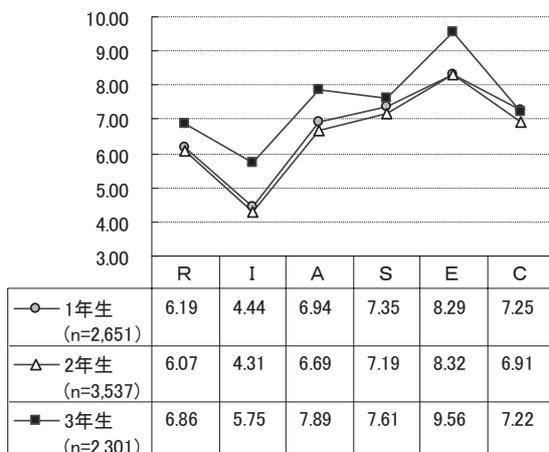


図7-1 1988年 学年別職業への興味(A検査)

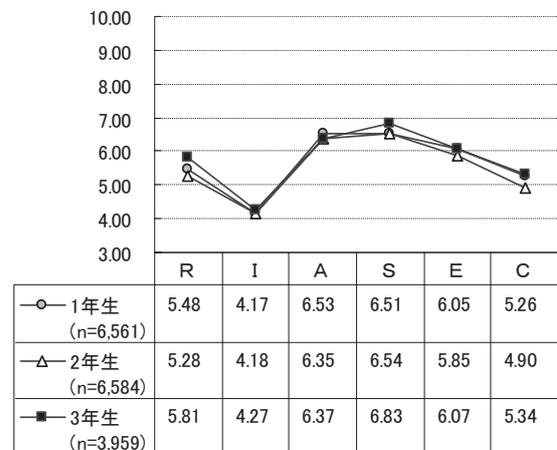


図7-2 2005年 学年別職業への興味(A検査)

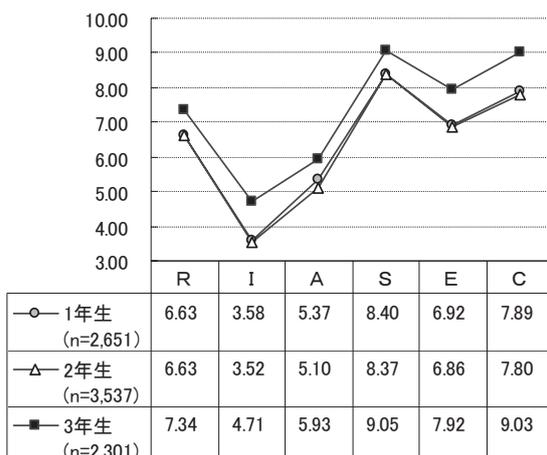


図7-3 1988年 学年別職業への自信(C検査)

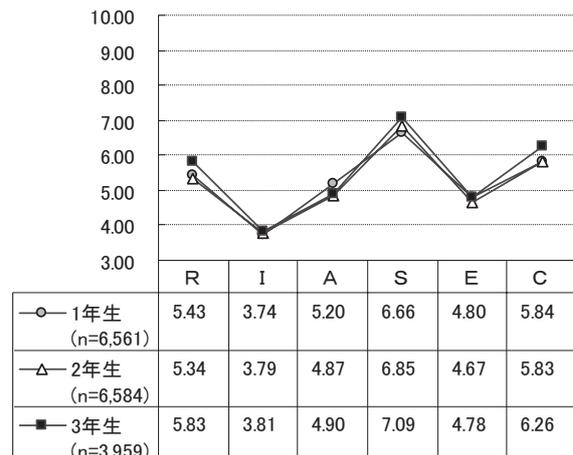


図7-4 2005年 学年別職業への自信(C検査)

ここで、1988年から2005年にかけての平均値の低下は、検査項目を入れ替えたためではないかという疑問が生じるが、図表7-1と図表7-2から1988年と共通の旧項目だけを取り出して、「やりたい」「自信がある」と回答した者の割合の平均値を両年で比較すると、A検

査は 1988 年で 22.4 % (SD : 9.4)、2005 年で 16.6 % (SD : 6.9)、C 検査は 1988 年で 20.6% (SD : 10.1)、2005 年で 15.0% (SD : 7.4) と大幅に低下している。よって 2005 年の平均値の低下は、高校生の職業に対する興味・自信の低下に起因すると考えてよいだろう。

(2) 「やりたい職業」・「自信がある職業」の変化

以上みてきた職業志向性に生じた変化は、どのような職業への興味や自信が高まった／低下した結果もたらされたものなのだろうか。次に、個々の職業に対する興味や自信の変化をみていこう。

①分析方法

図表 7-5 と図表 7-6 に、高校生全体の A 検査（職業への興味）と C 検査（職業への自信）の結果を項目別に示した。54 の検査項目が表す職業を、図表 7-5 では「やりたい」、図表 7-6 では「自信がある」と答えた者の割合が高い順に並べた。その割合を算出する際、第 2 版については検査項目ごとの有効回答数が分からないため、暫定的に総サンプル数を分母として用いた。また、表中の平均値と標準偏差 (SD) は旧項目のみについてのものである。

個々の職業への興味と自信が、第 2 版 (1988 年) と比べてどのように変化したのか明らかにするために以下の手続きをとった。42 の旧項目のみについて、2005 年に「やりたい」「自信がある」と回答した者の割合が 1988 年の 1 倍を超える項目を、人気や得意な者の割合が上昇した職業とみなし網掛で示した (A 検査 : 6 項目、C 検査 : 7 項目)。同様にその割合が 0.6 倍未満である項目を、人気や得意な者の割合が著しく低下した職業とみなし斜体で示した (A 検査 : 10 項目、C 検査 : 8 項目)。また、12 の新項目を強調した。更に、図表 7-5 と図表 7-6 で網掛で示された職業を図表 7-7 へ、斜体で示された職業を図表 7-8 へまとめた。図表 7-7 では 1 倍以上の倍率を、図表 7-8 では 0.6 倍未満の倍率を強調した。以上をふまえ、4 つの表が示す変化を読み取っていこう。

図表 7-5 A 検査「やりたい職業」全項目頻度 (1988年 n=8,489 2005年 n=17,104)

2005年 順位	1988年 順位	職業名	項目 番号	やりたい(%)		2005年 /1988年 平均 0.78 SD 0.25	興味の 6類型
				2005年 平均 16.6% SD 7.0	1988年 22.4% 9.5		
1	6	保育士	4	39.5	35.6	1.11	S
2	9	服飾デザイナー	45	33.5	31.5	1.06	A
3	3	インテリアデザイナー	3	31.6	40.1	0.79	R→A
4	1	商店経営者	5	30.6	52.0	0.59	E
5	10	機械組立工	1	26.0	30.6	0.85	R
6	4	ホテルフロント係	22	24.9	37.8	0.66	S
7	22	作曲家	39	24.0	25.1	0.95	A
8		商業カメラマン	15	23.6			A
9		児童相談員	46	22.8			S
10	14	コンピュータ・オペレータ	6	22.7	29.2	0.78	C
11	2	事務機器操作員	36	22.2	42.3	0.52	C
12	29	建築大工	13	21.9	21.0	1.04	R
13	13	営業課長	53	20.6	30.1	0.69	E
14		花火師	7	20.6			R
15		WEBデザイナー	33	19.8			A
16	21	イラストレーター	51	19.8	25.6	0.77	A
17	11	販売促進員	17	18.9	30.4	0.62	E
18		古生物学者	2	18.7			I
19	16	自動車整備工	37	18.5	27.4	0.68	R
20		指圧マッサージ師	10	18.4			S
21		旅行会社添乗員	16	18.3			S
22	15	店長	47	18.2	28.3	0.64	E
23	48	介護福祉士	34	18.1	11.6	1.56	S
24	25	航空客室乗務員	52	17.9	22.6	0.79	S
25	7	放送ディレクター	11	17.6	32.9	0.53	E
26		消防士	19	16.1			R
27	40	看護師	28	16.0	17.2	0.93	S
28	51	建設機械オペレーター	25	15.6	11.2	1.39	R
29	38	医師	40	15.1	17.8	0.85	S
30	42	トラック運転手	31	14.8	16.6	0.89	R
31	12	会社社長	41	14.5	30.3	0.48	E
32	41	薬学者	38	14.3	16.7	0.86	I
33	27	銀行出納係	24	14.1	21.6	0.65	C
34	31	文芸作家	9	14.1	20.3	0.69	A
35	50	漁師	49	13.9	11.2	1.24	R
36	23	アナウンサー	35	13.4	24.0	0.56	A→E
37	26	シナリオライター	21	13.2	22.5	0.59	A
38	33	庶務係事務員	18	13.1	20.1	0.65	C
39	37	科学研究者	50	12.9	18.3	0.71	I
40	45	学芸員	44	12.9	13.7	0.94	I
41		航空機整備士	43	12.9			R
42	34	経理事務員	12	12.7	19.1	0.67	C
43	43	チームリーダー	23	12.0	16.3	0.73	E
44		マンガ家	27	12.0			A
45	47	細菌学研究者	32	10.7	11.7	0.92	I
46	36	給与事務員	54	10.5	19.0	0.55	C
47	53	化学試験分析員	8	10.5	10.6	0.99	I
48	18	一般事務員	48	10.5	26.2	0.40	C
49	30	コンピュータ・プログラマー	42	9.9	20.4	0.49	C
50	54	海洋学研究者	20	9.5	10.1	0.94	I
51	46	研究者	26	8.8	13.2	0.67	I
52	35	新聞記者	29	8.6	19.0	0.45	E
53	52	植物学研究者	14	8.4	10.7	0.78	I
54	49	行政書士	30	6.4	11.5	0.55	C

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

図表 7-6 C 検査「自信がある職業」全項目頻度 (1988年 n=8,489 2005年 n=17,104)

2005年 順位	1988年 順位	職業名	項目 番号	自信ある(%)		2005年 /1988年 平均 0.76 SD 0.20	興味の 6類型
				2005年 平均 15.0% SD 7.5	1988年 20.6% 10.3		
				1	2	保育士	
2	9	コンピュータ・オペレータ	6	26.8	29.6	0.90	C
3	1	ホテルフロント係	22	26.5	50.1	0.53	S
4	12	機械組立工	1	23.4	28.2	0.83	R
5	31	介護福祉士	34	21.6	19.0	1.14	S
6	5	事務機器操作員	36	21.4	34.9	0.61	C
7	25	服飾デザイナー	45	21.2	20.5	1.04	A
8	13	庶務係事務員	18	21.0	28.0	0.75	C
9		児童相談員	46	20.9			S
10	18	トラック運転手	31	20.7	27.5	0.75	R
11	8	航空客室乗務員	52	19.5	31.5	0.62	S
12	14	インテリアデザイナー	3	19.1	27.9	0.68	R→A
13	29	建設機械オペレーター	25	18.6	19.1	0.97	R
14	10	銀行出納係	24	18.4	28.7	0.64	C
15	32	建築大工	13	18.4	17.5	1.05	R
16		指圧マッサージ師	10	18.3			S
17	4	一般事務員	48	17.9	39.1	0.46	C
18		旅行会社添乗員	16	17.8			S
19	15	経理事務員	12	17.4	27.8	0.62	C
20	21	看護師	28	16.5	23.0	0.72	S
21	20	自動車整備工	37	16.0	23.3	0.69	R
22		商業カメラマン	15	15.9			A
23	7	商店経営者	5	15.9	31.7	0.50	E
24	17	給与事務員	54	15.4	27.8	0.55	C
25	37	漁師	49	15.2	15.3	0.99	R
26	30	イラストレーター	51	15.0	19.0	0.79	A
27	19	販売促進員	17	14.8	23.4	0.63	E
28		WEBデザイナー	33	14.5			A
29		消防士	19	14.3			R
30		古生物学者	2	14.2			I
31	23	営業課長	53	13.7	22.4	0.61	E
32		花火師	7	13.5			R
33	24	店長	47	12.8	20.5	0.62	E
34	43	作曲家	39	11.9	11.1	1.07	A
35	41	学芸員	44	11.6	12.0	0.97	I
36	39	医師	40	10.6	13.6	0.78	S
37		航空機整備士	43	10.4			R
38	33	アナウンサー	35	10.2	17.1	0.59	A→E
39	38	コンピュータ・プログラマー	42	9.8	15.2	0.65	C
40	22	放送ディレクター	11	9.5	22.8	0.41	E
41	52	化学試験分析員	8	9.3	8.2	1.13	I
42	42	チームリーダー	23	9.2	12.0	0.77	E
43	27	行政書士	30	8.5	19.8	0.43	C
44	47	海洋学研究者	20	8.5	9.3	0.91	I
45	46	科学研究者	50	8.4	9.8	0.86	I
46	36	会社社長	41	8.1	15.5	0.52	E
47	44	文芸作家	9	7.9	10.7	0.73	A
48	45	シナリオライター	21	7.5	10.6	0.71	A
49	54	細菌学研究者	32	7.3	6.8	1.07	I
50	40	新聞記者	29	7.3	13.1	0.55	E
51		マンガ家	27	7.0			A
52	53	薬学者	38	7.0	7.2	0.97	I
53	49	植物学研究者	14	6.9	8.6	0.80	I
54	51	研究者	26	6.1	8.4	0.72	I

※小数点第2位を四捨五入したため、順位が異なる職業について同一の平均点が表示される場合がある。

②分析結果

はじめに図表 7-7 をみると、「人気上昇」した職業と「得意な者の割合が上昇」した職業とはほぼ合致する。「人気上昇」したが「得意な者の割合は低下」した場合も、その低下は 0.9 倍程度にとどまる。逆もまたしかりである。

図表 7-7 人気・得意な者の割合が上昇した職業

順位		職業名	2005年/1988		興味の6類型
A検査	C検査		A検査	C検査	
53→47	52→41	化学試験分析員	0.99	1.13	I
47→45	54→49	細菌学研究者	0.92	1.07	I
22→7	43→34	作曲家	0.95	1.07	A
9→2	25→7	服飾デザイナー	1.06	1.04	A
48→23	31→5	介護福祉士	1.56	1.14	S
6→1	2→1	保育士	1.11	1.04	S
29→12	32→15	建築大工	1.04	1.05	R
50→35	37→25	漁師	1.24	0.99	R
51→28	29→13	建設機械オペレーター	1.39	0.97	R

図表 7-7 を第 6 章の図表 6-7～図表 6-10 と照合しながらみていこう。42 の旧項目のうち「人気上昇」した職業はわずか 6 項目、「得意な者の割合が上昇」した職業はわずか 7 項目であった。そのうち、人気も得意な者の割合もともに上昇した職業は 4 項目あり、第 6 章の結果と照合すると、R 領域の「建築大工」は男子、A 領域の「服飾デザイナー」と S 領域の「介護福祉士」は女子、S 領域の「保育士」は男女共に人気がありかつ得意な者も多い。次に、人気のみが上昇した職業は R 領域の「建設機械オペレーター」「漁師」で、ともに男子に人気が高い職業である。更に、得意な者の割合のみが上昇した I 領域の「細菌学研究者」、「化学試験分析員」と A 領域の「作曲家」は、他の職業と比べると 2005 年でも男女ともにそれほど得意な者の割合が高いわけではない。

次に図表 7-8 をみると、「人気著しく低下」した職業と「得意な者の割合が著しく低下」した職業とはほぼ合致する。42 の旧項目のうち、人気著しく低下した職業は 10 項目、得意な者の割合が著しく低下した職業は 8 項目であった。そのうち、人気も得意な者の割合も 0.6 倍未満と著しく低下した 7 つの職業は、全て E 領域と C 領域の職業である。この結果は先の平均点の比較から得られた結果と整合的である。これらのうち「商店経営者」をやりたい男女と「一般事務員」を得意とする女子の割合は、他の職業と比べると 2005 年でもかなり高い。更に、人気のみが著しく低下した職業は A 領域の「シナリオライター」と C 領域の「事務機器操作員」「コンピュータ・プログラマー」であり、得意な者の割合のみが著しく低下した職業は S 領域の「ホテルのフロント係」である。これらのうち「事務機器操作

図表 7-8 人気・得意な者の割合が著しく低下した職業

順位		職業名	2005年/1988		興味の6類型
A検査	C検査		A検査	C検査	
26→37	45→48	シナリオライター	0.59	0.71	A
2→11	5→6	事務機器操作員	0.52	0.61	C
30→49	38→39	コンピュータ・プログラマー	0.49	0.65	C
18→48	4→17	一般事務員	0.40	0.46	C
49→54	27→43	行政書士	0.55	0.43	C
36→46	17→24	給与事務員	0.55	0.55	C
35→52	40→50	新聞記者	0.45	0.55	E
12→31	36→46	会社社長	0.48	0.52	E
7→25	22→40	放送ディレクター	0.53	0.41	E
1→4	7→23	商店経営者	0.59	0.50	E
4→6	1→3	ホテルフロント係	0.66	0.53	S

員」と「ホテルのフロント係」を「やりたい」女子の割合と「自信がある」男女の割合は、他の職業と比べると 2005 年時点でもかなり高い。

③考察

以上の結果を考察する。1988 年と比べて、2005 年の高校生の職業への興味や自信は全体に低下し、高校 3 年生という進路決定の時期を迎えても、職業に対する志向性が急上昇しなくなった。その一因は、高学歴化が進み高校 3 年生の時点で職業を決定しなくてはならない者が少なくなったためだろう。しかしそればかりが要因ではないだろう。

興味の 6 類型ごとの変化をみると、1・2 年生に限れば、R 領域・S 領域に対する興味、I 領域・A 領域に対する自信については平均点にわずかな低下しかみられなかった。また、全学年について個々の職業への興味や自信に目を向けると、むしろ人気の高さや得意な者の割合が上昇した職業がみられた。その多くは、特別な技能を要する職業（「漁師」「建築大工」「建設機械オペレーター」）や、福祉関連の準専門職（「保育士」「介護福祉士」）、高度な専門知識を要する研究・技術職（「化学試験分析員」「細菌学研究者」）、独自のセンスが問われる創造的な仕事（「服飾デザイナー」「作曲家」）など、特別なスキルや資格を必要とする職業である。会社組織でホワイトカラーとして働くよりも「手に職」を得たいという高校生の志向性の変化がうかがわれる。この結果は、高校生の専門職志向が高まっているという先行研究の成果とも整合性がとれている^{注 7-6}。

逆に、興味や自信が低下した職業は、企画・立案や組織の運営に携わる E 領域や、決まった方式や規則に従って行動する C 領域に多い。中でも人気と得意な者の割合がともに著しく低下した 7 つの職業のうち 6 つには、「リスクの高さ」という共通点が見出される。E 領域の「会社社長」「商店経営者」は自営独立の職業、「放送ディレクター」「新聞記者」は過酷な労働と社会的責任の重さで有名なマスコミ業界の職業である。また C 領域の「一般事務員」「給与事務員」はかつて高校新卒女子の就職先として最もメジャーであったが、今日では派遣労働者や契約社員といった非正規雇用者によって担われつつある^{注 7-7}。バブル経済崩壊後の先の見えない社会では、会社や店舗の倒産、過労死や社会的責務、解雇といったリスクが予想される職業は敬遠され、（実際はともかく）組織の都合に振り回されない、スキルや資格を活かした「手に職」的な職業が志向されるようになったのかもしれない。ただし、これらの可能性を検証するためには、男子・女子それぞれで下位となった職業について、高校生がどのようなイメージを抱いているのか分析する必要があるだろう。

以上をまとめると、高校生は自分の職業志向性を、純粋に「やりたい」という気持ちや職務の遂行そのものに対する自信だけでなく、生業として継続できるか否かといった観点から

^{注 7-6} 片瀬（2005）。

^{注 7-7} 厚生労働省が 2003 年に実施した「就業形態の多様化に関する総合実態調査」によれば、非正規雇用者に占める割合が最も大きい職種は「事務的な仕事（25.5%）」である。その傾向は特に女性や派遣社員で顕著である。

も判断している可能性がある。そう考えると、高校生の職業への興味や自信が低下したことは、彼／彼女らの客観性の高さの現れともいえよう。ただし、以上の考察はあくまで示唆を得たという程度のものであり、90年代以降のキャリア教育が高校生の職業意識に影響を与えたか否かについては、今回のデータのみからは結論を出せない。考察結果を作業仮説として、新たなサンプルについて検証を行う必要がある。

7-3-2 男女別にみた職業志向性の変化

次に、高校生の志向する職業が男女間でどのように異なるのか、またその相違は1988年と比べてどのように変化したのかを明らかにする。

(1) 分析結果

第2章で明らかになった男女の相違は以下の通りである。職業への興味と自信、基礎的志向性のいずれにおいても、男子は道具や機械を扱うことに対する志向性（R領域、T志向）が、女子は対人関係に関する志向性（S領域、P志向）が突出して高かった。この、男子＝対物志向、女子＝対人志向という傾向が、男女の相違をもっとも顕著に示す特徴といえる。また、女子は男子より現実的かつ客観的な判断を下す傾向が高いと同時に、その興味や自信のありようは画一的であった。男子は様々な志向性をもつ者が混在する一方で、日常活動における志向性と職業志向性、および職業への興味と自信との連続性が女子ほど高くなかった。

以上を第2版と比較しよう。図表7-9と図表7-10にA検査とC検査の平均点を第2版と第3版について示した。7-3-2で既に述べたとおり、職業への興味と自信はともに1988年と比べて大幅に低下している。男女別では特に女子でその傾向が著しい。女子（図表7-9）は興味・自信ともにR領域（現実的領域）・S領域（社会的領域）・E領域（企業的領域）・C領域（慣習的領域）が大幅に低下した。男子（図表7-10）は職業への興味・自信ともにE領域の下がり幅が最も大きく、次いでC領域も低下した。自信についてはE領域とC領域に加えS領域の低下も目立つ。

(2) 考察

こうした変化は、男女の職業意識の相違を縮める方向に生じているのだろうか。図表7-11に1988年と2005年のそれぞれについて女子と男子の得点差を示した。女子よりも男子の得点が高い場合を網掛し、男女間の得点差を絶対値が大きい方を強調した。まず、男女の得点差に両年であまり違いがみられないのはI領域（研究的領域）・A領域（芸術的領域）への興味と自信である。これは、I領域とA領域は1988年から2005年にかけての下がり幅が男女ともに小さいためである。次に、2005年で差が縮まったのは、S領域（社会的領域）・E領域（企業的領域）・C領域（慣習的領域）への興味と自信である。S領域とC領域は両年と

も女子の方が興味も自信も高い領域だが、女子の興味・自信が男子以上に低下したことによって差が縮まった。逆に E 領域は女子より男子の方が興味も自信も高い領域だが、男子の得点が女子より大幅に低下したことで差が縮まった。最後に 2005 年で差が広がったのは、R 領域への興味と自信である。先述のとおり、男女の最大の相違点は、男子は R 領域、女子は S 領域に対する興味や自信が強いということだった。男子の R 領域の得点がそれほど変わらないのに対し、女子の得点は著しく低下した。女子の、機械や道具を使う職業への興味や自信がますます低下した^{注 7-8}。

以上をまとめる。男女間の職業への興味と自信の相違は、全体としては縮まった。ただしその原因は、男子/女子が、かつての男子/女子が「やりたい」・「自信がある」と回答していた領域に対して興味や自信を低下させたという消極的なものである。よって、この結果をもって、高校生が自身の職業への興味・自信を判断する際に、女子/男子が「女/男らしさ」に縛られなくなったと結論付けることは難しい。

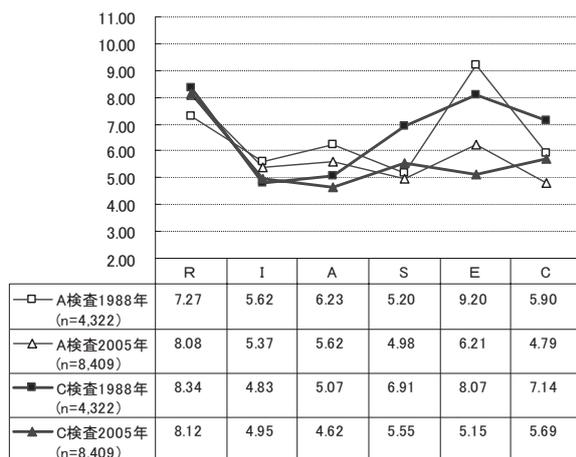


図7-9 職業への興味と自信 1988年・2005年(男子)

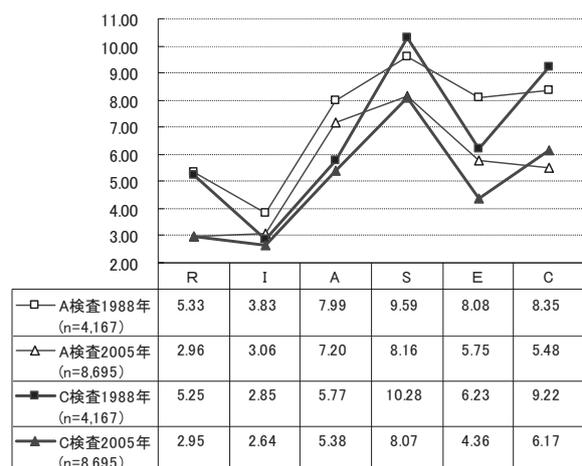


図7-10 職業への興味と自信 1988年・2005年(女子)

図表 7-11 A 検査・C 検査 男女間の得点差

	A検査(女-男)		C検査(女-男)	
	1988年	2005年	1988年	2005年
R(現実的領域)	-1.9	-5.1	-3.1	-5.2
I(研究的領域)	-1.8	-2.3	-2.0	-2.3
A(芸術的領域)	1.8	1.6	0.7	0.8
S(社会的領域)	4.4	3.2	3.4	2.5
E(企業的領域)	-1.1	-0.5	-1.8	-0.8
C(慣習的領域)	2.5	0.7	2.1	0.5

注 7-8 第 2 版では、高校生の男女別に検査項目ごとの回答頻度を集計した表が残されていないため、個々の職業に対する興味・自信の男女差については 1988 年との比較を行わない。

7-4 まとめ

本章では、高校生の職業レディネスについて第2版（1998年）と第3版（2005年）との比較を行うことで、日本の後期中等教育が生徒の職業意識に与えた影響を考察すると同時に、この17年間で高校生の職業意識における男女間の相違が縮小したか否かを検証しようとした。しかし今回のデータはこれらの問題に結論をだすために十分なものではない。

ただ、以上の分析をとおして新たな問題が提起された。それは、なにをもって職業意識の向上とみなすのかという問題である。1988年と比べて、高校生の職業への興味や自信は低下し、進路を決定する高校3年生になっても上昇しなくなった。しかし、この志向性の低下＝職業意識の低下と単純に結びつけることは危険である。なぜなら、彼・彼女らが興味や自信を低下させた職業は、今日の日本社会で安定して働き続けることが難しくなりつつある職業が多いからである。彼・彼女たちが自身をとりまく環境の変化を察知して、職業への興味や自信を変化させてきたのだとしたら、それは客観的で冷静な判断であり、職業意識が低いとはいえないだろう。

また、男女の相違が縮まったか否かについても結論は保留された。平均点の比較を行った結果、男女の職業志向性の差は小さくなっていった。しかしこの差の縮小は、男女それぞれが興味がある・得意だとしてきた領域について、興味・自信が低下した結果もたらされたものであった。しかし第2章で、「女性らしい」職業というイメージが強い「保育士」への男性の興味・自信が2005年で高いことが明らかになった。今回はデータの制約上かなわなかったが、個々の職業における人気や得意な者の割合の変化を男女で比較することで、新たな発見が得られるかもしれない。

以上、述べてきた考察は、本章が冒頭に掲げた仮説についての作業仮説とすることができる。今後は、これらの作業仮説を検証することで、日本の後期中等教育が生徒の職業意識に与えた影響や、高校生の職業意識のジェンダーバイアスの縮小を、検証していくことが課題となろう。

<参考文献>

本田由紀 2005『若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。

井上輝子・江原由美子編 2005『女性のデータブック第4版―性・からだから政治参加まで』、有斐閣、p.86-87。

片瀬一男 2005「職業アスピレーションの変容」『夢の行方―高校生の教育・職業アスピレーションの変容』第5章、東北大学出版会、p.139-168。

小杉礼子編 2005『フリーターとニート』、勁草書房。

雇用職業総合研究所 1989『新版職業レディネス・テスト関連資料集』、職研資料シリーズII-33、雇用職業総合研究所。

日本労働研究機構 1989『新版職業レディネス・テスト手引』、雇用問題研究会。

労働政策研究・研修機構 2006『職業レディネス・テスト第3版手引』、雇用問題研究会。

竹内常一 2002「「高校改革」と職業・労働の教育」『揺らぐ<学校から仕事へ>労働市場の変容と10代』、第11章、青木書店。

安田雪 2003『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』、勁草書房。

第 8 章 A、B、C 検査における各尺度の関連性、および、興味と自信の差異

8-1 本章の目的

本章では、以下に示す 2 点について検討することを目的とした。まず 1 つ目は、3 つの検査をさまざまなかたちで組み合わせてその関係性をみていくことにより、A、B、C それぞれの検査の特徴を明確化することである。ここでは、① B 検査における 8 つの下位尺度間の相関、② A 検査と B 検査の相関、③ A 検査と B 検査における 8 つの下位尺度間の相関、④ A 検査と C 検査の相関という 4 つの点について、それぞれ中学生と高校生別に算出して検討を加える。

本章における 2 つ目の目的は、興味と自信の差異について検討することである。そこで、A 検査で測定される興味の得点から C 検査で測定される自信の得点を減じることによって、興味と自信の差異について詳しくみていきたい。この値がゼロに近いならば、興味と自信の程度はほぼ一致することになる。プラスを示すならば興味が自信を、マイナスならば自信が興味を上回ると解釈できる。こうして尺度毎、尺度間の関係性について詳しくみていくことで、記述統計では読み取ることのできない尺度の特徴や尺度間の差異を浮き彫りにすることができるだろう。

8-2 分析の対象

調査の方法は第 3 章「標準化調査の概要」に準じており、本章では中学生と高校生の全体のデータを分析に使用した。分析対象とした生徒の内訳は下記の通りである。

標準化調査に協力した全国 38 校の中学 1 年～3 年生および 62 校の高等学校の 1 年生～3 年生で、詳しい内訳は以下の通りである。中学生計 10,966 名（1 年男子 1,905 名、1 年女子 1,816 名、2 年男子 1,825 名、2 年女子 1,791 名、3 年男子 1,866 名、3 年女子 1,763 名）。高校生計 17,104 名（1 年男子 3,244 名、1 年女子 3,175 名、2 年男子 3,185 名、2 年女子 3,399 名、3 年男子 1,980 名、3 年女子 1,979 名）。

8-3 分析方法と結果

8-3-1 B 検査下位尺度の内部相関

(1) 分析方法

今回の標準化調査のデータの分析では、B検査の下位尺度、すなわち、D（対情報関係志向）、P（対人関係志向）、T（対物関係志向）に関連する項目毎に因子分析を施した。その結果、Dについては、D1（情報を集める）、D2（好奇心を満たす）、D3（情報を活用する）の3因子が、Pについては、P1（自分を表現する）、P2（みんなと行動する）、P3（人の役にたつ）の3因子が、そして、Tについては、T1（物をつくる）とT2（自然に親しむ）の2因子が得られており、この結果にもとづき8つの尺度得点を算出することができる。得点化にあたっては、8つの下位尺度に含まれる各8項目について、あてはまる場合には1点、あてはまらない場合には0点とした。したがって、一つの下位尺度について、得点は0点～8点の範囲となる。本節では、このB検査における8つの下位尺度相互の間にどのような関係がみられるかを検討する。

（2）下位尺度間の相関の検討

B検査の下位尺度間の相関を中学生、高校生別に算出した結果を図表8-1および図表8-2に示す。中学生においても高校生においても、同じ関係志向の下位側面の間に中程度以上の正

図表 8-1 B検査下位尺度の内部相関(中学生)

の相関関係が認められる。つまり、D（対情報関係志向）の下位尺度であるD1、D2、D3の間には、中学生

下位尺度内容		D志向			P志向			T志向	
		D1	D2	D3	P1	P2	P3	T1	T2
B検査下位尺度	D1 情報を集める	1.00							
	D2 好奇心を満たす	0.47	1.00						
	D3 情報を活用する	0.39	0.37	1.00					
	P1 自分を表現する	0.28	0.10	0.09	1.00				
	P2 みんなと行動する	0.13	-0.03	0.08	0.46	1.00			
	P3 人の役にたつ	0.28	0.32	0.31	0.36	0.43	1.00		
	T1 物をつくる	0.15	0.21	0.21	0.05	0.05	0.09	1.00	
	T2 自然に親しむ	0.11	0.33	0.15	0.08	0.10	0.30	0.35	1.00

で $r=.37$ 注：無印… $p<.01$,*… $p<.05$,†… $p<.10$,ns…有意水準に達しない

～.47、高

校生では.32～.47の相関係数が得られ、P（対人関係志向）における下位尺度であるP1、P2、P3の間には、中学生で $r=.36$ ～.46、高校生では $r=.38$ ～.46の値が得られた。そして、T（対物関係志向）における下位尺度であるT1とT2の間には、中学生で $r=.35$ 、高校生では $r=.32$ の相関係数が得られた。すなわち、D（対情報関係志向）とP（対人関係志向）は3つの下位側面に、T（対物関係志向）は2つの下位側面に分けて考えることができるが、各々の下位尺度で測定される志向は、決して相反するものではなく、情報、人間、物という大きなくくりの下にまとまりをみせている。

図表 8-2 B 検査下位尺度の内部相関(高校生)

下位尺度内容		D 志向			P 志向			T 志向	
		D1	D2	D3	P1	P2	P3	T1	T2
B 検 査 下 位 尺 度	D1 情報を集める	1.00							
	D2 好奇心を満たす	0.47	1.00						
	D3 情報を活用する	0.38	0.32	1.00					
	P1 自分を表現する	0.23	0.08	0.02*	1.00				
	P2 みんなと行動する	0.07	-0.10	0.00ns	0.46	1.00			
	P3 人の役にたつ	0.22	0.28	0.25	0.38	0.41	1.00		
	T1 物をつくる	0.19	0.21	0.22	0.04	0.01*	0.06	1.00	
	T2 自然に親しむ	0.12	0.33	0.15	0.11	0.09	0.33	0.32	1.00

注: 無印… $p < .01$, *… $p < .05$, †… $p < .10$, ns…有意水準に達しない

次に、異なる志向の下位側面との間にみられる相関に着目すると、同じ志向の下位側面の間には得られた値よりもやや低い正の相関がみられる。これより、D（対情報関係志向）とP（対人関係志向）、D（対情報関係志向）とT（対物関係志向）、そして、P（対人関係志向）とT（対物関係志向）という異なる志向の下位側面同士は、弱いつながりによってゆるやかなまとまりをもつものと解釈できよう。なお、D2とP2の間には、中学生で $r = -0.03$ 、高校生で $r = -.10$ の負の相関がみられた。これらは、世の中の動きや仕組みを知りたいという知的側面からくる志向と、友人は多いほど楽しい、人とすぐに仲良くなれるといった社会的つながりに対する志向は、必ずしも共存するものではないことを示しているのだろう。

8-3-2 A検査とB検査の相関

A検査によって測定されるR（現実的領域）、I（研究的領域）、A（芸術的領域）、S（社会的領域）、E（企業的領域）、C（慣習的領域）の6つの職業領域に対する興味と、B検査で測定されるD（対情報関係志向）、P（対人関係志向）、T（対物関係志向）は、どのような関係にあるのだろうか。この点について明らかにするために、A検査とB検査の尺度得点の相関を算出したものを図表 8-3、図表 8-4 に示す。

図表 8-3 A 検査と B 検査の相関(中学生)

		A 検査					
		R	I	A	S	E	C
		現実的	研究的	芸術的	社会的	企業的	慣習的
B検査	D 対情報関係志向	0.08	0.32	0.33	0.23	0.35	0.36
	P 対人関係志向	0.00ns	-0.03	0.25	0.43	0.37	0.07
	T 対物関係志向	0.45	0.41	0.28	0.17	0.21	0.11

注:無印… $p < .01$,*… $p < .05$,†… $p < .10$,ns…有意水準に達しない

図表 8-4 A 検査と B 検査の相関(高校生)

		A 検査					
		R	I	A	S	E	C
		現実的	研究的	芸術的	社会的	企業的	慣習的
B検査	D 対情報関係志向	0.08	0.31	0.31	0.17	0.34	0.32
	P 対人関係志向	0.00ns	-0.07	0.17	0.44	0.35	0.02
	T 対物関係志向	0.48	0.42	0.35	0.18	0.22	0.09

注:無印… $p < .01$,*… $p < .05$,†… $p < .10$,ns…有意水準に達しない

A 検査における 6 つの職業領域毎にみていくと、R（現実的領域）は、T（対物関係志向）との間に比較的高めの正の相関を示しており（中学生 $r=.45$ 、高校生 $r=.48$ ）、組み立て、運転、修理、整備といった機械や部品を扱う現実的な職業領域の特徴がよく表れている。その一方で、R（現実的領域）は、P（対人関係志向）との間に有意な相関をみせておらず、物を対象とした仕事活動への興味と人との触れ合いを大切にしたいという志向は関係しないことが示された。

I（研究的領域）は、D（対情報関係志向）との間にやや高めの正の相関が（中学生 $r=.32$ 、高校生 $r=.31$ ）、T（対物関係志向）との間にも高めの正の相関（中学生 $r=.41$ 、高校生 $r=.42$ ）がみとめられ、研究的な興味や、情報への好奇心や収集、そして物を扱う活動への志向と関わりをもつことが示された。一方、P（対人関係志向）の間には低いながらも負の相関が示されたことから（中学生 $r=-.03$ 、高校生 $r=-.07$ ）、研究への興味と人間関係に対する志向は相反する傾向にあることがわかる。

A（芸術的領域）、S（社会的領域）、E（企業的領域）の 3 つは、D（対情報関係志向）、P（対人関係志向）、T（対物関係志向）のいずれの志向との間にも低～中程度の正の相関を示しており、情報、人間、物という 3 つの対象への志向すべてがこれらの領域に対する興味とつながりをもつことがわかる。C（慣習的領域）は、D（対情報関係

志向) (中学生 $r=.36$ 、高校生 $r=.32$)、および、T (対物関係志向) (中学生 $r=.11$ 、高校生 $r=.09$) との間に正の相関がみられた点は I (研究的領域) と同様である。それに加えて、P (対人関係志向) との間には弱いながらも正の相関がみられたことから、人間関係への志向とつながりをもつことがわかる。

8-3-3 A検査とB検査の下位尺度の相関

A検査によって測定されるR (現実的領域)、I (研究的領域)、A (芸術的領域)、S (社会的領域)、E (企業的領域)、C (慣習的領域) の6つの職業領域に対する興味と、B検査によるD (対情報関係志向)、P (対人関係志向)、T (対物関係志向) の関係性をさらに詳しくみていくために、A検査の6領域とB検査における8つの下位尺度の相関係数を算出したものを図表8-5、図表8-6に示す。

図表8-5 B検査(下位尺度)とA検査の相関(中学生)

		A検査					
		R 現実的	I 研究的	A 芸術的	S 社会的	E 企業的	C 慣習的
B検査 下位 尺度	D1 情報を集める	-0.00ns	0.17	0.34	0.19	0.35	0.33
	D2 好奇心を満たす	0.13	0.39	0.29	0.21	0.28	0.28
	D3 情報を活用する	0.07	0.18	0.15	0.14	0.18	0.23
	P1 自分を表現する	0.00ns	-0.04	0.20	0.24	0.37	0.00ns
	P2 みんなと行動する	0.03	-0.10	0.10	0.26	0.21	0.00ns
	P3 人の役にたつ	-0.03	0.05	0.28	0.53	0.28	0.14
	T1 物をつくる	0.45	0.29	0.23	0.00ns	0.18	0.10
	T2 自然に親しむ	0.28	0.39	0.23	0.29	0.16	0.08

注: 無印… $p<.01$, *… $p<.05$, †… $p<.10$, ns…有意水準に達しない

図表8-6 B検査(下位尺度)とA検査の相関(高校生)

		A検査					
		R 現実的	I 研究的	A 芸術的	S 社会的	E 企業的	C 慣習的
B検査 下位 尺度	D1 情報を集める	0.02	0.19	0.29	0.12	0.35	0.32
	D2 好奇心を満たす	0.09	0.36	0.32	0.17	0.28	0.22
	D3 情報を活用する	0.07	0.17	0.12	0.10	0.16	0.20
	P1 自分を表現する	-0.02	-0.08	0.18	0.26	0.37	-0.04
	P2 みんなと行動する	0.06	-0.12	0.01†	0.26	0.18	-0.00ns
	P3 人の役にたつ	-0.03	0.04	0.19	0.53	0.26	0.11
	T1 物をつくる	0.48	0.30	0.31	-0.01ns	0.19	0.07
	T2 自然に親しむ	0.29	0.39	0.25	0.33	0.17	0.08

注: 無印… $p<.01$, *… $p<.05$, †… $p<.10$, ns…有意水準に達しない

R（現実的領域）は、D（対情報関係志向）、T（対物関係志向）の下位尺度との間には、注目に値する相関を示しておらず、T（対物関係志向）における2つの下位側面との間に中程度の相関を示していた。そのうち、T2（自然に親しむ）との間にみられた値よりも（中学生 $r=.28$ 、高校生 $r=.29$ ）、T1（物をつくる）との間に得られた値のほうが強かった（中学生 $r=.45$ 、高校生 $r=.48$ ）。これより、現実的職業領域に対する興味は、ものを扱うことへの志向性と関りをもつこと、なかでも指先を使うことや壊れたものを修理することへの志向をもっともよく反映した傾向であるといえる。

I（研究的領域）は、P（対人関係志向）との間にわずかな負の相関がみられたが、Pを3つの下位尺度に分けて検討すると、P1（自分を表現する）、および、P3（人の役に立つ）の間にはほとんど相関がみられず、P2（みんなと行動する）との間に中学生で $r=-.10$ 、高校生では $r=-.12$ の負の相関がみられた。これより、研究的な職業領域への興味は、人間関係に対する志向のなかでも、グループで行動したり作業をするような集団での活動とは相容れない傾向であることが示された。

A（芸術的領域）、S（社会的領域）、E（企業的領域）と、D（対情報関係志向）、P（対人関係志向）、T（対物関係志向）のそれぞれの志向の間には、ほとんどの組み合わせにおいて正の相関が示された。これよりA（芸術的領域）、S（社会的領域）、E（企業的領域）の3領域は、3つの基礎的志向性をすべて反映した職業興味であるといえる。しかしながら、S（社会的領域）とT1（物をつくる）の間には、中学生、高校生ともに有意な相関がみられないことから、人に接したり助けたり教えたりする職業への興味は、物を組み立てるのが好きである、手先が器用であるという物作り志向とは関係をもたないことが分かる。また、A（芸術的領域）とP2（みんなと行動する）の間には、中学生では $r=.10$ という弱めの相関がみられるのに対して、高校生になると $r=.01$ というかなり低めの相関しかみられなくない。これは、芸術的な職業への興味が年齢や学年がすすむにつれて明確化され、グループ活動への志向とは関りをもたない興味傾向へと結晶化されていくためと考えられる。

C（慣習的領域を満たす）は、D（対情報関係志向）の下位尺度であるD1（情報を集める）、D2（好奇心を満たす）、D3（情報を活用する）の間には中程度の相関をみせており（中学生 $r=.23\sim.33$ 、高校生 $r=.20\sim.32$ ）、情報への関心や、好奇心、計画立案への志向とつながりをもつ興味であることが分かる。T（対物関係志向）の下位尺度T1（物をつくる）とT2（自然に親しむ）の間には、やや低めの相関がみられ（中学生 $r=.08$ と $r=.10$ 、高校生 $r=.07$ と $r=.08$ ）、物や自然への志向とは弱いつながりをもつことが示された。一方、P（対人関係志向）の下位尺度のうちP2（みんなと行動する）の間には、中学生、高校生ともに無相関、P1（自分を表現する）の間は、中学生では無相関、高校生では非常に低い負の相関（ $r=-.04$ ）が示されていた。よって、慣習的な職業への

興味は、グループでの行動や人との関わりに対する志向とは関係をもたないものといえるだろう。一方、P（対人関係志向）の下位尺度のうち P3（人の役に立つ）との間には、中学生、高校生ともに正の相関がみとめられたことから（中学生 $r=.14$ 、高校生 $r=.11$ ）、この領域への興味は、人を助けたり世話をするような愛他的傾向と関係をもつと理解できる。

8-3-4 A検査とC検査の相関

A検査によって測定されるR（現実的領域）、I（研究的領域）、A（芸術的領域）、S（社会的領域）、E（企業的領域）、C（慣習的領域）の6つの職業領域に対する興味と、同領域に対する自信の程度にはどのような関係性があるのだろうか。この点について明らかにするためにA検査とC検査の相関係数を算出したものを図表8-7、図表8-8に示す。これより、A検査による職業興味とC検査による自信は、さまざまな程度の相関関係にあることがわかる。

図表8-7 A検査とC検査の相関(中学生)

		A検査(興味)					
		R 現実的	I 研究的	A 芸術的	S 社会的	E 企業的	C 慣習的
C検査 (自信)	R 現実的	0.87	0.46	-0.00ns	-0.00ns	0.27	0.18
	I 研究的	0.46	0.85	0.08	0.09	0.23	0.28
	A 芸術的	0.04	0.11	0.83	0.32	0.49	0.17
	S 社会的	0.04	0.10	0.35	0.84	0.39	0.28
	E 企業的	0.24	0.21	0.45	0.29	0.79	0.22
	C 慣習的	0.18	0.28	0.19	0.25	0.31	0.78

注:無印… $p<.01$,*… $p<.05$,†… $p<.10$,ns…有意水準に達しない

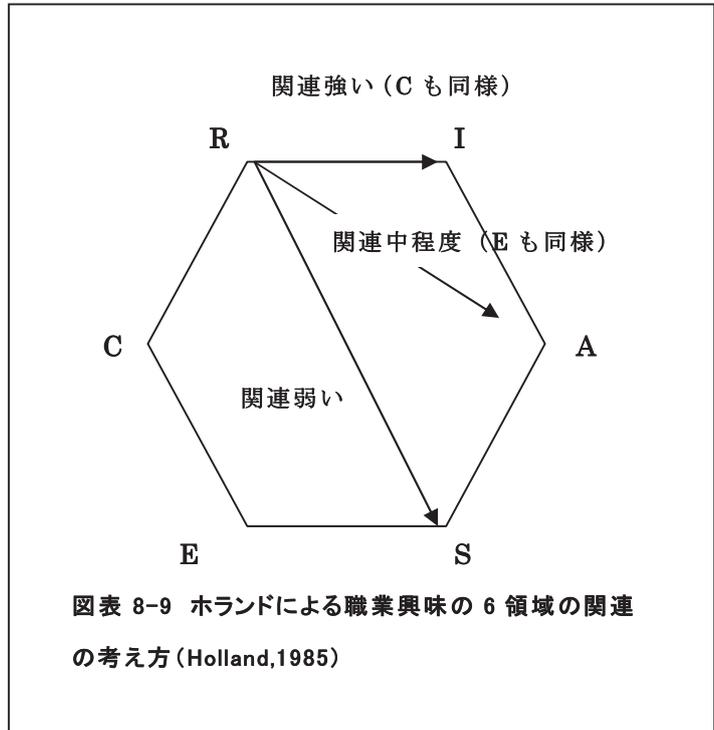
図表8-8 A検査とC検査の相関(高校生)

		A検査(興味)					
		R 現実的	I 研究的	A 芸術的	S 社会的	E 企業的	C 慣習的
C検査 (自信)	R 現実的	0.85	0.43	0.11	0.04	0.26	0.12
	I 研究的	0.43	0.83	0.17	0.11	0.22	0.23
	A 芸術的	0.13	0.18	0.81	0.21	0.49	0.11
	S 社会的	0.09	0.13	0.25	0.82	0.38	0.26
	E 企業的	0.22	0.19	0.45	0.27	0.78	0.16
	C 慣習的	0.12	0.24	0.16	0.25	0.27	0.76

注:無印… $p<.01$,*… $p<.05$,†… $p<.10$,ns…有意水準に達しない

まず、注目すべきは図表 8-7、図表 8-8 の対角線上に位置する相関係数、つまり同じ職業領域に対する自信と興味が強い相関関係にあることである。中学生では $r=.78$ 以上の、高校生では $r=.76$ 以上という極めて高い正の相関がみられることから、仕事活動を成功裡に行うことができるという自信は、その領域に対する興味が喚起するという関連性が示唆されたといえる。

次に、当該領域の興味とそれ以外の 5 領域への自信の程度の関係性をみていく。職業興味の 6 領域の理論を示したホランドは、RIASEC を六角形のそれぞれの頂点にあてはめるとき、隣り合う領域同士は最も関連が強く、一つ隣とは中程度の関連、対角線上の領域同士は最も関連が低い領域としている (図表 8-9)。こうした考え方と照らし合わせて結果をみると、ホランドの六角形で隣り合う職業領域同士の相関係数は、対角線上に位置する領域の間にみられる値よりも高い。この傾向が中学生と高校生に共通して示された。例えば、



A 検査における R (現実的領域) の得点は、当該領域への活動に対する自信ともっとも強い関係にあり (中学生 $r=.87$ 、高校生 $r=.85$)、六角形における両隣の領域、すなわち I (研究的領域) と間にみられる相関係数 (中学生 $r=.46$ 、高校生 $r=.43$) と C (慣習的領域) との間にみられる相関係数 (中学生 $r=.18$ 、高校生 $r=.12$) がそれに続く。そして、対角線上に位置する S (社会的領域) との間には、中学生で $r=.04$ 、高校生では $r=.09$ と極めて低い相関しかみられない。こうした相関の順序性が、他の 5 つの領域においても同じようにあてはあまることわかる。

これらの結果より、職業領域活動に対する自信の程度は、同じ職業領域への興味にもっとも強いかたちで反映されること、次に、類似した職業領域への興味に対して同じ領域よりも弱いかたちで反映されること、一方、異なる性質をもつ職業領域への興味にはほとんど反映されないことが明らかにされた。すなわち、ホランドの主張する六角形による RIASEC の位置づけが本データによって確認されたといえる。

8-3-5 A 検査と C 検査の得点差の検討

図表8-10 男女・学年別にみたA検査とC検査の得点差(中学生)

	変数	N	平均	標準偏差	最小値	最大値
中学生 1年男	R 現実的	1888	0.08	(3.06)	-18	14
	I 研究的	1893	0.62	(3.00)	-15	18
	A 芸術的	1873	0.43	(2.69)	-18	17
	S 社会的	1873	-0.22	(2.83)	-16	18
	E 企業的	1873	0.77	(3.06)	-14	17
	C 慣習的	1882	-0.33	(3.08)	-18	18
中学生 1年女	R 現実的	1799	0.18	(2.19)	-14	18
	I 研究的	1809	0.60	(2.39)	-13	18
	A 芸術的	1780	1.29	(2.75)	-10	18
	S 社会的	1804	0.21	(2.58)	-14	18
	E 企業的	1787	1.07	(2.79)	-16	18
	C 慣習的	1800	-0.02	(2.87)	-15	18
中学生 2年男	R 現実的	1807	0.19	(2.86)	-16	16
	I 研究的	1816	0.66	(2.85)	-17	15
	A 芸術的	1790	0.59	(2.54)	-12	15
	S 社会的	1805	-0.29	(2.57)	-13	09
	E 企業的	1793	0.96	(2.90)	-14	11
	C 慣習的	1801	-0.49	(3.17)	-17	09
中学生 2年女	R 現実的	1779	0.24	(2.02)	-12	10
	I 研究的	1780	0.56	(2.22)	-12	12
	A 芸術的	1769	1.63	(2.70)	-09	17
	S 社会的	1776	0.23	(2.58)	-15	09
	E 企業的	1773	1.35	(2.78)	-11	13
	C 慣習的	1777	-0.11	(2.86)	-16	12
中学生 3年男	R 現実的	1857	0.00	(3.04)	-15	14
	I 研究的	1861	0.55	(2.82)	-12	16
	A 芸術的	1836	0.89	(2.58)	-10	13
	S 社会的	1849	-0.47	(2.66)	-13	11
	E 企業的	1850	1.09	(2.88)	-14	13
	C 慣習的	1846	-0.61	(3.36)	-16	10
中学生 3年女	R 現実的	1752	0.08	(2.24)	-18	10
	I 研究的	1759	0.48	(2.30)	-18	13
	A 芸術的	1743	1.74	(2.74)	-18	17
	S 社会的	1754	0.18	(2.66)	-18	17
	E 企業的	1750	1.38	(2.81)	-18	14
	C 慣習的	1754	-0.42	(3.02)	-18	10

注 平均値はA検査からC検査を引いた値を示す

(1) 分析方法

職業興味を調べる A 検査と職務を遂行する自信の程度を調べる C 検査の関連については、中学生、高校生の結果をそれぞれ分析した第 5 章、第 6 章でも触れている。本章では、6 つの職業領域に対する興味と自信の関係性についてさらに詳しく分析するために、領域ごとに A 検査の興味得点から C 検査の自信得点を減じて興味と自信の差異得点を算出した。

図表 8-10、図表 8-11 は、それぞれ中学生と高校生の結果を学年、性別ごとに分類したものである。こうして、興味と自信の得点差を学年別、男女別に算出することで、発達の傾向や性差について検討することが可能になる。ここに示される平均値がプラスを示すならば、興味が自信を上回ることを意味しており、そうした活動をやってみたいとの思いが、上手くできるという自信よりも強いことになる。逆に、平均値がマイナスの値を示すならば、活動を成功裏に行う自信に比して、やってみたいとの興味はそれほど強くないといえる。

(2) 興味と自信の差について

得られた結果をみると、すべての対象に共通しているのは、C (慣習的領域) の値がマイナスを示していることである。すなわち、書類に記入したり、入力・転記のような事務的な作業について、多くの中高生がうまくできるであろうという自信を

図表8-11 男女・学年別にみたA検査とC検査の得点差(高校生)

	変数	N	平均	標準偏差	最小値	最大値
高校生 1年男	R 現実的	3213	0.03	(3.01)	-17	13
	I 研究的	3221	0.42	(2.81)	-18	13
	A 芸術的	3194	0.80	(2.66)	-16	17
	S 社会的	3213	-0.44	(2.68)	-18	09
	E 企業的	3201	1.06	(2.84)	-14	12
	C 慣習的	3205	-0.68	(3.21)	-18	12
高校生 1年女	R 現実的	3296	0.04	(2.31)	-12	14
	I 研究的	3305	0.44	(2.28)	-12	15
	A 芸術的	3281	1.82	(2.77)	-13	17
	S 社会的	3293	0.12	(2.74)	-13	15
	E 企業的	3290	1.43	(2.76)	-18	14
	C 慣習的	3290	-0.47	(3.11)	-18	16
高校生 2年男	R 現実的	3168	-0.06	(3.19)	-18	12
	I 研究的	3169	0.38	(2.84)	-18	18
	A 芸術的	3143	1.08	(2.76)	-16	15
	S 社会的	3160	-0.72	(2.84)	-18	11
	E 企業的	3155	1.00	(3.00)	-18	15
	C 慣習的	3156	-1.03	(3.39)	-18	14
高校生 2年女	R 現実的	3379	-0.06	(2.32)	-15	17
	I 研究的	3386	0.39	(2.31)	-12	18
	A 芸術的	3361	1.84	(2.75)	-09	17
	S 社会的	3383	0.07	(2.78)	-16	17
	E 企業的	3367	1.36	(2.72)	-14	14
	C 慣習的	3372	-0.83	(3.29)	-18	16
高校生 3年男	R 現実的	1966	-0.12	(3.23)	-18	18
	I 研究的	1970	0.49	(3.07)	-18	18
	A 芸術的	1954	1.15	(2.73)	-18	18
	S 社会的	1967	-0.60	(2.86)	-18	18
	E 企業的	1958	1.19	(2.90)	-18	18
	C 慣習的	1961	-1.02	(3.43)	-18	18
高校生 3年女	R 現実的	1972	0.08	(2.39)	-18	12
	I 研究的	1975	0.44	(2.31)	-18	16
	A 芸術的	1957	1.79	(2.77)	-18	16
	S 社会的	1970	0.06	(2.60)	-18	10
	E 企業的	1965	1.40	(2.71)	-18	12
	C 慣習的	1967	-0.81	(3.33)	-18	13

注 平均値はA検査からC検査を引いた値を示す

もつものの、それが興味につながっていないといえる。とくに男女に分けて値の変化を追っていくと、男子では、中学1年生-0.33、2年で-0.49、3年生-0.61、高校1年生-0.68、2年生-1.03、3年生-1.02、女子では、中学1年-0.02、中学2年-0.11、中学3年-0.42、高校1年-0.47、高校2年-0.83、高校3年-0.81と、学年の上昇にともない、興味と自信の間にみられるマイナス方向への開きが大きくなっている。すなわち、慣習的な活動では、発達的にみて早い段階から自信が興味を上回るが、その傾向は学年がすすむにつれて強くなることがわかる。

S（社会的領域）では、中学、高校を通じて男子はマイナスの、女子はプラスの値を示していた。すなわち、男子にとって世話をしたり相談にのったりという活動は、自信があっても興味につながるものではない。一方、女子においては、それほど高くないプラスの値がみられることから、人との関りを含む職業領域への自信がそのまま活動への興味につながるのだと解釈できる。

R（現実的領域）では、ほとんどの対象において低いプラスの値がみとめられた。この領域に対する興味の程度が低くなるという従来からの報告とあわせて考えると、今の中高生が、機械を作る、家を建てる、クレーンを運転するといった活動を日常生活のなかで経験する機会が少ないこと、さらに、そうした活動のプロセスを見聞きする経験も限られたものであることから、

興味、自信も似通った低い値にとどまっているのだと考えられる。

A（芸術的領域）では、すべての対象者でプラスの値がみとめられた。なかでも女子の得点はすべての学年で 1.00 を上回る高いものであった。これより、デザインしたり文やイラストを書くような活動をやってみたいとの興味が自信を大きく上回ること、そして、その傾向は女子においてとくに顕著であることがわかる。また、男子においても学年の上昇にともない得点が高くなる傾向にあることから、こうした活動への興味が発達とともに強くなるといえる。

E（企業的領域）においても、男女ともにプラスの高めの値が得られた。この領域では中学 1、2 年生の男子を除くとすべての対象者で 1.00 を超える高めの値が得られたことから、経営や企画、立案、取材を主とする企業的な仕事領域では、興味が自信の程度を大きく上回っていることがわかる。同領域に含まれる仕事活動は、中高生にとっては漠然としたイメージしかなく、関心や憧れを抱くものの、実際にそうした活動に触れる機会が少ないために、それほど強い自信をもてないでいるのかもしれない。あるいは、こうした活動への憧れや関心が強いために、できるか否かに関り無く、やってみたいとの気持ちが先にたつという解釈も成り立つ。

I（研究的領域）では、すべての対象者において低～中程度のプラスの値がみとめられ、年齢や性別による顕著な得点差はみられなかった。これより、調査や測定、分析などの活動を行う領域では、興味と自信の間にそれほど大きな開きはなく、興味がわずかに自信を上回る程度であると考えられる。

8-4 まとめ

以上、本章で行った尺度内外の相関分析から、A、B、Cそれぞれの検査がおおむね想定した通りの傾向を測定していることが示されたといえる。また、A検査とC検査の得点の差異について分析した結果、職業領域によって興味が自信を上回る場合と自信が興味を上回る場合があること、さらに、両得点に大きな差はみられない領域があることが明らかになった。また、ここで得られた差異得点のいくつかには、性別による違いや学年による変化がみられたことから、仕事活動に対する自信の程度と興味の程度は、すべての対象にとって一様なものではなく、性別や発達段階による違いを考慮しながら解釈していくことが望まれる。

第9章 職業興味の発達指標としての分化度の検討^{注9-1}

9-1 本章の目的

職業レディネス・テストが主な対象としている中学生、高校生は、成人に比べ、発達の途上にあり、職業志向性も基礎的志向性もだんだんと変化していく時期である。生徒の自分自身や職業に対する理解が深まるにつれて、検査で測定される尺度の値もそれに応じて変化することが考えられる。

職業レディネス・テストのA検査、C検査が理論的な枠組みとして用いているホルランドの理論では、職業興味が高い領域、低い領域がはっきり分かれているほど、職業意識の発達が進んでいるとみなす(Holland,1985)。つまり、職業意識の発達があまり進んでいない時には、自分がどんな活動や仕事が好きか嫌いかをうまく認識できていないので、高い領域と低い領域の差が大きくなる。しかし、職業意識が発達してくると、好きな活動や嫌いな活動がわかってくるので、領域間の好き嫌いの差が大きくなるということである。これは自信に関しても同様であろう。

ホルランドは職業興味の最も高い領域と低い領域との差を「分化度(differentiation)」と定義している。それに準じて、職業レディネス・テストにおいても、プロフィールを解釈する時に一つの手がかりとして分化度を用いている。ワークシートのWORK2では、A検査の標準得点の最高値と最低値の差を分化度として算出する。そして、分化度が50以上では、興味がよく分化している、30～50ではまあまあ分化している、30未満では興味が分化していないという解釈の規準を提示している。

そこで本章では、分化度という指標を使って、標準化調査で得られたデータを分析し、中学生、高校生のそれぞれで分化度がどのように変化するのかを検討する。職業レディネス・テストを素材として中学生や高校生の職業発達を捉える時、様々な観点からの解釈を行うことができるが、このうちの一つである分化度によって中学生、高校生の職業発達がどのように捉えられるのかを示すことは、職業レディネス・テストを使って解釈を行う利用者に有効な資料となると思う。

9-2 分析対象

調査の方法は第3章「標準化調査の概要」に準ずる。本章では中学生と高校生の全体のデータを取り上げた。分析の対象とした生徒の内訳は下記の通りである。

標準化調査に協力した全国38校の中学1年～3年生および62校の高等学校の1年生

注9-1 本章のデータの一部はキャリア教育学会(室山・松本,2006)で発表した。

～3年生。人数の内訳は以下の通り。中学生計 10,966 名（1年男子 1,905 名、1年女子 1,816 名、2年男子 1,825 名、2年女子 1,791 名、3年男子 1,866 名、3年女子 1,763 名）。高校生計 17,104 名（1年男子 3,244 名、1年女子 3,175 名、2年男子 3,185 名、2年女子 3,399 名、3年男子 1,980 名、3年女子 1,979 名）。

9-3 分析方法と結果

9-3-1 学校別、各学年男女別の分化度の分布

各検査について、個人毎に RIASEC および DPT の各尺度の粗点を算出した。粗点を「職業レディネス・テスト第3版」の換算表でパーセンタイル値に置き換えた後、検査毎に最も高い尺度から最も低い尺度の値を引き、これを各検査の分化度とした（0～100の値をとる）^{注9-2}。

図表 9-1 および図表 9-2 は、職業レディネス・テストのワークシートの解釈に従い、分化度が「30未満」、「30以上50以下」、「51以上」という規準で分けたときの、中学生と高校生の各学年男女別の人数の割合を示したものである。ワークシートではA検査の職業興味の分化度だけを扱うが、本章では、基礎的志向性を捉えるB検査および職務遂行の自信度を調べるC検査についても分化度を算出した。

まず図表 9-1 の中学生の結果を見ると、A検査とC検査の職業志向性については、男子、女子とも学年が上がるにつれて、分化度の「30未満」の割合が減り、「51以上」の割合が増えてくることわかる。学年とともに分化度が小さい者の割合が減り、分化度が高い者の割合が増すということは、1年生から2年生、3年生と学年が進むにつれ、

図表9-1 中学生における各検査の分化度の分布(%)

	分化度	中学全体 (n=10966)	1年生		2年生		3年生	
			男子 (n=1905)	女子 (n=1816)	男子 (n=1825)	女子 (n=1791)	男子 (n=1866)	女子 (n=1763)
A検査	30未満	13.22	18.46	12.12	16.51	11.71	11.59	8.64
	30～50	29.35	35.51	29.67	30.54	26.18	29.2	24.58
	51以上	57.43	46.03	58.21	52.95	62.11	59.21	66.78
B検査	30未満	31.59	34.71	32.9	35.17	28.33	31.9	26.27
	30～50	33.13	34.28	33.29	31.87	33.62	31.41	34.38
	51以上	35.28	31.01	33.81	32.96	38.05	36.69	39.35
C検査	30未満	13.74	20.11	12.57	17.36	11.45	13.13	7.48
	30～50	29.55	33.19	28.6	30.55	28.13	30.8	25.74
	51以上	56.71	46.7	58.83	52.09	60.42	56.07	66.78

注:数字は、各セルの全体計に対する該当者数の割合を示す。

注9-2 ホランドは米国版のVPI職業興味検査の結果を解釈する際に、検査の粗点を使って最高点と最低点の差を算出し分化度としているが、本章では日本語版VPIおよび職業レディネス・テストのワークシートの分化度の算出に従い、標準得点の最高点と最低点の差として分化度を定義する。

興味や自信の高い領域、低い領域が分化している生徒の割合が大きくなることを示している。

B検査の基礎的志向性に関しては、「51以上」という分化度が高い者の割合は男女とも学年が上になるにつれて高くなった。「30未満」は女子では学年とともに少なくなるが、男子では2年生でやや増えるなど、職業志向性に比べて明確な割合の変化は示されていない。

男女別にみると、どの学年でも分化度「30未満」では女子が男子より少なく、「51以上」では女子が男子よりも多くなっている。これはA検査、B検査、C検査すべて同じ結果である。男子に比べ、女子において分化度が高い者が多いことがわかる。

図表9-2 高校生における各検査の分化度の分布(%)

		1年生		2年生		3年生		
		高校生全体 (n=17104)	男子 (n=3244)	女子 (n=3317)	男子 (n=3185)	女子 (n=3399)	男子 (n=1980)	女子 (n=1979)
A検査	30未満	11.12	13.34	10.34	12.62	9.56	10.08	10.16
	30～50	28.8	32.32	28.1	30.48	26.49	28.08	26.24
	51以上	60.08	54.34	61.56	56.9	63.95	61.84	63.6
B検査	30未満	29.9	32.66	29.21	30.83	28.35	29.87	27.74
	30～50	32.58	32.25	31.59	33.72	31.4	33.68	33.9
	51以上	37.52	35.09	39.2	35.45	40.25	36.45	38.36
C検査	30未満	12.93	15.82	11.51	14.86	10.8	13.25	10.82
	30～50	28.65	29.86	27.97	29.91	28.51	28.52	26.24
	51以上	58.42	54.32	60.52	55.23	60.69	58.23	62.94

注:数字は各セルの全体計に対する該当者数の割合を示す。

次に図表 9-2 の高校生の分化度であるが、男子についてはA検査、B検査、C検査とも学年とともに、分化度が「30未満」の生徒の割合が減り、「51以上」の者の割合が増える。一方、女子では、1年生と2年生では、学年とともに「30未満」の割合は減り、「51以上」の割合は増える。しかし、2年生と3年生を比べるとA検査、C検査において「30未満」が若干増えている。「51以上」の者の割合もC検査では増えるが、A検査、B検査では2年生より3年生で若干減少している。男女を比較すると、どの学年でも分化度が「51以上」の者は女子の方が男子より多く、女子に分化度が高い者が多いことがわかる。分化度「30未満」については、3年生の女子において男子よりも割合がわずかに高いという以外は、女子の方が男子よりも割合が少なかった。この結果から中学生と同様に、高校生においても男子に比べ、女子に分化度の高い者が多いといえる。ただ、高校生の男子が、中学生と同様に学年とともに分化度が小さい者が減り、高い者が増えていくという傾向を示すのに対し、高校生の女子は2年生に比べ3年生の方に分化度が高い者が多いとはいえないという結果が示されている。

なお、中学生、高校生の両方のデータをみると、分化度「30未満」は全体の10%強、「30～50」は全体の30%弱、「51以上」は50～60%程度となっている。ワークシートで

は、「30 未満」は「興味が分化していない」、「30～50」は「まあまあ分化」、「51 以上」は「よく分化している」となっている。各規準に含まれる生徒の割合からみると、「まあまあ分化」の得点の範囲が狭く、「よく分化している」の得点の範囲が広い。職業レディネス・テストのワークシートでは、職業興味のプロフィールをみて、その生徒の興味のある領域、ない領域がどの程度分かれているのかを判断する一つの手がかりとして分化度を用いる。この規準は、他の多くの人と比較した時に個人の分化度がとても高いのか、中間なのか、とても低いのかを厳密に仕分けするために用意されているものではなく、個人のプロフィールが描かれた時に興味の有無が職業領域に関してある程度分かれているかどうかを判断することを目的としている。そこで、プロフィール上では、興味の高い領域と低い領域との差が 51 以上あれば「よく分化している」と解釈するのである。ただ、中学生、高校生の分布に照らして考えるのであれば、分化度がそれほど低くはないが平均より若干低めである場合を「まあまあ分化」、平均以上であれば「よく分化している」という解釈になる。

9-3-2 学校別、各学年男女別の分化度の平均値の検討

前節では、ワークシートの規準にしたがって、それにあてはまる生徒の割合を算出し、中学生および高校生の男子において、学年とともに、分化度の小さい者が減り、分化度の大きい者が増えるという結果を確認した。そこで次に、中学校、高校別に、各学年男女別に、A～C 検査の分化度の平均値を算出した。中学校と高校における各学年男女別に算出した各検査の平均値と標準偏差を図表 9-3 および図表 9-4 に示す。

図表9-3 中学校における学年別男女別各尺度の分化度(最大値—最小値)

	1年男子	1年女子	2年男子	2年女子	3年男子	3年女子
	n=1905	n=1816	n=1825	n=1791	n=1866	n=1763
	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)
A検査	48.69(19.89)	53.92(19.62)	51.63(20.18)	55.45(19.75)	55.02(19.86)	58.35(19.24)
B検査	39.64(20.89)	41.06(22.06)	40.68(21.37)	44.02(22.06)	42.81(22.28)	44.94(22.04)
C検査	48.72(20.35)	54.29(19.61)	51.43(21.00)	55.31(19.96)	53.28(20.41)	58.65(18.83)

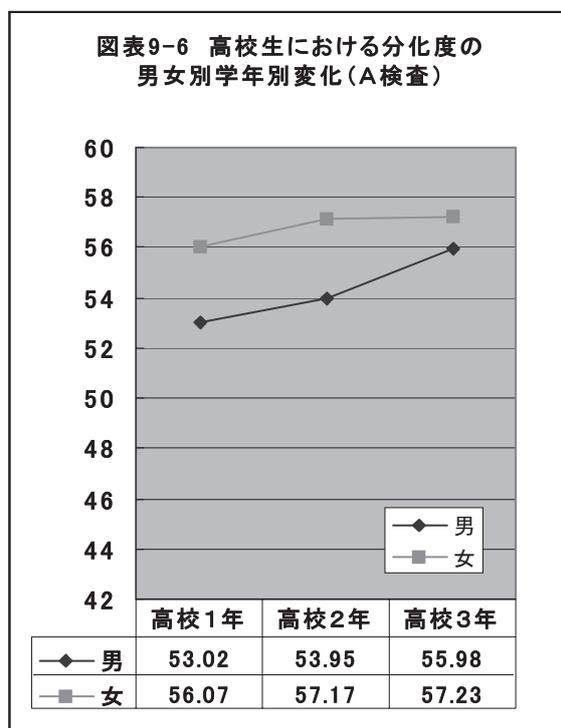
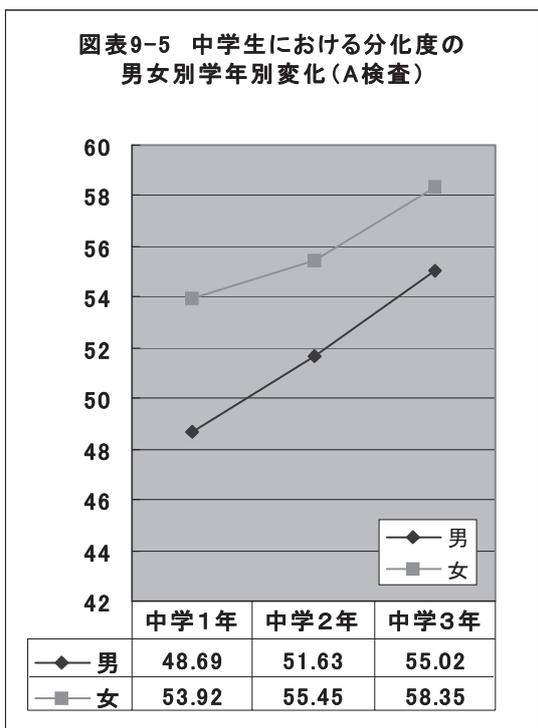
図表9-4 高校生における学年別男女別各尺度の分化度(最大値—最小値)

	1年男子	1年女子	2年男子	2年女子	3年男子	3年女子
	n=3244	n=3317	n=3185	n=3399	n=1980	n=1979
	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)	mean(SD)
A検査	53.02(19.81)	56.07(19.33)	53.95(20.07)	57.17(19.36)	55.98(19.22)	57.23(19.75)
B検査	41.66(21.74)	44.11(21.73)	42.41(21.60)	44.57(21.80)	42.64(20.93)	44.24(21.84)
C検査	52.52(20.63)	55.48(19.61)	52.83(20.39)	55.83(19.22)	54.40(20.09)	56.11(19.28)

(1) 職業興味における分化度

職業志向性のうち、職業興味を調べる A 検査の分化度について、学校別に学年別、男

女別で平均値を算出し、グラフにした（図表 9-5、図表 9-6）。



①中学生における職業興味の分化度

中学生の学年別男女別の結果を図表 9-5 に示す。学年による分化度の変化をみると、学年とともに分化度が大きくなることがわかる（男女あわせた平均値：中学1年 51.24、2年 53.52、3年 56.64）。男子に比べ女子の方が1年生のときから分化度が大きく、やりたい職業とやりたくない職業の区別は女子の方が早くから明確になっているようである。あるいは、A検査には「どちらともいえない」という選択肢があるが、女子の方がやりたいかやりたくないかをはっきり回答する傾向があるので^{注9-1}、興味の高い領域と低い領域の得点差が大きくなっている可能性もある。なお男女とも学年とともに分化度が上昇するという結果は、学年が上になるにつれて職業への意識が高まるとすれば、分化度が職業興味の発達を反映しているというホルランドの理論を裏付けるものである。

②高校生における職業興味の分化度

高校生の学年別男女別の結果を図表 9-6 に示す。学年による分化度の変化をみると、学年とともに分化度が大きくなることがわかる（男女あわせた平均値：高校1年 54.5、2年 55.56、3年 56.61）。

注9-1 「職業レディネス・テスト第3版手引き(p.100)」によれば「どちらともいえない」の選択は男子に比べ女子よりも多い。中学生では、男子の平均選択数は 16.63、女子の平均選択数は 14.31 である。高校生では男子が 16.82、女子が 13.82 である。

中学生と同じく高校生女子は1年の時から男子よりも分化度が高い。1年生から2年生になる時の上がり方に比べ、2年生、3年生ではほとんど変化しない。男子は女子に比べ1年生の時の分化度が低いが、2年生にかけてわずかに上がり、特に2年生から3年生に大きく分化度が高くなる。高校生のデータをみると、女子はそれほど大きく変化しないが、男子において特に2年生から3年生に分化度が高くなる点が特徴である。

③中学生と高校生の職業興味の分化度の比較

上述した中学生と高校生の職業

興味に関する分化度を一つのグラフに示したものが図表 9-7 である。中学生と高校生の値を比較すると、中学3年の分化度が一番高くなっており、高校1年では中学3年よりも分化度が低くなるが、中学2年よりは高い。次に、男女間で比較するとどの学年でも女子の分化度が男子よりも高い（平均値：中学女子 55.86 > 男子 51.77；高校女子 56.76 > 男子 54.07）。

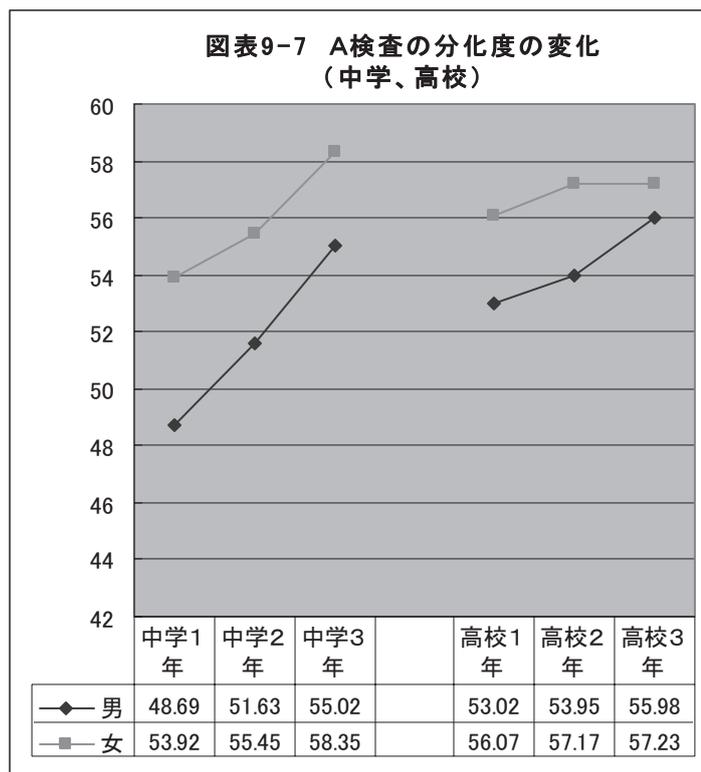
中学生、高校生別に学年×性の2要因の分散分析を行った結果では、中学生で学年と性の主効果が有意となった ($F=67.83, p<.01$; $F=116.72, p<.01$)。学年に関する分散分析の結果、1年生、2年生、3年生の順に分化度は大きくなることがわかった。また、男子より女子の分化度が大きいという結果が確認された。高校生では学年と性の主効果 ($F=13.68, p<.01$; $F=65.01, p<.01$) の他、学年と性の交互作用効果も有意となった ($F=3.50, p<.05$)。

(2) 職務遂行の自信度における分化度

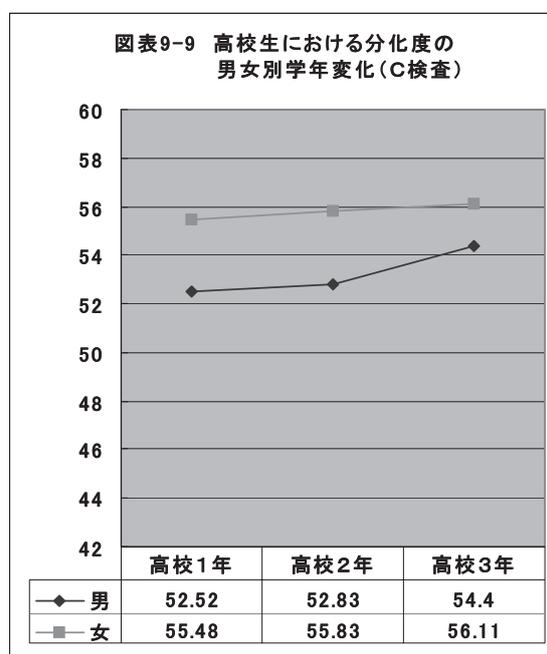
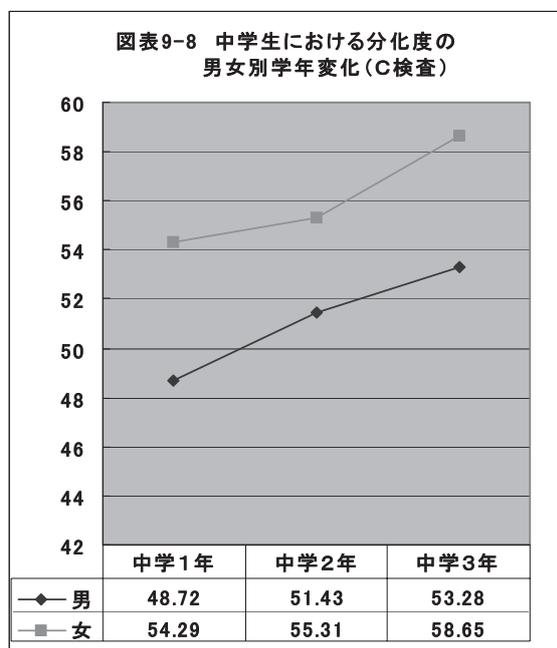
職業志向性に関するもう一つの尺度であるC検査の職務遂行の分化度について、学校別に学年別、男女別で平均値を算出し、グラフにした（図表 9-8、図表 9-9）。

①中学生における職務遂行の自信度の分化度

まず、中学校に関して、学年別男女別にグラフにしたものが図表 9-8 である。職務遂行の自信度の分化度は、概ね職業興味（図表 9-5）と同様の傾向が見られた。細かくみると中学生の女子、中学1、2年の男子に関しては、A検査もC検査も分化度はほぼ同じように変化



し、同程度の水準であるといえる。ただ、中学3年の男子に関しては、興味(M=55.02)よりも自信の分化度(M=53.28)が若干低くなった。



② 高校生における職務遂行の自信度の分化度

高校生の学年別男女別に職務遂行の自信度の分化度をグラフにした(図表9-9)。

女子では学年間で分化度にほとんど変化が見られない。一方、男子では、1、2年生ではあまり変わりが無いが、2年生から3年生にかけて分化度が高くなっている。

なお、A検査の職業興味と比較すると(図表9-6)、高校生の男女に関しては、興味よりも自信の分化度は若干低くなっている。

中学生、高校生別に学年×性の2元配置の分散分析を行ったところ、どちらも学年と性の主効果がそれぞれ有意となった(中学生 $F=44.78, p<.01$; $F=162.36, p<.01$: 高校生 $F=4.92, p<.01$; $F=65.59, p<.01$)。

③ 中学生と高校生の職務遂行の自信度の分化度の比較

上述した中学生と高校生の職業興味に関する分化度を一つのグラフに示したものが図表9-10である。

中学生では分化度が学年によって大きく変化するのに対し、高校生ではそれほど大きな変化をみせない。中学1年生から高校3年生を通して見ると、女子では、中学3年生がかなり高くなり、その後、高校1年生で中学2年生とほぼ同じレベルになり、それが高校3年生まで継続する。男子では、中学1年生から2年生にかけて分化度が高くなり、中学3年生もやや上昇するが、高校1年生で若干低下し、その後、高校3年生で少し高くなる。職務遂行の自信度は職業興味(A検査)と同じような変化をするようだ。男女

間では、女子の方が男子よりも常に分化度が高くなった。

(3) 基礎的志向性における分化度

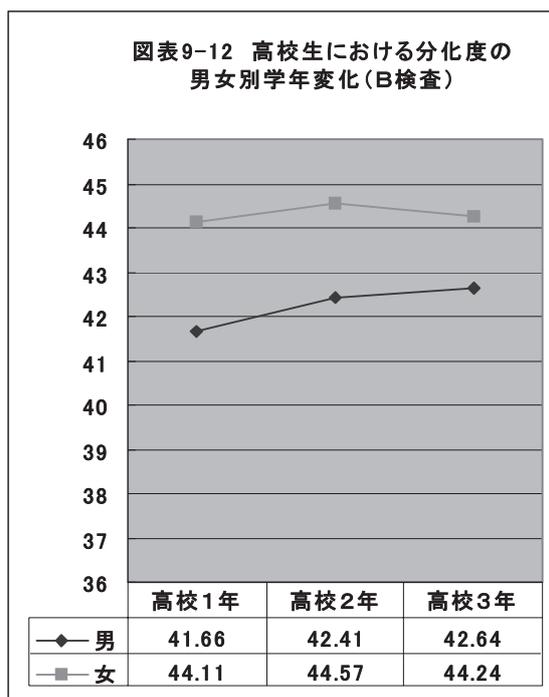
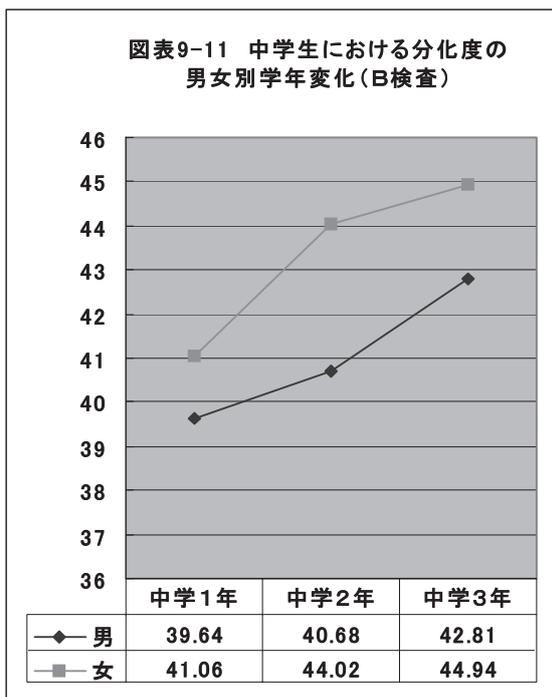
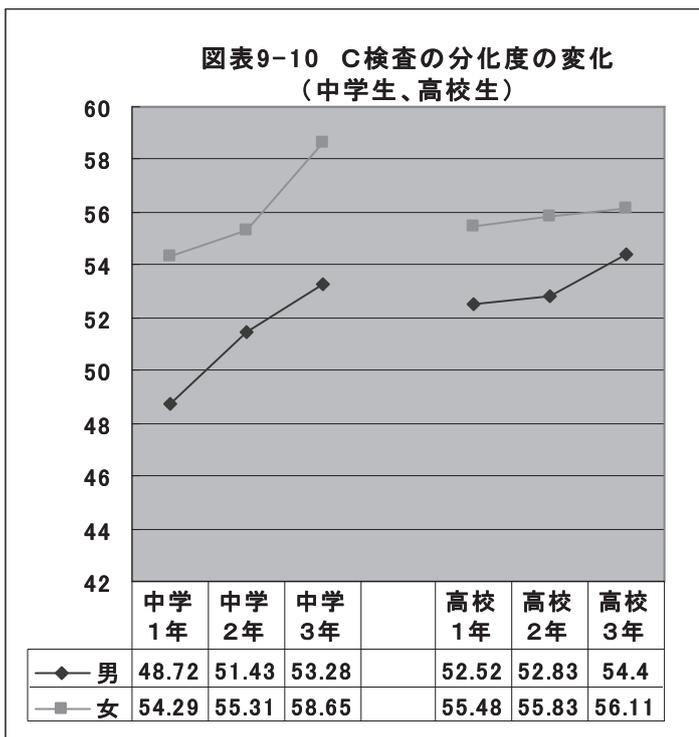
職業志向性を調べるA検査とC検査に対して、B検査では必ずしも職業にかかわらず、日常生活の興味について回答を求める点が特徴である。B検査の分化度について、学校別に学年別、男女別で平均値を算出し、グラフにした(図表9-11、図表9-12)。

① 中学生における基礎的志向性の分化度

中学生の男女別学年別の平均値を図表9-11に示す。中学生では学年とともに分化度が高くなる。女子は1年から2年にかけて分化度が上昇している。男子は2年から3年にかけての変化が大きい。女子の方がどの学年でも男子より分化度が大きく、中学2年生での差が一番大きい。

② 高校生における基礎的志向性の分化度

高校生の男女別学年別の平均値を図表9-12に示す。高校生では中学生ほど大きな変化

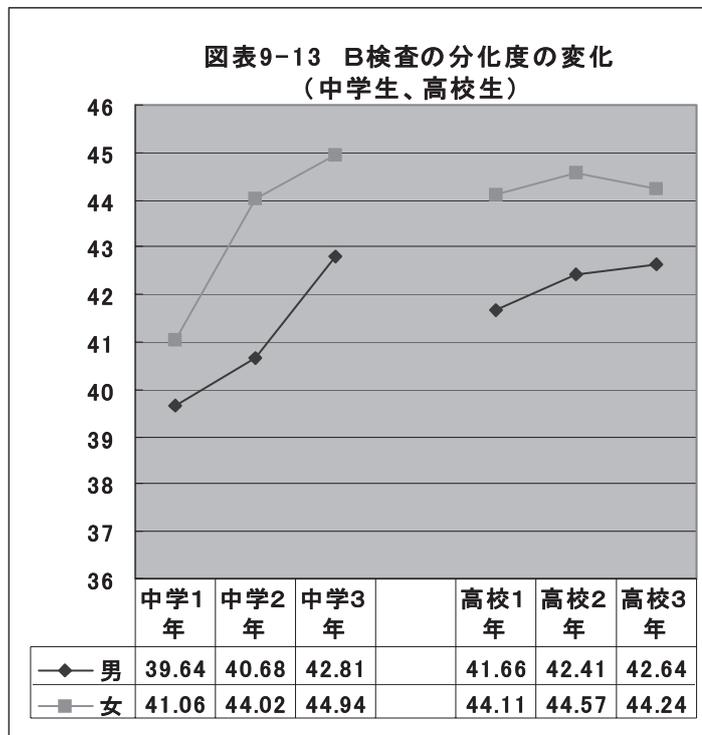


は見られない。女子は2年で最も高く、1、3年はほぼ同程度である。男子は1年から3年にかけて少しずつ上がっていくがその変化は大きくない。

③中学生、高校生の基礎的志向性の分化度の比較

中学生、高校生を通してみると(図表9-13)、中学3年の分化度の高さに比べて高校1年ではやや低下する。女子は男子より全体に基礎的志向性に関しても分化度が高く、中学2年以降はほぼ同じレベル(44~45)で推移している。

男子は、それよりやや遅れており中学3年以降になってレベルがほぼ一定になる(42~43)。分散分析の結果では中学生の場合、学年と性の主効果が有意となった($F=23.45, p<.01$; $F=29.54, p<.01$)。高校生では、性の主効果のみが有意となった($F=36.80, p<.01$)。



9-4 まとめ

本章では、職業レディネス・テストの解釈の際に用いる分化度を一つの手がかりとして、中学生、高校生の職業発達を検討した。まず、分化度の分布を調べたところ、中学生の男女と高校生の男子において、職業興味と職務遂行の自信度という職業志向性に関して、学年とともに分化度の低い者が減り、分化度の高い者が増えるという結果が得られた。基礎的志向性に関しても、職業志向性ほど顕著ではないが、分化度が大きい者の割合が学年とともに増加した。高校生の女子においては1年生に比べ2年生の方が、分化度の高い者が多かったが、2年生と3年生を比べると学年が上になると分化度の高い者が多くなるという結果は見出されなかった。男女を比較すると分化度が高い者の割合は女子の方がどの学年でも多く、女子の方が各検査における得点の高低がはっきりしている割合が高いことが示された。

一方、平均値に関して職業志向性、基礎的志向性に関して分化度を調べた結果、中学生では学年とともに分化度が大きくなるという結果が得られた。これは分化度の分布に関する結果を裏付けるものであり、ホランドの理論から予想される仮説とも一致した。

高校では変化の程度は中学生よりも緩やかになるが、職業興味や職務遂行の自信度と

いった職業志向性に関する分化は少しずつ進んでいくようである。基礎的志向性に関してはそれほど大きな変化が見られなくなる。職業に関連した理解は年齢や経験とともに進んでいくが、基礎的志向性は個人のパーソナリティの特徴を反映する部分でもあるので、ある程度の年齢になるとだんだんレベルが固まってくるのであろう。

なお、中学生、高校生を通してみると、中学3年生までは分化度は上昇傾向にあるが、高校1年生で中学2年生程度まで値が下がり、その後、また高校3年生にかけて上昇傾向をたどる。このように高校1年生で中学3年生より分化度が下がる理由にはいろいろ考えられる。例えば、今回の標準化調査の対象校はすべて公立のため、中学3年生は進学のためには受験をする必要があり、他方、高校生は受験を経て入学した生徒である。そこで、中学3年生では受験という大きなイベントを機に、進学先を決めるため、将来何がしたいかをよく考えなくてはならず、その結果、分化度が高くなっている可能性もある。高校生になると、入学直後で新しい環境になり、将来のことについて不確定な要素がでてくるので分化度が下がることもあろう。ただ、これは一つの解釈であり、受験の影響があるかどうかは、中学から高校まで受験をすることなく持ち上がりで進学できる中高一貫校でのデータなどと比較しないと明確にはならない。また、厳密な意味で職業発達を論じるためには、一人の生徒が中学生、高校生の時期を通してどのように変化するかを示すようなデータを追跡する必要がある。これらは今後の課題である。

また、分化度を指標とした時、中学生に比べて高校生での学年間での変化は少ない。しかし、高校生での分化度の学年間変化が緩やかであるといっても、約17,000人という大規模な標本において学年とともに右上がりの傾向は確認されているので、分化度という指標が高校生の職業意識の発達を反映していることは確かであると思う。中学生に比べ高校生では分化度の変化も少し落ち着き、職業意識の発達が分化度以外の指標に現れてくる可能性も考えられる。本章では、発達の一つの目安として、分化度を上げしたが、職業レディネス・テストでは、その他いろいろな観点から一人の生徒の結果を解釈することができる。分化度はそういった様々な指標の一つとして解釈していただく必要があると思う。

この他、分化度に関しては、どの検査においても、各学年で男女差が見られたことが特徴であった。分化度の分布と平均値のいずれにおいても、全般に女子の方が男子より分化度が高い。これは女子の方が男子よりも自らの職業興味をよく理解しているというように解釈することもできるが、一方で、好きと嫌いをはっきり回答する傾向の強さが女子の方が高い結果として捉えることもできる。職業レディネス・テストの手引きを作成する際に分析した結果では、例えば職業興味において「やりたい」、「やりたくない」という回答の間にある「どちらともいえない」という回答は男子の方が多かったことが確認されている（職業レディネス・テスト第3版手引き, 2006）。

以上、各尺度の分化度を手がかりとして、標準化調査のデータにおける学年間の比較、

男女別の違いを検討した。学年が上になると徐々に分化度が高くなるという傾向は、年齢とともに職業への興味や関心が発達するとすれば、分化度はそれをよく反映した指標であることを裏付ける結果であるといえる。なお、学年あるいは年齢とともに職業選択に向けた意識がどのように発達するか、また、それが分化度とどう関連するかについては、本報告書の第 13 章で検討する。

<参考文献>

- Holland,J.L. 1985 Making Vocational Choices. Prentice-Hall. (渡辺三枝子・松本純平・館 暁夫 共訳 1990 「職業選択の理論」 雇用問題研究会)
- 室山晴美・松本純平 2006 職業レディネス・テスト第 3 版の開発Ⅱ 日本キャリア教育学会第 28 回研究大会発表論文集, 100-101.
- 労働政策研究・研修機構 2006 「職業レディネス・テスト第 3 版手引き」 雇用問題研究会

第 10 章 特別集計に関する分析

10-1 本章の目的

職業レディネス・テストでは、職業興味を測る A 検査への回答を使った特別集計を使った解釈を用意している。この方法は「手引き」で解説されているほか、第 3 版で新しく開発したワークシートの「WORK プラス」でも部分的にとりあげられている。A 検査を使った特別集計には、以下の 4 つの視点がある。1. 曖昧な回答の程度、2. 人気のある職業への同調度、3. 職業に対する関心のユニークさ、4. たくさんの職業への興味^{注 10-1}の程度である。特別集計によりこれらの情報を提供しようとした背景をまず説明しておきたい。

テストを実施する目的は、言うまでもないことであるが、テストが提供する情報を得たいためであり、それはテスト結果として提供される。では、テスト結果はどのようにして得られるのだろうか？

テストの結果を得る手続きは、

- ① まず、各検査項目に対して定められた回答をする。
- ② 次に、これらの回答に定められた得点を与える。
- ③ 次に、これらの得点を、定められた検査項目と各尺度との関係に従って集計し、尺度ごとの得点を集計する。(A、C 検査の場合は、RIASEC の 6 つ尺度、B 検査の場合は、DPT の 3 つの尺度)
- ④ 最後に、尺度ごとに、定められた換算表に従って、標準得点を求める。

こうして得られた標準得点が、「結果の見方・生かし方」を使いながらプロフィールに描かれ、いくつかのワークを経験しながら、進路学習や職業情報の探索など、キャリア教育で活用されることになる。より具体的には、RIASEC のプロフィールや DPT のプロフィールとして捉えられた個々の生徒の特徴が、テストの結果として利用されるわけである。しかしながら、テストの実施を通して、テストの受検者が示す個性的な特徴は、実は、テストの結果として集計される情報だけではない。例えば、クラスで、「職業レディネス・テストを実施します」ということを伝えた瞬間の一人ひとりの表情やしぐさなどを詳細に記録できるとするならば、それぞれはすべて進路問題に対して個々人が有している個性的な特徴を反映しているはずである。テスト実施中に各検査項目に回答する時間について観察することができるのであれば、それにも同じようなことがいえる。個々の受検者の回答する様子を観察してみればわかるが、すべての検査項目に対して同じよ

注 10-1 ワークシートの WORK プラスではこのうち、1 と 4 を集計する欄がある。

うなペースで回答する受検者はむしろ稀である。ある項目は、問題を読んでほとんど間を空けずに回答するのに対して、ある項目では、首をかしげたりあごに手を当てて考え出したりして時間をかけた後で回答する。その個性的な様は、回答に時間をかけた項目を記録し、その一つ一つが受検者にとってどんな意味があるのかを話題にしていくことができるのなら、更に受検者の個性に迫れるのではないかと思えるほどである。

受検者がテストの実施の過程で示す個性の特徴を、既定の尺度以外でもなんらかの形で提供できないか、ということがテスト開発の過程の中でたびたび議論された。その結果として取り込まれたのが特別集計である。すなわち、回答用紙の中に残されている回答の傾向を特別に集計し、その特徴をも自己理解の手がかりとして生かしていけないかという問題意識である。

「職業レディネス・テスト」においては、A 検査を使った特別集計と B 検査を使った特別集計が手引きに掲載されている（手引きの 29 ページの「特別集計」の項）。B 検査の特別集計は、下位尺度を用いたもので手引きなどでも詳しい解説があるので、ここでは、A 検査の回答傾向を取り上げることにする。

A 検査を使った特別集計では、次の 4 つの視点が示される。すなわち、①「曖昧な回答がどのくらいあるか」、②「人気のある職業への同調度」、③「職業に対するユニークな関心を持っているか」、④「たくさんの職業に関心を示しているか」である。

職業レディネス・テストを利用しようとする者は、これらの特別集計に関しても情報を得ることができる。具体的には、①および④に関しては、「結果の見方・生かし方」の「ワーク・プラス」において、基準に従って、同世代の回答傾向との比較を通して簡単な解釈ができるようになっている。②および③に関しては、回答用紙の A 検査の回答欄の下にある「チェック 1」と「チェック 2」の数値を得ることができる。同世代の回答傾向との比較を通して簡単な解釈するための基準は、手引きの 30 ページに示されている。

本章では、これらの基準の元になっている統計についてより詳細な分析をして、その集計数値の解釈について考察を加えたい。

10-2 分析対象

調査の方法は第 3 章「標準化調査の概要」に準ずる。本章で分析のため用いるデータは、他の章と同じ、標準化調査のデータである。一部で、検討のため大学生のデータも用いる。標準化調査の際に同時に取得したアンケート調査結果も利用しているので、分析の対象数が他の章と異なる部分がある。

10-3 分析方法と結果

図表 10-2 ワークシートでの「曖昧な回答」の判断の目安

A 検査全体における「__」の数の 解釈	回答の目安	
	男子	女子
曖昧な回答が多い	28 以上	23 以上
曖昧な回答は平均的	6-27	6-22
曖昧な回答が少ない	5 以下	5 以下

(2) 他の変数との関連

「曖昧な回答がどのくらいあるか」を示す 3 グループと他の変数をクロスすることによって、この特別集計の意味することを分析してみる（図表 10-3）。

「曖昧な回答」を、男女別学年別にみても、検査の採点をする時の基準が男女別なので男女の比較は意味がないが、大きな学年差は男女とも見られない。

「曖昧な回答」を、タイプ別にみても、E や A タイプで I や R タイプに比べると「曖昧な回答」が多い者の割合が高い。

「曖昧な回答」を、分化度別にみても注 10-2、分化度の大きい者には、「曖昧な回答」が平均的な者の割合が高いのに対して、分化度の小さい者には、「曖昧な回答」が多い者や少ない者の割合が高く、際立った違いが見られる。

「曖昧な回答」を、進路決定や希望職業の明確さ別にみても、「決まっている」や「全く決まっていない」というような両端の回答を示す者は他のそうでない者に比べると、「曖昧な回答」が多い者の割合が低く、逆に「曖昧な回答」が少ない者の割合が高いという傾向が見られる。

質問紙法では、一般的に「どちらともいえない」という回答は、結果の信頼性を落とすものであるという捉え方がされる。しかし、ここでは、他の学生・生徒と比較して、どの程度「曖昧な回答」をしているのかを捉える 1 つの手がかりを提供するものという位置づけである。受検者自身がそうした状況をどう考え、どう対処していくのかを考えることの方が重要である。

注 10-2 分化度は興味の 6 領域のうち、最も高い得点(パーセンタイル値)から最も低い得点 (パーセンタイル値) を引いた差として定義する。

図表 10-3 「曖昧な回答」と他の変数との関連の検討

		曖昧な回答(割合%)		
		多い	平均的	少ない
	全体計	15.0	69.5	15.4
性別	男	15.4	68.9	15.7
	女	14.7	70.2	15.2
学校別	中学生	15.0	70.2	14.8
	高校生	15.1	69.1	15.8
男女別学年別	男中1	13.9	69.3	16.8
	男中2	16.0	67.4	16.6
	男中3	14.8	71.2	14.1
	男高1	15.9	68.0	16.1
	男高2	15.8	69.2	15.0
	男高3	15.8	68.6	15.6
	女中1	15.3	70.1	14.6
	女中2	15.8	69.7	14.5
	女中3	14.0	73.7	12.3
	女高1	14.7	69.3	16.0
	女高2	14.6	69.5	15.9
	女高3	13.6	70.3	16.1
タイプ別	R	16.6	66.3	17.0
	I	16.9	68.5	14.7
	A	12.7	70.4	16.9
	S	16.6	68.4	15.0
	E	11.6	73.7	14.7
	C	15.6	70.1	14.3
分化度	分化度大	8.9	79.2	11.9
	分化度中	22.9	63.0	14.1
	分化度小	26.3	37.9	35.8
希望進路	決まっている	12.3	67.7	20.0
	大体決まっている	14.8	70.9	14.2
	まだあまり決まっていない	17.4	69.7	12.9
	まったく決まっていない	12.6	67.3	20.1
将来の仕事	よく考えている	12.3	69.0	18.7
	大体考えている	16.0	71.0	13.0
	あまり考えていない	17.2	68.9	13.9
	まったく考えていない	12.3	65.2	22.4

10-3-2 「人気のある職業への同調度」(同調性)

(1) 基準の背景

この特別集計は、A 検査の項目に中で、第 1 列目に配された 6 項目についての回答のうち、「やりたい」という回答の数を集計するものである。

これらの 6 項目は、A 検査を構成する 54 項目について「やりたい」という回答の度数

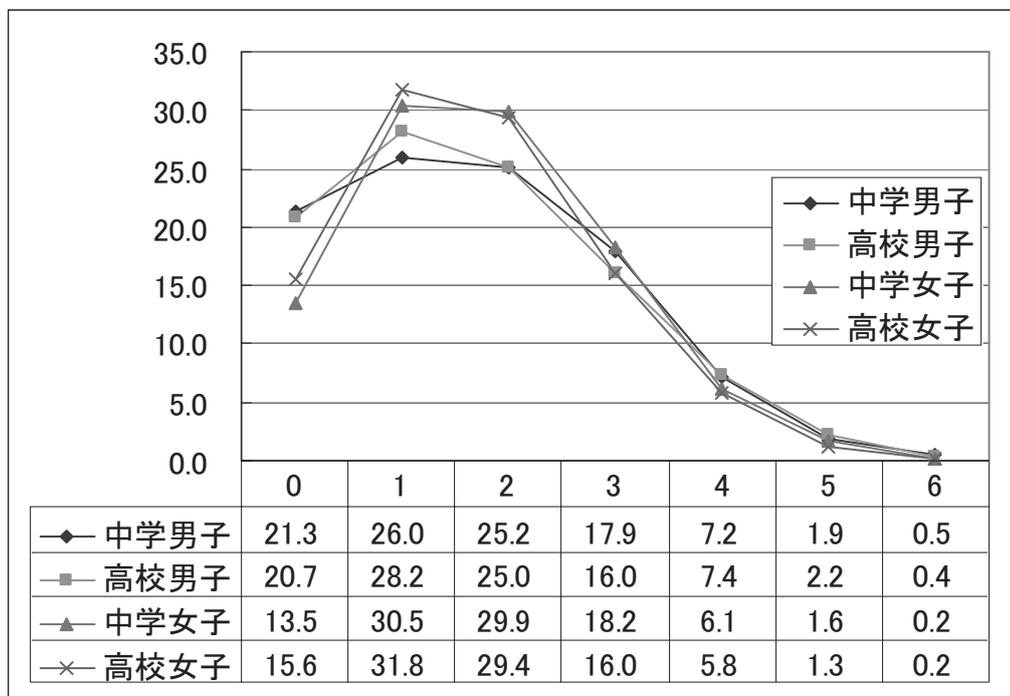
分布が求められ、「やりたい」という回答率の高い項目、すなわち、多くの学生・生徒に「人気のある職業」を第1列に配している。この第1列に対する回答傾向から、「人気のある職業」への同調度をみようとしている。第1列の「やりたい」という回答の数は、最小値が0、最大値が6である。実際の集計では、回答用紙のチェック1の欄を利用する。手引き30ページには、次のように、この得点を大きく分けて2グループにして解釈するようになっている（図表10-4）。

図表 10-4 手引における「人気のある職業への同調度」の判断の目安

A 検査一列目に対する○の数の解釈	男女とも
人気のある職業への同調度がみられる	4以上
人気のある職業への同調度がみられない	3以下

「人気のある職業への同調度」を中学校、高等学校の男女別に集計したグラフが図表10-5である。男女別中高別の4グループについて度数分布をみると、年齢差より男女差が見られるが、男女とも1をピークとする分布である。また、3以上の割合は4つのグループで同じような割合を示している。男子の方が女子に比べると「同調度がみられる」者が多い。

図表 10-5 人気のある職業への同調度の学校、男女別集計



(2) 他の変数との関連

「人気のある職業への同調度」を示す2グループと他の変数をクロスすることによっ

て、この特別集計の意味することを分析してみる。(図表 10-6)

図表 10-6 「人気のある職業への同調度」と他の変数との関連

		同調度の回答(割合%)	
		傾向がある	傾向がない
	全体計	8.7	91.3
性別	男	9.9	90.1
	女	7.5	92.5
学校別	中学生	8.8	91.2
	高校生	8.6	91.4
男女別学年別	男中1	9.7	90.3
	男中2	9.4	90.6
	男中3	9.7	90.3
	男高1	9.8	90.2
	男高2	9.1	90.9
	男高3	11.9	88.1
	女中1	8.9	91.1
	女中2	7.0	93.0
	女中3	8.0	92.0
	女高1	7.6	92.4
タイプ別	女高2	6.2	93.8
	女高3	8.3	91.7
	R	10.8	89.2
	I	7.6	92.4
	A	9.3	90.7
	S	6.8	93.2
	E	10.3	89.7
分化度	C	7.6	92.4
	分化度大	7.4	92.6
	分化度中	9.2	90.8
希望進路	分化度小	13.9	86.1
	決まっている	10.6	89.4
	大体決まっている	8.8	91.2
	まだあまり決まっていない	7.8	92.2
将来の仕事	まったく決まっていない	7.6	92.4
	よく考えている	11.0	89.0
	大体考えている	8.6	91.4
	あまり考えていない	7.0	93.0
	まったく考えていない	6.2	93.8

最初に、中学高校の男女別に同調度の数値をみると、男女とも中2、高2という中間学年での同調性をもっとも低い値を示している。学年進行と職業・進路問題に取り組む際のテンションの質の変化を反映しているのかもしれない。

次に、「同調度」を、タイプ別にみてもみると、S、I、Cタイプに比べると、R、Eタイ

プのほうに「同調度がみられる」者が多い。

「同調度」を、分化度別にみても、分化度の小さい者のほうが、大きい者に比べて「同調度がみられる」者が多い。「同調度」を、進路決定や希望職業の明確さ別にみても、明確さの確かな者の方が、確かでない者に比べて「同調度がみられる」者が多い。「人気のある職業への同調度」における傾向は、この数値が大きい学生・生徒は、職業の世界を見る態度が常識的である可能性が高い。ちなみに、職業レディネス・テストと VPI 職業興味検査との両方を実施した大学生のデータ（工学部 3・4 年生 50 人）によると、この変数と VPI 職業興味検査の中で、関連する尺度である Ac 尺度（黙従尺度）との相関は.260 で統計的には有意な関連と見られている。

ここでは、他の学生、生徒と比較して、「人気のある職業への同調度」における傾向を捉える 1 つの手がかりを提供するものという位置づけである。多くの学生、生徒にとって「人気のある職業」はいわば広い職業の世界を探索する際の入門になるものであると考えられる。受検者自身がそうした職業への態度についてどう考え、どう対処していくのかを考えることの方が重要である。

10-3-3 「職業に対するユニークな関心を持っているか」（ユニーク性）

（1）基準の背景

この特別集計は、A 検査の項目の中で、第 5 列目に配された 6 項目についての回答のうち、「やりたい」という回答の数を集計するものである。

これらの 6 項目は、A 検査を構成する 54 項目について「やりたくない」という回答の度数分布が求められ、「やりたくない」という回答率の高い項目、すなわち、多くの学生、生徒に「人気のない職業」を調べ、6 つの尺度毎に基本的にもっとも「やりたい」という回答比率の高い項目を第 5 列に配している。「人気のない職業」に対して「やりたい」と回答する傾向から、「職業に対するユニークな関心を持っているか」を見ようとしている。最小値が 0、最大値が 6 ということになる。実際の集計では、回答用紙のチェック 2 の欄を利用する。手引き 30 ページには、次のように、この得点を大きく分けて 2 グループにして解釈するようになっている（図表 10-7）。男女別中高別の 4 グループについて度数分布をみると、男女差、中高差は見られない（図表 10-8）。

図表 10-7 手引きにおける「職業に対するユニークな関心」の判断の目安

A 検査 5 列目に対する「○」の数の解釈	男女とも
「職業に対するユニークな関心がみられる」	3 以上
「職業に対するユニークな関心がみられない」	2 以下

(2) 他の変数との関連

「職業に対するユニークな関心を持っているか」を示す 2 グループと他の変数をクロスすることによって、この特別集計の意味することを分析してみる。

(図表 10-9)

「ユニークな関心」を、男女別学年別にみると、男女の差はあまりみられない。中学の方が高校に比べると、「職業に対するユニークな関心がみられる」者の割合が多い。

「ユニークな関心」を、タイプ別にみると、R、S タイプに比べると、E、I タイプの方に「職業に対するユニークな関心がみられる」者の割合が多い。

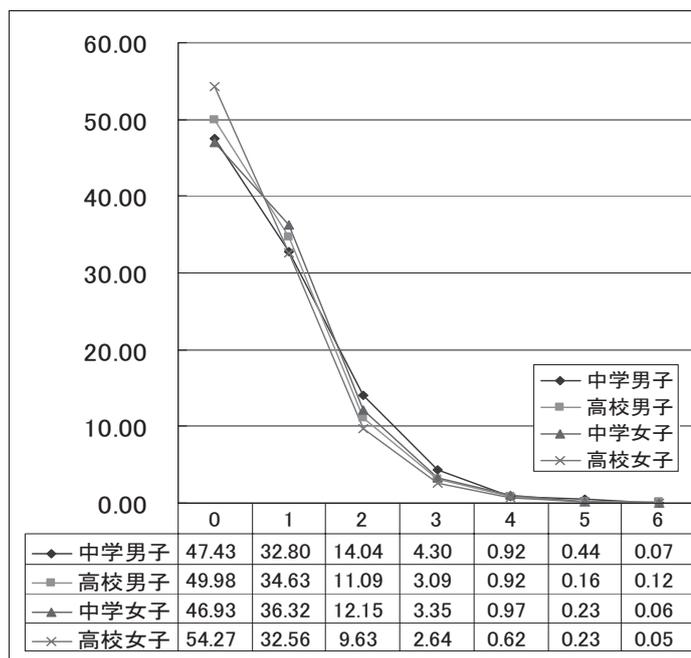
「ユニークな関心」を、分化度別にみると、分化度の小さい者の分布が他に比べ際立っている。すなわち、分化度の小さい者の方が大きい者に比べて「職業に対するユニークな関心がみられる」者の割合が多い。

「ユニークな関心」を、進路決定や希望職業の明確さ別にみると、明確さの確かな者の方が、確かでない者に比べて「職業に対するユニークな関心がみられる」者の割合が多い。

「職業に対するユニークな関心を持っているか」における傾向は、この数値が大きい学生、生徒は、職業の世界を見る態度が常識的である可能性が高い。ちなみに、職業レディネス・テストと VPI 職業興味検査との両方を実施した大学生のデータ（工学部 3、4 年生 50 人）によると、この変数と VPI 職業興味検査の中で、関連する尺度である Inf 尺度(稀有尺度)との相関は.088 で、ほとんど無相関であった。これは、VPI 職業興味検査の Inf 尺度が、人気のない職業への「やりたい」という回答とともに、人気のある職業への「やりたくない」という回答を集計しているのに対して、チェック 2 では、人気のない職業への「やりたい」という回答だけを集計している点や、大学生のデータが、男子工学部学生に限られている点など、今後検討する課題のあることを示している。

ここでは、他の学生、生徒と比較して、「職業に対するユニークな関心を持っているか」における傾向を捉える 1 つの手がかりを提供するものという位置づけである。受検者自身が他とは違った態度を形成していることに気づかないことも少なくない。職業への態

図表 10-8 「ユニークな関心」の学校別、男女別度数



度を手がかりにして、自分らしい感性や独特な知識やスキルの形成について考えるきっかけを持つことは重要である。ただし、「ユニークな関心」を、変な反応、多くの学生、生徒とは違う反応であるとネガティブに捉えることは避けるべきである。

図表 10-9 「ユニークな関心」と他の変数との関連

		ユニークな関心(割合%)	
		傾向がある	傾向がない
	全体計	4.4	95.6
性別	男	4.9	95.1
	女	3.9	96.1
学校別	中学生	5.2	94.8
	高校生	3.9	96.1
男女別学年別	男中1	5.8	94.2
	男中2	5.7	94.3
	男中3	5.7	94.3
	男高1	4.1	95.9
	男高2	4.1	95.9
	男高3	4.9	95.1
	女中1	4.3	95.7
	女中2	4.7	95.3
	女中3	4.8	95.2
	女高1	3.8	96.2
	女高2	3.0	97.0
	女高3	4.1	95.9
タイプ別	R	3.5	96.5
	I	5.4	94.6
	A	4.1	95.9
	S	3.8	96.2
	E	5.5	94.5
	C	4.3	95.7
分化度	分化度大	3.7	96.3
	分化度中	4.1	95.9
	分化度小	8.7	91.3
希望進路	決まっている	6.0	94.0
	大体決まっている	4.8	95.2
	まだあまり決まっていない	3.4	96.6
	まったく決まっていない	3.7	96.3
将来の仕事	よく考えている	6.2	93.8
	大体考えている	4.2	95.8
	あまり考えていない	3.0	97.0
	まったく考えていない	3.3	96.7

10-3-4 「たくさんの職業に関心を示しているか」(関心度)

(1) 基準の背景

(2) 他の変数との関連

「たくさんの職業に関心を示しているか」を示す3グループと他の変数をクロスすることによって、この特別集計の意味することを分析してみる。(図表 10-12)

図表 10-12 「職業への関心」と他の変数との関連

		職業への関心度(割合%)		
		多い	平均的	少ない
	全体計	15.9	67.9	16.1
性別	男	16.1	65.4	18.6
	女	15.8	70.5	13.7
学校別	中学生	17.4	66.8	15.9
	高校生	15.0	68.7	16.3
男女別学年別	男中1	17.4	60.5	22.1
	男中2	17.4	63.9	18.7
	男中3	17.8	66.1	16.1
	男高1	14.6	67.2	18.2
	男高2	14.3	65.2	20.6
	男高3	17.0	68.1	14.8
	女中1	16.9	69.3	13.8
	女中2	17.0	70.1	12.9
	女中3	17.8	71.0	11.2
	女高1	15.8	69.8	14.3
	女高2	13.4	71.8	14.8
	女高3	16.0	70.2	13.8
タイプ別	R	14.1	69.0	16.9
	I	16.1	65.6	18.3
	A	15.2	72.2	12.7
	S	15.6	69.5	14.9
	E	21.4	66.5	12.1
	C	13.9	65.2	21.0
分化度	分化度大	14.8	79.0	6.2
	分化度中	16.2	60.6	23.2
	分化度小	20.8	30.9	48.2
希望進路	決まっている	19.3	66.6	14.1
	大体決まっている	17.3	69.2	13.5
	まだあまり決まっていない	13.7	69.1	17.2
	まったく決まっていない	12.8	62.0	25.3
将来の仕事	よく考えている	20.5	66.6	12.9
	大体考えている	15.6	70.4	14.0
	あまり考えていない	12.8	68.1	19.1
	まったく考えていない	10.7	58.5	30.8

「職業への関心度」の度数分布を、男女別学年別にみても、男女の差はあまり見られず、中学生の方が高校生に比べると「職業への関心度」が高い者の割合が多く、男

女ともに同じような傾向である。男子では高 1、高 2、女子では高 2 が、「職業への関心度」が高い者の割合が少なく、男子高 2 では、「職業への関心度」が低い者の割合も多い。

「職業への関心度」を、タイプ別にみても、R、C タイプに比べると E タイプに、「職業への関心度」が高い者の割合が多い。C タイプは、「職業への関心度」が低い者の割合も多い。

「職業への関心度」を、分化度別にみても、分化度の小さい者は、分布の形は大きく異なっていて、分化度の大きい者に比べると「職業への関心度」が低い者の割合が多く、かつ「職業への関心度」が低い者の割合も多い。

「職業への関心度」を、進路決定や希望職業の明確さ別にみても、進路決定や希望職業の明確な者に比べると、明確でない者は、「職業への関心度」が高い者の割合が少なくかつ「職業への関心度」が低い者の割合が多い。

「職業への関心度」の高さは、積極性や進路選択への意欲を示している。進路選択への原動力として捉えて進路指導の中で利用することができるだろう。もちろん、ここでは、他の学生・生徒と比較して、どの程度「たくさんの職業に関心を示しているか」をしているのかの情報を提供するものという位置づけで、受検者自身がそうした状況をどう考え、どう対処していくのかを考えることの方が重要である。

10-4 まとめ

特別集計について、その背景となるデータや関連するいくつかの変数との関連を見てきた。

「曖昧な回答」傾向については、男女で大きな違いがある。男子は女子に比べると「曖昧な回答」が多い。中学・高校という差より男女差が大きいことは、進路選択においてその態度に男女差が存在することを示唆するものといえる。また、男子には、「曖昧な回答」が 0 という者が 4%程度出現する。これらの中には、少なくともこの種の質問紙法において、曖昧な回答をしないという構えを持って臨んでいる者が 2-3%程度含まれているものと考えられる。プロフィールの解釈のときに留意すべき点である。また、「曖昧な回答」傾向と分化度との関連性が指摘されている。両方の尺度の組み合わせた情報も対象の進路選択に対する態度を理解する際に役立つものと思われる。

「同調度」については、男女差がみられ、男子の方に、「人気のある職業へ同調度が見られる」者の割合が高い。また、男女とも学年を追って一方向への系統的な変化というものはみられないが、中間学年で同調度が見られる者の割合が低いという結果である。このように中間学年に進路選択に対する態度に変化があるということが普遍的なことであるなら、この現象をうまく進路発達と結びつける工夫が必要であろう。「同調度」と分化度との強い関連性および「同調度」が最終学年で相対的に高いという結果は、「人気のあ

る職業への同調度」と進路発達との関係を考えさせるものである。進路選択への関心を高めるような環境は、分化度の高めるような方向だけではなく、一般的な関心をも引き出すのかもしれない。

「ユニークな関心」については、男女差より、中高差のほうが大きい。特に、男子中学生で「職業に対してユニークな関心が見られる」者の割合が大きい。ユニークな関心ということで類推すると、タイプ別にみた場合、Aタイプなどでこの傾向が見られる者の割合が高いことも期待されるが、そのような結果は得られていない。進路希望や将来の仕事の極めて明確な者の中に、「職業に対してユニークな関心が見られる」者の割合が大きいという結果であるので、回答に対する構えの影響が強く出ているのかもしれない。この尺度の解釈には、更に関連する資料での検討が必要である。

「職業への関心」については、この尺度の分布の上で、0という値をとる者の存在に注意すべきであろう。男女差もみられ、男子は、女子に比べると、「職業への関心」の高い者の割合も低い者の割合も大きい。つまり、女子に比べると両端化の傾向が見られる。特に、男子中1、男子中2、男子高2では、その傾向が大きい。また、最終学年でも他の学年に比べるとその傾向が見られる。「職業への関心」を分化度や進路希望・将来の仕事の明確さとの関連などからみていくと、「職業への関心」が、進路選択に関する混乱や無関心を反映しているようである。別な言い方をすると、「職業への関心」が高まることは、進路発達と極めて関連が高いことを示している。

これらの特別集計を VRT の結果として得られる職業興味や自信度のプロフィールや DPT の特徴あるいは、それらから得られる職業や職業の解説などとともに、回答の傾向に見出されたこれら職業への態度についての情報も含めてキャリア教育の中で自己理解や職業理解の素材として活用することが期待されている。